



159  
86  
3

159-Ka86-3ウ  
1200500726987

始





66. 112. 189. 318.

216



159  
KA86

3

加藤咄堂講述



修養大講座

第六卷



新菜根譚

樵筆  
時談  
實童  
語觀  
抄教



修養大講座 第六卷 目次

新菜根譚

序 說

- 一、新菜根譚の名と内容
- 二、作者石天基

上、聯 瑾

- 一、德業、境遇(三)——二、謙讓、寬容(五)——三、自責他怨(七)——四、施恩、爲善(二〇)——五、有餘、有暇(三三)——六、心地、性天(四四)——七、慾、食(二六)——八、清閒、紛擾(一九)——九、衣食、酒色(三三)——一〇、報答、慎修(三三)——二、說長、施恩(三五)——三、吃虧、侮我(三七)——三、知足、多求(三六)——四、伶俐、混沌(三九)——五、耕讀、勤儉(四二)——六、改過、安分(四四)——七、無聊、不達(四三)——八、對君子小人(四四)——九、緘口、惜陰(四七)——一〇、古人水、骷髏詩(四九)——三、說法者、達觀者(五〇)——三、惜費、受享(五一)——三、做做、閒閒(五一)——二、陰功、顯禍(五二)——二五、心不馳、身制慾(五三)——二六、撐天大柱、涉世神方(五五)——二七、住心、閉口(五五)——二八、怒氣、勞心(五九)——二九、覺字、夢看(六〇)——三〇、布被、菜根(六三)——三、卿相、乞兒(六五)——三三、留福、種心(六六)——三三、快意、傷心(六七)——三四、忍心、緘口(六八)——



三、淡薄處、馳騁時(七)——六、榮辱、死生(七)——七、守心、聽命(七)——八、天理、機謀(七)  
 一、完、佛祖、神仙(七)——四、炎涼之態、妬忌之心(七)——四、事勢、機緣(八)——四、創  
 業、守成(八)——四、仁人之言、君子之交(八)——四、天神(八)——四、世事、人情(八)——  
 四、擔當、報告(八)——四、真學問、大文章(八)——四、酒、花(九)——四、塵心滅、善念生  
 (九)——五、公私二語(九)

中、紳 瑜

九四

一、多福、多壽(九)——二、聖賢、豪傑(九)——三、實心、虛心(九)——四、志、心(十)——  
 五、四不可(十)——六、反省六知(十)——七、讀書(十)——八、真心即奇策(十)——九、太和  
 元氣(十)——一〇、忍辯(十)——二、平以長久(十一)——三、人生一日(十一)——三、穿着鼻孔  
 (十一)——四、儒佛爭辯(十二)——五、說得、行得(十二)——六、十中一不(十二)——七、和而莊  
 (十二)——八、召福遠禍(十二)——九、貧者之功德(十二)——一〇、順逆一視(十二)——三、妄想  
 (十二)——三、恐懼(十三)——三、觀人四法(十三)——四、作文之法(十三)——五、心地涼爽之藥  
 (十三)——六、吉凶(十三)——七、貧時、富時(十三)——六、不到不知(十四)——二、成業刻苦  
 (十四)——三、三論三要(十四)——三、惡中之善、善處之惡(十四)——三、自己檢點(十四)——三、  
 倚勢恃智(十四)——四、天堂、地獄(十四)——五、聰明誤事(十五)——六、一忍一恕(十五)——七、  
 不勞無用之人(十五)——六、古之學者、今之學者(十五)——六、安足(十五)——四、三不(十六)——  
 一四、心中矛戈(十六)——四、不妄語(十六)

下、家 寶

一六

一、敬上(十六)——二、君恩(十七)——三、親恩(十七)——四、尊長(十七)——五、和妻(十七)——六、  
 教子(十七)——七、治家(十八)——八、待人(十八)——九、安分(十八)——一〇、善惡(十八)——二、眼  
 正心空(十九)——三、山容、花態(十九)——三、父老兒童(十九)——四、窮通(十九)——五、鳥立  
 魚行(十九)——六、靜中動、忙處閑(十九)——七、談禪、說鬼(十九)——八、今人、古人(二十)——  
 一、九、活地獄(二十)——二〇、仙佛逍遙(二十)——三、會心處(二十)——三、天心妙道(二十)——三、  
 三杯一枕(二十)——四、可惡人是可敬人(二十)——五、骨化顏開(二十)——六、閒情傲骨(二十一)——  
 一七、皆禪入道(二十一)——六、心如朗月、性似寒潭(二十一)——元、入市而歎、反觀而照(二十一)——  
 一三、醒夢、收糧(二十一)——三、煩勞滅、清氣存(二十一)——三、世態、人生(二十一)——三、清遊、  
 盛會(二十一)——四、一醉一飽(二十一)——五、茶食草薦(二十一)——六、雲無心、鳥倦飛(二十一)——七、  
 實心、心虛(二十七)——六、庭花籬菊(三十一)——元、老來自覺(三十一)——四、不愧此心(三十一)——四、  
 隨緣、靜觀(三十一)——四、眼淨、心平(三十一)——四、尙友以天(三十一)——四、清福、至公(三十一)

筆 疇 樵 談

二四

序 言

二四

筆 疇

二四

樵 談

二六



實語教

一、序言……………三〇

二、本文通釋……………三〇

三、女實語教……………三五

四、いろは歌……………三五

童觀抄

序說……………三九

一、本邦書籍の由來……………三九

二、文教の興隆と書籍の刊行……………四三

三、童觀抄と引用書籍……………四九

本文……………五〇

新菜根譚

上、聯瑾

中、紳瑜

下、家寶



# 新茶根譚

## 序 說

### 一、新茶根譚の名と内容

新茶根譚由

『新茶根譚』は茶根譚以上に現代に適切なる訓示が多いと思ひます。前に講じました明の洪自誠の『茶根譚』前後兩集に對して、『新茶根譚』と名づけたのでありますが、これは前の茶根譚の時にも述べましたやうに、

支那では明末清初にかけて、簡潔なる語句を用ひて隨感隨想的に修養の規箴を表現せられた清言が、社會の一面に流行したもので、其中比較的古いのが茶根譚であり、且つこれが最も廣く世に行はれ居りますから、後人が、洪自誠のそれに擬し、或は續茶根譚と名づけ、或は新茶根譚と呼んで居るのでありますが、今、此の講座に『新茶根譚』の名稱を附したのは、これらのものを大成したともいふべき清の石天基が集訂するところの『傳家寶』中より『聯瑾』『紳瑜』の二篇を中心として、更に諸他の各篇中より現代人の修養に資すべきものを選び、『聯瑾』『紳瑜』以外のものは『傳家寶』の名に基き、單に私に『家寶』と題し此の三篇を分つて講述することとしたのであります。

『傳家寶』の一書、總べて四十卷、收むるところ一百二十種といふ浩瀚なものでありますが、此の中、最も茶根譚的なものとしては『聯瑾』と『紳瑜』の二篇が推されるので、就中『聯瑾』は、我が嘉永五年に、宗



魯聖謨（名は洋）といふ儒者が、『清、石天基訂集、家寶聯珠』といふ書題で刊行し、長戸得齋、正木雜窓、土方寛、大沼枕山等の諸學者が序を寄せて大に推稱して居り、また明治四十三年に、杉原夷山といふ人が『聯珠』と『神瑜』とに採つたものを『標註續茶根譚』と題して松山堂書店から發行して居り、また『醉古堂劍掃』と『聯珠』とを合せたもので、蜂谷柳莊、清泉芳巖兩氏訓註の『新撰茶根譚』といふのが、大正九年に大鑑閣から出版されて居る、といふやうに、石天基の『傳家寶』は、支那、日本に、可なり珍重せられて來たものであります。

原著表紙の扉、及び每篇標題の下に『人情世事の須知。修身齊家の要法』と一聯の句が記されてある如く、まことに人生、世に處する上に、また一身一家の上に、極めて須要なる修養訓であり、而も格言、俚諺、短句多くは對聯の形を取り、口に誦し易く、耳に聽き易く、身に行ひ易からしめるやうに用意されて居るものであります。石天基が、特にかうした用意に出でたわけ、及び『傳家寶』と名づけた所由は、その自序の言葉の中に、明かに見られるのであります。彼れの父、維石大人が、手抄の庭訓二十餘頁を彼れに授けて謂ふに、

## 傳家寶の名

言、淺近なりと雖も、乃ち濼安知府青令蕭公が撰して民を諭し教ふる者、惟れ心を正しうし倫を敦うするを以て本と爲す。實に吾人が傳家の寶なり。

と、天基はそれを讀んで服膺したが、

語深奥ならず、即ち婦人小子も聞いて皆な知り曉る。惜むらくは語の多く無きことを。予、因つて愚昧を揣らず、做つて十七を添へ、妄りに十頭を分ち、首めに人倫を重んじて、先づ事親、敬上、和妻、教

子の道を以てし、次いで世務に涉り、繼ぐに、治家、待人、重儒、安分の法を以てし、復た行善戒惡を以て言行の總要と爲し、撰集して部を成す。

と言つて、爾後次々に、得るに従ひ手にまかせて、つひに大著を成すに至つたもので、自ら之れを廣く勸奨して、

願はくは世人、各々案頭に置いて、時々に関し體行せば、俱に福壽の享有つて、災難の侵無からむ。即ち奇珍異寶も未だ必ずしも此れに勝らじ。

と言つて居ります。その『傳家寶』の名の由つて來る所、ならびに彼れが選集の用意態度の眞面目、亦た見るべしであります。原著の卷頭には、楊州府の知府事、界園、左必蕃の序が掲げてありますが、その中に、最も喜んで天基の傳家寶を讀む。其の言言通俗にして、事事情を得るに因つて、愚夫愚婦と雖も盡く曉然たる可し。昔に警世の木鐸たるのみならず、利人の舟楫なり：世人は毎に鎖家の珍寶を求めて、以て災を消し福を祈る。曷んぞ案頭此の一書を置き、自己朝夕熟記して體行するに若かむ。世人は毎に厚く金資を積んで以て子孫に貽さんとす、又曷んぞ此の一書を授けて、子孫をして朝夕熟記して體行せしめむに若かむ。因つて題して修齊の至寶、銘心鏤骨と曰ふ。

と言つて居るのは、能く天基の精神と本書の眞價とを道破せるものとして、あながち溢美誇張の言と謂ふべきではないと思はれます。我が大沼枕山も、

此の書、文理簡易、字句工儷、既に聖經の古奥に非ず、則ち市閭の人、苟くも文字に涉る者、皆な之れを日用に施す可し。之れを行つて處世の法を取り、之れを誦して修文の要を採らば、貧者も以て富む可

## 傳家寶の序



く、愚者も以て智たる可し。傳家寶、果して虚稱ならざるなり。

と稱讚して居ります。本講の中核を成す『聯瑾』『紳瑜』の題名に就いては、石天基の原序に『玉の至美なるもの、瑜と爲し瑾と爲す……美瑜を將つて時に紳に佩ぶ矣……瑜瑾駢聯して出だし、賈胡をして之れを見しむれば、寶愛して已まず』とある言によつて、その意はおのづから明白でありませう。『楚辭』に『瑾を懷き瑜を握る兮』といふ句があり、美德を抱ける君子を形容する成語として用ひられるやうになつて居ります。瑾も瑜も共に玉の最も精美なるものを云ひ、紳は大帯といふ字、文官の帯を云つたものですが、美玉を帯に佩びるとは、嘉言、金句を身に體し實行するの義に喩へたので、石天基は、

嘉言法語は詢に美と云ふべし矣。美斯れ愛し、愛して斯れ傳ふ。要は言を知ることの多きに在らず。只だ人の力行何如に在るのみ。徒らに寶愛して、身に體し力行せざれば、猶ほ錦衣華服を以て背て躬に着けず、惟だ箱櫃に疊んで、轉た衣を製すること少許なるに若かざるがごとけむ。

と言つて居ります。いかに嘉言善語であつても、實なき巧言令色では、瑾瑜どころか、ガラス玉ほどの價値さへもない物となつてしまふでありませう。聯はツラヌといふ字で、多勢の人が一句づゝ作つて成す詩歌を、聯句詩歌などともいひますが、對句、偶句すなはち二句一對の意にも用ひられ、對句を書いて柱に掛けた牌その物を聯といふやうにもなつて居る。こゝに講ずる『聯瑾』『紳瑜』は、語句長短の別はあれど、みな二句一聯の體を成して居るので、適宜の句を採つて、謂はゆる聯として居室に掛け、日夕見て身に體するには最も恰好のものであります。

なほ、『傳家寶』中には、能く似た形のもので『快樂紳言』『快樂聯瑾』と題した篇もあり、これと區別

して『俚諺聯瑾』とも呼ばれるもの、それが即ち今講ずるもので、單に『聯瑾』といへば之れのことでありませう。

原書載するところ、『聯瑾』は總て二百二十九聯、『紳瑜』は總て三百八十五聯と算へられますが、他の諸篇からも抜粋したいものも少くないので、到底限られたる紙數に、全聯残らず擧げて解説するわけには参りません。中に就いて、看誦上興趣に富み、修養に適切なものを、成るべく多く選み採つて、簡要を述べることいたしましたことを、諒承せられたいのであります。

## 二、作者石天基

『傳家寶』の巻首に『天基、石先生傳』と題する一文が掲げられてありますが、それは、傳といふには甚だ不適當のもので、内容は一種の數徳文と見られ、その生死、本貫、出處進退の行實等、一も明確な具體的記載はなく、雲龍を望んで僅かに片鱗を認めると云つたやうな物足らなさを感ぜないわけにはゆきません。このほかの序文や、像の贊、七十壽賀の詞等により、當然明白の部分を探つて綜合して見ると、大體次の如き人物と見ることが出来るのであります。

姓は石、諱は成金、字は天基、惺齋と號し、晩年には石年翁と稱す。揚州——今の江蘇省揚州府——衍橋墅の名族で、世に揚州の石先生と呼ばれました。その出生は『重刻傳家寶俚言自序』の末尾に『乾隆四年仲春望日、八十一歳天基老人石成金撰寫』と署して居るのによつて按ずれば、明末永明王の永曆十三年（皇紀二二二一九）我が國は、後西天皇の萬治二年、徳川四代家綱將軍の世に當ります。永明王といへば明朝最後の



天子で、大陸は既に事實上悉く清の天下と成り、明とは只だその名のみを残骸に止めて居るに過ぎなかつたのであります。清の太祖と稱せられる愛親覺羅（愛親は金を意味し覺羅は姓氏の義）、奴兒哈赤（奴兒哈赤は満家の諸部屬を平げて、曼珠利利大皇帝と仰がれるに至つたのは、明の神宗帝萬曆四十四年）、我が元和二年大阪落城、豊臣氏滅びた翌年で、石天基出生の此の年より四十四年前のことであり、太祖に次いで太宗、世祖、更に聖祖と英主相承けて、聖祖が完全に天下を一統し、康熙元年と改曆して君臨したのは、この年から三年目、天基四歳の春のことであります。

朱舜水、陳元善等の明儒が我國に亡命歸化したのは、天基の生れた此の年であり、これより六年前に來朝した隱元禪師の爲めに宇治の黄檗山萬福寺が建てられたのも此の年。近松の傑作『國姓爺』劇の主人公、鄭成功が我が國に援軍を乞うて來たのは此の前年、その臺灣に占據して掉尾の威を振つたのは此の翌々年のこととあります。

かうした時に生れて、聖祖の世、康熙六十一年、次の世宗の世、雍正十三年、更に其の次、高宗の世、乾隆四年に八十一歳（乾隆は六十年つゞく）であつたといふ石天基は、正に清朝の黄金時代ともいふべき盛世を生きぬいたわけであります。

この前後に顯はれた學者の代表的人物としては、經學に、顧炎武、閻若據、錢大昕。史學に黃宗義、金祖望。詩文に、王士禛（漁洋）吳偉業（梅村）侯方域（朝宗）方苞（望溪）。戯曲に金聖歎等が擧げられるが、その學風は唐、宋、元、明のそれとは大に異なり、且つ何となく見劣りするものがあると謂はざるを得ないのであります。

蓋し、明代には、程朱の性理の學説と王陽明の知行合一の説とが、盛に並び行はれたが、やうやく流弊を生じ、學者は一般に事實眞摯の學究を忘れて、抽象的なる理論……空理空論に走るやうになつた。これが行動として、明末、清初に至つては、すべて空論を捨て、立論せんとせる風が盛になり、謂はゆる漢學の勃興となつた。漢學とは、漢代以上に溯つて實證するといふ意味で、宋、明の理學、心學に反對の思想を眞つ向にかざしたものであります。この漢學熱から醗酵された清朝の學問は、考證學、音韻學、史學、地學、天文學、算學、樂律、制度典章の學、金石學、等と成り、前代未だ見ざりし特得の文化を展開して、『四庫全書』『古今圖書集成』『佩文韻府』『康熙字典』などの大きな業績も遺されたのであるが、あまりに實用を尙び、考證、訓詁の末節に行き過ぎて、哲學、心學の方面を極端に度外するといふ偏頗な流弊を招くに至つたのであります。

かうした風潮に處し、溪谷の大石逆流すといふ如く、毅然として漢學に反抗した一人者に、桐城の望溪先生方苞があり、孔孟、韓歐、程朱の正統道學を繼承するを以て自ら任じ、訓詁煩瑣の學徒を痛烈に排撃しました。此の一派の道學者の如く、表面に強く立つことはしなかつたが、此の漢學狂瀾の中に、泰然として動かさず、菜根譚の心學を倡道し、身を以て社會風教に貢獻したのが實に石天基其人で、亦た異數の存在と謂ふべきであります。

天基七十の壽賀を述べた唐紹祖の言葉の中に、

翁の學は、陽明、王先生の良知の心法を宗とす……且つ翁の性、內典（佛敎書）に精通し、自ら定慧を以て儒理に契合せしめ、詳かに金剛經を註して萬部を印送し、廣く迷津を度す。功莫大なり焉。



とあり、天基自らも序して、

西天の佛教甚だ多し、惟だ金剛經は是れ如來微妙の心法にして、乃ち禪宗の至寶なり。予、參悟多年、因つて金剛經石註一部を著す。

と言つて居るのに見ますれば、彼れは陽明學者にして、兼ねて禪に參じ、自己の人格を修養すると共に、自利利他の實踐躬行に終始したことが認められます。『傳家寶』卷頭の像に、江都縣知縣、熊開楚が贊をして居る語句に、

## 著者の人物

清たる其の眉、秀たる其の目、心に珠璣を藏すること千萬斛、其の冠を儒にし、其の服を素にし、一生の仁義、自ら謹束す……半ばは昔日の淵明の如く、半ばは今時の茂叔に似たり。

とあり、陶淵明や周茂叔に似たやうな人格でもあつたらしいのですが、更にこれを親しく我が中江藤樹、下つては心學道話の創始者石田梅巖あたりに比すれば、むしろ善くその面目を偲び見ることが出来ると思はれるのであります。即ち石天基は幼にして聰明、識者共にその早慧なると欽し、長じて學問を修むるや、君子みなその脱成を卜したといふ。第一の美點は、親に至孝なることで、父の維石公が、たま／＼血を吐いて病の床に就いたときや、母の蕭氏が悪性の感冒に臥したときの如き、天基は妻の周氏と共に、親しく湯藥を奉じて、不眠不休の看護を爲し、更に身を以て親の命に代らんことを、朝夕、天に祈り、口に肉や葷酒を斷つこと十年に及んだ。その送喪に子としての誠敬を盡したことも、世人の感嘆止まざる程のものであつた。

平生、身を持つること恭謙で、宗族雅睦し、交友に信義篤く、正言を以て人を教へ、貧窮を見て救済することを懈らず、路を修し橋梁を設けるなど、世を利用するの功績は、あげて算ふるに遑なく、その溫き情けは

獄中の四人にまで及ぼされたといふ。しかも名利に恬淡、志を詩書に存し、老齡に及ぶも未だ嘗て圖書筆墨を廢せず、性、林泉を好み、情を花酒に娛しましめ、寒暑を厭はずして杖を四方に拽き、自然に優游して身心を養ふことをやめなかつた。『傳』の一節に、

道貌嚴々、之れを望めば寒霜凍雪の如く、徳容藹々、之れに親しめば旭日和風の若し、謂つべし恭人と。と讚歎して居る、以てその人物風格を想見するに足ると申すべきであります。其の撰述に對しては

前には金經（金剛般若波羅蜜經）を釋して、理、佛教を明かにし、今、家寶を著して、事、儒林に關す。

詞は諺語童謡を外にせずして、理は經天緯地を包ぬるに足り、文は魚兔草木を遺さずして、道は修齊治平に通ず可く、事は常を以てして知り易く、樵夫をして耳を傾けしむるに足り、言は粗にして曉り易く、牧子をして點頭せしむ可し。

と言つて居ります。なほ天基の著述で未刻のものに、

聖學正宗。四書淺說。（二十七卷）四書字考。今金集。（四十卷）暮晨鐘。（一百卷）天開眼。（四十

卷）補天石。（四十卷）新聞集異。（十卷）其他、總て三十二種、二百三十卷。

あつたといふことでありますから、その熱意と精力のほど亦た感歎に値するものありと謂ふべきであります。

『傳家寶』の刻成つて公刊されたのは、卷頭、左必蕃の序に『康熙四十六年清明後甲子日』とあるに見て、天基四十九歳の時であり、我が國は徳川綱吉五代將軍の代、富士山爆發、寶永山が突出した寶永四年（皇紀二三六七、西紀一七〇七）であります。これが前にちよつと申したやうに、高宗帝の乾隆四年、天基八十一



歳の時にまた重刊されて居るので、初版以後三十餘年間の述作を、此のとき大に増補されたものと想像せられます。我國への傳來は明かではありませんが、徳川幕府の中期以後、或はずつと末期に近い頃であらうと思はれるのであります。

尙ほ本書の採録講解等に關し、『新撰茶根譚』選者の一人たる清泉芳巖氏が多大の援助を與へられたことを、茲に付記して長く謝意を表して置きます。

## 上、聯 瑾

### 一、徳業、境遇

徳業。常看勝如我者。則愧恥自増。境遇。常看不如我者。則怨尤自息。

徳業は、常に我れ如り勝る者を看るときは、則ち愧恥自から増す。境遇は、常に我れに如かざる者を看るときは、則ち怨尤自から息む。

徳業は、學徳事業で、教育勅語に御示しになつた『學ヲ修メ業ヲ習ヒ、徳器ヲ成就』することでありませう。學ぶといふ語は、マネブの義であつて、先覺長上の修め得たところを、見たり聞いたり、心に思ふたりして、その通り真似ることより始まり、つひにはそれが全く我がものとなり、自己の知識才能となつて自由に活用され、自己の人格となつて世のため人の爲めに貢獻される。それが徳業であります。明治天皇の御製に、

學び舎に入りにし日よりうなひ子が

ものいひさへもかはりけるかな

と仰せられてある如く、入學一年の幼童が、先生が言ふ通り『ハナ』『ハト』と真似して言ふことから始めて、早くも小さな人格に、變化向上の基礎を築き、次第に助長して遂には天下の偉材とも成るといふ如く、



萬事活學問

目上、先輩を鑑として學ぶといふことが最も大切であります。學ぶといふことは、學窓や書物などと限つたわけではなく、人生、社會、何事も皆な活學問であり、學ぶべき先輩は、いつでも多く見出されるので、學徳向上の一路は無限と申すべきです。ですから小成に安んじ、自負自尊の窠臼に陥ち込むのは禁物で、絶えず自己以上の徳業ある人格を仰ぎ、自己を比べ見ることです。すると、我が及ばざることを慚愧するの念が生じ、愧を知るところに、發憤があり、發憤あるところに、いよ／＼向上の路あり、かくて大成の高峰を窮むるに至るのであります。

ところで、これは精神的向上の一面であつて、他の一面、物的方面の生活、即ち境遇に於ては、此の反對に、上を見ないで下を見て、分を知り心を安んずるのが、これ亦た一の修養法であるといふのが次の句であります。

車上の人と  
徒歩の人

およそ人生の事、すべてが相對的に比較分別することによつて價值づけられるのですが、ソコには兎角自分勝手の利己的私情を中心とするので、之れを得ては惑溺し、得ざれば不平不満を鳴らし、『怨む』即ち人をうらみ他をとがめ立てして、世の中に我他彼此の暗黒面を塗り出だすのであります。ソコで常に『我れに如かざる者を見る』上見れば限りがないと同時に、下見ればやはり限りがない。街頭に自家用車をアウブウ奴鳴らせて疾驅する人も多いが、テク／＼、トボ／＼と蠢動するかのやうな人々は更に多い。自分一人ぢやないと思へば別に癢に觸ることもないわけでありませぬ。

しかし、今申す自己中心の考へが先きに立つのが困りもので、他人の乗つて居る自動車を見るとイヤに腹立たしく思ふ者が、今度自分が急いで車を飛ばせる時には、路上の徒歩連中が、邪魔物に見えてイラ／＼す

ると云ふ風になるものでこれでは世の中はどうしても明朗にならないのです。

こゝで、自分よりなほ以下の境遇に、如何に多くの人々があるかの事實を思ひ、引きくらべて見るならば、おゝ氣の毒など、一片同情の念が萌し、自分がヨリ幸福なる境遇であることを感ずるにより、不平不満の影は消えて、安らかな心を保つことが出来るといふので毎度申します。

上見れば及ばぬことの多かりき

笠きてくらせ人の世の中

で、境遇上の安心満足は此の考へで得られるといふもの、しかしながら、

下見れば我れにまさりし者はなし

笠とりて見よ天の高さを

で、徳業上の修養はこれではなくてはなりません。

一、謙 讓、寬 容

處世讓 一步爲高。退步即進步張本。待人寬 一分是福。利人實利己根基。

世に處して、一步を讓れば高きを爲す。退歩は即ち進步の張本たり。人を待つに一分を寬うすれば是れ福。人を利するは實に己を利するの根基たり。

自ら謙遜して、何事も他人に一步を讓る態度であれば、他人も亦た我れを推すことになる。即ち自ら卑



することが却つて自らを高くする。退歩は進歩の張本たる所以である。また寛容にして他を許し、他の爲めを計れば、他日必ず我れを徳として、また我れの爲めに計り、期せずして我れの幸福を來たす。利他は同時に自利の基を成す所以である。といふのが此の一聯の要旨であります。

下がるほど人の見上げる藤の花

實るほど頭のさがる稻穂かな

等の教訓句と共に、ゆかしき謙讓の徳は、人のよく承知するところではありますが、實際には謙徳高き人は、あまり多くは居ないといふのは何としたことでありませう。それは前に申した己れ中心の私情——我見、我慢といふヤツがわざはひするからであります。實に此の我見こそは、人物の大小淺深を見るべきバロメータ

利己的小我  
一であるとしてよいので、をさな兒時代には只だ自分といふものがあるのみで、自分のほしい物ならば人の持つて居る物でもよこせといふ。それがやゝ長じて兄弟姉妹と協調して一步を譲ることを覚え、友達とも相譲り相容れるといふ心の廣さ大きさが出来る、といふ風に、一家の長となれば、自分一己を空しうして一家に獻げることにより、よく一家全體を自己一身に抱容する。それが更に隣人に及ぼし、郷黨に及ぼし、社會、國家、人類に廣く及ぼすといふに至つて、人物が大きいといはれ、人格が高いといはれる。つまり主觀的の我を無くする程度と反比例的に、客觀的の我の偉大さを遞加することになる。小我を殺して大我に生くるとは此のことであり、太山は土壤を譲らず以て其の高きを成し、巨海は細流を擇ばず以て其の大を成すといふ如く、自己を空しうして總てを容るゝこと天地宇宙と一如なるに至つて、大我は窮まれりと謂ふことが出来るのであります。

無我の大我  
「實に人を利するは己れを利するの根基」といふと、何だか算盤勘定づくで、結果を豫想期待するかのやうに響くが、決してさういふ道理ではないので、今いふ無我の大我、自他一枚なるところに、土壤が太山を築くが如く、細流が巨海を成すが如く、自然にさうなるのです。これが謂はゆる天地の大道であります。

道元禪師の至言  
こゝに道元禪師の至切なる言葉をあげて、翫味體究の資に供しておきます。  
愚人謂はくは、利他を先とせば、自らが利省かれぬべしと、爾には非ざるなり。利行は一法なり。普く自他を利するなり。  
他をして自に同ぜしめて後に、自をして他に同ぜしむる道理あるべし。自他は時に隨うて無窮なり。(修證義)

### 三、自 責、他 恕

人雖至愚。責人則明。以責人之心責己。則寡過。人雖聰明。恕己則昏。

以恕己之心恕人。則全交。

人は至愚なりと雖も、人を責むるときは則ち明かなり。人を責むるの心を以て己れを責むれば、則ち過ちを寡うす。人は聰明なりと雖も、己れを恕すときは則ち昏し。己れを恕すの心を以て人を恕せば、則ち交りを全うす。

わが家の障子と隣りの障子

これは甚だ読み易く、會し易い聯句であります。よくいふ、我が家の障子の破れ目から覗いて、隣りの障



子の破れを笑ふと云つたやうな馬鹿々々しいことをしてゐながら、自ら氣づかないで居るのが、多くの人の常状であります。しかも他人の事を見ることは、如何な愚か者でも頗るよく見る。則ち明なり、明察、むしろ苛察といふほどに、他人のこととなると責め立て、とがめ立てするが、自分のことには一向おかまひなしである。この外に向ける眼を内に向けて、他を責める苛察の明を以て自分を責めるならば、決して間違ひはない、といふのが前句の意味であります。

自分を忘れた豚の隊長

これに就て面白い寓話があります、それは或る所で、二十頭の豚が一隊となつて川を渡ることになり、一番大きい隊長の頭が號令一下、隊伍堂々といふ風に向ふ岸へ、兎も角渡りついて勢ぞろひをしたが、ソコで隊長豚が、落伍者はないかと點呼をやつた所が何度繰り返して見ても十九頭しか居ない。ハテ皆なで二十頭である筈だが、どうしたワケだらう。さては一頭押し流されたかと、大へんな心配だ。と、中に少し利巧な一頭の豚が『やアい。隊長は自分を算へるのを忘れてらアい』とやつたので、ドツと來て、隊長殿飛んだ大恥をさらしたのである。他人の事のみをあげつらつて、全く自分を忘れて居る多くの人は、何のことはない此の隊長豚の仲間と謂はれても致し方がありません。

後句も、内容は同じ意を對句にして裏づけたもので、どんなに聰明な人でも、自分の缺點を省み覺ることは昏くして、頗る寛大に恕してゐます。此の寛恕の心をそのまゝ、他人に向けて、他人の立場に同情し、太ていの事はゆるして責めないやうにするがよい。さうすれば相手の良心と反映して好ましき結果を見ることになり、交友の道を完うすることが出来るといふのであります。

杜詩貧交行

唐の杜甫（號子美）の詩『貧交行』の一首は古くより人口に膾炙せられて居るものですが、初學の人の爲

めに示せば、

手を翻せば雲と作り手を覆せば雨

紛々たる輕薄何ぞ數ふるを須ひむ

君見すや、管鮑貧時の交を

此の道、今人は棄て、土の如し

といふので、此の詩は、杜甫が都に出て文官試験に應じ、苦學惠まれずして落第したときに、今まで寓居して居た舊交の友が、急に態度を一變して顧みなくなつたので、杜甫はその人情の冷暖反覆、測り難きことを痛歎して此の詩を作つたので、一掌を上下するやうに、雲となり雨となり、變態輕薄少しも頼みとすることが出来ない、それにつけて昔の管鮑の親交の如き眞實が思はれるが、今時の人情では、それは土芥の如く打ち棄てられ、全然期待することは出来ないとの述懐であります。

管鮑の交り

管鮑とは、春秋時代の五霸の中で最も傑出したといはれる齊の桓公に仕へ、名宰相と稱せられた管仲と、その友の鮑叔とをいふので、この二人は、まだ青年時代、肝膽相照して親交を結んだが、管仲は才氣拔群であり、鮑叔は温厚篤實の人であつた。二人は協同して種々の事を爲したが、管仲はいつも自分の利益を獨占して、鮑叔を裏切るやうなことが、しばしばあつた。が、鮑叔は、管仲は自分よりは一層貧乏だから仕方がないとか、彼れには母があるから、多く利を取るのは當り前だとか、善意の理由、條件をつけて、決して責めることをせず、寛恕してますます親しくし、互ひに扶け合ふやうにしてゐた。

その後、鮑叔は早く出世して、齊の桓公に重く用ひられる事になつたが、自分よりは管仲こそ宰相たる



大器であると、極力、桓公に推薦して登庸せしめ、以て齊の覇業を完遂した。管仲嘗て曰はく『我れを生む者は父母なり。我れを知る者は鮑叔なり』と。本文の一聯に於ける範例として、『管鮑貧時の交』の如きは、蓋し理想的話頭でありませう。

#### 四、施 恩、爲 善

施恩望報。勢必成仇。爲善求知。弊將得謗。

恩を施して報いを望めば、勢ひ必ず仇を成す。善を爲して知られんことを求むれば、弊、將に謗りを得んとす。

天地自然の姿

高く眼を着けて觀じ來れば、天地自然はそのまま恩の世界で、何ひとつとして、互ひに扶け合ひ恵み合ひして存在し生活してゐないものはないのであります。また宇宙間歴然たる理法は少しもゴマカシといふものがなく、萬物萬象そのまま、正善の姿ならざるはないとも見られるのであります。随つてその間に在つて、天地人の三才と稱せられる人も、本然の性として、自然の妙理妙體をソックリ具現する一箇の小宇宙、小天地であると謂ふことが出来るので、究竟、われ／＼の身心そのものが、恩の世界そのものであり、善の天地そのものであるといふことにも歸結せられるのであります。さうしますと、人は恩を施すのが當り前であり、善を爲すのが當り前であると申さねばならないのであります。然るにわづかな小我中心の恩義を人に施して、オレがアレだけにしてやつたのに、アイツ感恩も報謝もせぬ。恩を仇にするヤツだ、なんかといふ聲を、世

引偽善は聞取

間にはザラに聞くことであるが、これは天地の恩を私する者であります。また少しばかりの善事を爲して、コレだけにしても、世間のヤツは一向ほめて呉れぬ、なんかと不満不平をいふのも、自然の公理を勝手に聞取引した暗い人間といはねばなりません。

報いを豫想しての慈善ならば、それは偽善であります。偽善は利己的觀念に出發する。己れを利するといふことは、ソレだけ他を損するわけですから、かうした慈善は、結局に於いて人の怨みを受け、謂はゆる恩を仇の結果を見なければなりません。

同じ根本意義から、善事を爲しても、その報酬として名譽と引き換へにしようといふ條件附のものであるならば、これ亦た自他を欺くものであるから、名を得んとの期待は、反對なる謗りを招くは必定であります。

わが恩を仇にて返す人あらば

またその上に慈悲をほどこせ

知恩人は報恩人

この道歌の如くゆかねばウソであります。しかし、恩を受けた方からいへば、やはり天地自然の恩の世界、善の世界に存在する根本意義からして、絶對無條件、知恩感謝に生きぬかなければ、是れ亦たウソであります。禪哲の語に『知恩の人、是れ報恩の人』とある、かう行かねば本當ではあられません。

手をやれば其手をたふすふくべかな (恩に仇)

切りに來た手を切り返すすき哉 (仇に仇)

水貫ふ日頃の禮や冬牡丹 (恩に恩)

手折るゝ人に香るや梅の花 (仇に恩)



悲しがる秋もめでたう菊の花 (圓 滿)

### 五、有餘、有暇

待有餘而濟人。終無濟人之日。待有暇而讀書。必無讀書之時。

餘り有るを待つて人を濟はんとせば、終に人を濟ふの日無からむ。暇有るを待つて書を讀まんとせば、必ずや書を讀むの時無からむ。

『人に施すなんて、自分らはそんな身分ぢやない。もう少し稼いで餘財が出来てからマア少しは何とかしよう』と云ふやうな聲を、實際しばし耳にすることがありますが、さういふ人に限つて遂に施しなどした例がない。毎度いふ、

ものごとの一つ叶へば又二つ

三つ四つ五つ六つかしの世や

で、人の欲には限りがない。シヨツペンハウエルの言つたやうに、人生は欲望の追求なりとも見られる。かうした私情私欲の人に、どこまで行つたつて『餘り有る』時とは有り得ない。かくて一生つひに他に恩恵を施すといふ機會は無くて終ることになるので、ソレは要するに、施すべき餘財がないのではない、施す志が無いのであります。況んや、富者の萬燈より貧者の一燈といふこともあり、施しは物にあらずして心に在りといふのが根本義であらねばなりません。道元禪師は、

#### 望りなき欲

#### 布施の定義

布施とは貪らざるなり。我物に非ざれども布施を障へざる道理あり。其物の輕きを嫌はず、其功の實なるべきなり。

と明かに施しの定義を示されて居る。此の精神が肝要で、天地自然の恩恵と一如なる無私博大の心、貪らざる心、それ自體が即ち施しでありますから、純真なる施しは物の輕重によらず、貧富貴賤を問はず、誰れにも爲し得られるのであります。物資を恵む財施ばかりでなく、道理を説き眞實を教へる法施といふのもあり、また地位、名譽、權勢等の或る威徳が人の畏れ不安を除いてやるといふ無畏施といふのもあつて、施しといふものは、どのやうにも、爲さんとする志にあらば爲せるものであります。

邪見なき布施者は、常に富みて正見なり。(海龍王經)

門に立ち物乞ふ聲を聞くならば

あはれとおもへ物くれずとも (道歌)

又、どうも忙しくて、忙しくて、ナカ／＼本を讀むヒマなぞない、といふのも多くの人の口クセのやうであります、が、これも前句と同じ意味で、暇がないのではない、志がないのです。志さへあれば讀書、學問、修養といふものは、誰れにも、いつ、どこでも其の時間は有るものであります。

北條時宗が、支那から迎へた祖元禪師(鎌倉圓覺寺開山)から、

『只管に打坐して身心靜寂を期せよ』

と誨へられたが、國事多難の執權職としてその閑暇なきを訴へ、

『在家事務を免れず、光陰の乏しきことを如何せむ』



といふと、禪師は、

祖元禪師の  
教誨

『行住坐臥、一切の事務、これ最良の修善道場なり。これ只管打坐の學場なり』  
と示されました。讀書も坐禪と同じく、その精神があれば、何處もみな閱覽室と成すことが出来る。また精神的に、高く觀點を置き、深く眼を注ぐならば、般若多羅尊者（達磨大師の師）が『常に如是經を轉ずること百千萬億卷』と云ひ、宋の鹿門自覺禪師が『森羅萬象これ一卷の經』と云つて居る如く、二宮尊徳翁が、  
音もなく香もなく常に天地は

書かざる經を繰り返しつゝ

と歌つた如くに、觸處觸目悉く活ける聖經寶典ならざるなしと觀徹せられる道理でもあります。こゝまで透徹するのは容易でないとするも、また二宮金次郎のやうに、柴を負ひながら、米を搗きながら、手に書物を放さないといふまでにせずとも、讀書勉強の暇は、食後の少憩時にも、十數分の電車内でも、就寝前の數十分でも、いくらでも求めて得られないことはない。要は、施しにせよ、讀書にせよ、物が無いのではない、暇がないのではない。その意志がないから出来ないで、西諺の『意志あれば道あり』といふに歸せられるのであります。意志なきところには、慈善や讀書に限らず、人生そのものが全て無いと謂はねばなりません。

### 六、心地、性天

心地上無風波。隨在皆青山綠水。性天中有化育。觸處見魚躍鳶飛。

心地上に風波無ければ、隨在皆な青山綠水たり。性天中に化育有れば、觸處に魚躍り鳶飛ぶことを見る。

本來の面目

心地、性天の地の字、天の字は、只だ對句にした助字で、人の本心、本性をいふので、禪的に申せば、心地とは、本地の風光、本來の面目で、性天とは、法性とか佛性とか、眞如實相など呼ばれるものであります。此の本心本性は、各人平等に、本然具有する性徳であつて、聖人賢人にあつても、佛菩薩に在つても、一切衆生、森羅萬象に於ても、不増不減、不垢不淨であるが、凡夫は無明煩惱の爲めに有相差別に執着することにより、此の清淨本然、一如平等なる眞實の體用を味まして居る。若しその妄情差別の風波を全く靜寂に歸せしむるならば、本然の姿が有りのまゝに顯はれるから『隨在』何處でも明朗な青山綠水に對する思ひが出来る。此の心境は天地自然と一枚なる純眞のものであるから、天地自然が一切を抱擁し、萬物を生成化育する如く、無碍の妙用を現はし、魚が水中に游躍し、鳶が悠々と天空を飛翔する如き、些しも囚はれず、住着せず、何物をも味まさざる様子に成り切ることが出来るといふのであります。

儒教の建前から申しても、人は天地の正氣を受けて、本然の性、本然の理に従つて生くべしとするに於て、その歸趣は同じであると謂はれます。特に此の一聯は『中庸』第十二章の語句に據つて居ることが明かに知られるのであります。その第十二章は『君子之道、費にして隱なり』といふことを説いたもので、費とは、その用の廣大無邊なること、隱とは、その體の微妙なることをいふのであります。

君子之道は、費にして隱なり。夫婦（匹夫匹婦の意）の愚なるも以て與り知る可し。其の至れるに及んでや、聖人と雖も亦た知らざる所有り。夫婦の不肖なるも以て能く行ふ可し。其の至れるに及んでや、

中庸の説に  
採る



聖人と雖も亦た能くせざる所有り。天地の大なるや、人猶ほ憾むる所（もの足らず思ふこと）有るがごとし。故に君子、大を語れば天下能く載する莫く、小を語れば天下能く破る莫し。詩に云はく、鳶飛んで天に戻り、魚、淵に躍ると。其の上下察かなるを言ふなり。君子の道は、端を夫婦に造し、其の至れるに及んでや、天地に察はる。

これが『中庸』の文で、朱子の註に『子思は此の詩を引いて、以て化育流行、上下昭著、此の理の用に非ざる莫きを明かす、所謂費なり。然れども其の然る所以は、則ち見聞の及ぶ所に非ず、所謂隱なり。故に程子曰はく、此の一節、子思、喫緊、人の爲めにする處、活潑々地なり』と言つてあります。幽玄微妙にして、而も愚夫愚婦も能く知り能く行ふことが出来るといふ天地の大道、何人もこゝに實究體得の工夫がなくてはなりません。

### 七、慾、貪

慾不除。似蛾撲燈焚身乃止。貪無了。如猩嗜酒鞭血方休。

慾、除かざるは、蛾の燈を撲ち身を焚いて乃ち止むに似たり。貪、了せざるは、猩の酒を嗜みて鞭血して休むが如し。

燈火に投ずる蛾

人として慾のないものはありません。人生は意慾によつて總てが展開して居ると申してもよいのですが、慾望、欲求といふものは兎角盲目的で、これが爲めにうき身をやつし、つひに身を滅ぼすハメともなる。そ

三毒

れは喩へば、アノ蛾の蟲が燈火に慕ひより、グル／＼と喜びまはることをやめないで、つひに燒け死ぬやうな浅ましきである。

慾を受けて厭くことなきは、鹹水を飲んで轉た其の渴を増すが如し。（成實論）  
財色の人に於ける、人の捨てざること、譬へば刀刃に蜜ありて一餐の美にも足らざるを、小兒之れを舐めて即ち舌を割くが如し。（四十二章經）

などと教へられてあります。意慾は本能に根ざすもので、何人も之れ無きことを得ないのでありますが、此の恐るべき害悪たる所以は、貪る心に在るので、自分本位の考から、意にかなふ順境に對しては、此の貪り執着することを無制限に連續する。そして意に反する逆境は、極端な激情を以てこれを排斥する、即ち順りの念に燃える。この兩極端に走るのは、眞理實相を明かに見とほす智慧の明なき愚痴に由るとし、此の貪瞋痴を三毒と名づけ、有らゆる慾念妄情の母胎とせられるのであります。『瑜伽論』には、  
諸の煩惱の中、貪を最も勝れりとす。貪の中に於ては欲貪（愛慾）を勝れりとす。諸の苦を生ずるが故なり。

と説かれてあります。ところが凡愚はこの貪欲を盲目的に追求して了期即ちこれでおしまひといふ時がなく喩へば猩猩が酒を飲んで酔つ拂ひ、暴れ狂ひ血みどろになつてたふれるやうな惨めな結果を見るといふのであります。

土人の猩猩捕り

猩猩は酒を好むと申しますが、初めから上戸ではないのださうで、南洋の土人がこれを捕へる話を聞きましたが、初め瓶の中に水を満たし、土人の愛用する強烈な酒の少しばかりを混ぜて林の中に置くと、猩猩が



それを飲んで喜ぶ。その次には酒の量を前より少し澤山混ぜるといふ風にして、次第に強い酒にし、幾度目かの最後には生の酒を入れて置く。狸々は今はそれをも舌鼓打つて飲むほどの上戸に成つて居るので、スツカリ平げるが、何ぞたまらん忽ち酔ひを發し、木の枝をヘシ折つたり、大地を打撃したり、散々狂態を演じたあげく、酔ひと疲労とでグツタリ倒れて、前後も知らず酣醉してしまふ。ソコを土人が樂々と生捕るのだといふ。これは近頃南洋の現地を廻つて種々の物語をした、或る人の話の中にあつた一つですが、博識の石天基は、こんなことまで知つてゐたものと見えます。

欲の穴の深

外でもいひましたが、柳里恭の『雲萍雜誌』に昔或る忠實勤務なる番頭さんが、主人から十兩金を渡されて之れを百兩にせよと言はれ、刻苦して百兩にすると、それを又十倍にせよと云はれ、千兩にすると、又々その十倍にといふので、かくてつひに一萬兩に、更に十萬兩にまで太らせたが、それを本にして百萬兩にせよといはれ、人の慾の際限なきに呆れると共に、深く人生を感悟し、サラリと一切を擲つて遁世し佛道を求めて餘生を送つたといふ話がありますが、此の人の辭世といふのに、

おちてゆく奈落の底をのぞき見む

いかほど慾の深き穴ぞと

とあります。實際、人の慾に限りのない有様は、地獄の底をも通すトンネルであると謂ふべきでありませう。

意欲と人生

しかしながら、本能に根ざす慾である以上、全くこれを斷滅し、絶無にすることは出来ない。又、意慾を全滅し去つては人生は意義ないものとなります。生命欲、生存欲、種族保存の爲めの性欲など、これらは鳥獸蟲魚にも本能であります。すでに最高等動物にまで進化し、更に人間に脱化した吾々は、斷じて動物では

ないので、當然、本能、意慾に於ても、人間獨特の超拔せる高尚のものがなければならぬ。即ち保存慾、名譽慾、改善慾、向上慾、道德的宗教的の究極慾、等の諸慾が言はれ、これらの作用、發展によつて、人生は無限により善く成つてゆくのであります。かういふ意味の慾は、その熾なるほど、多量なるほど望ましいので、佛、菩薩にも不斷の意欲ありと説かれるのであります。

願、清淨なるは、意慾以てその體と爲す。般若に依るが故に清淨を得、大悲に依るが故に意慾あり。(大

智度論)

智慧王の説くところの慾は、諸法の本を爲す。まさに清淨の慾を起して、無上道を志求すべし。(華嚴

經)

こゝに本文にいふ欲といひ貪といふのは、盲目的なる、動物欲に近い下等のソレをいうたので、これを除き、これを了ずるとは、右にいふ最高等の意慾を以て、清き理想の下に、低俗なる慾を適當に制限し、克服することの修養に在りと申すべきであります。

八、清 閒、紛 擾

清閒無事。坐臥隨心。雖粗衣淡飯。自有一段真風。紛擾不寧。憂患纏身。

即錦裳厚味。只覺萬般愁苦。

清閒無事にして、坐臥、心に隨へば、粗衣淡飯なりと雖も、自づから一段の真風有り。紛擾不寧からずして、憂患、身に纏へば、即ち錦裳厚味も、只だ萬般の愁苦を覺ゆるのみ。



『清閑』の間は閑と同字です。身邊清く明るく、靜かに閑かで、起き臥しに何も心にかくる事もないならば、如何に物資缺乏で、粗末な衣物を着、無味のアッサリした食事を攝るといふ簡易生活であらうとも、ソコに『一段の眞風』眞實にして高雅な愉しさを感ずるものである。

それが、若し俗事雜件頻發で、心の落ちつくヒマもなく、心配事が次々と身を取りまくといふ状態であるならば、どんなに富める身分であり高い地位であつて、錦を身に纏ひ、數々の珍味を口にしようとも、少しも楽しい気分は味はれず、總てが愁ひ苦しみの種となるといふのであります。

曲亭馬琴は、『人は情を以て景を思ひ、景を以て情を思ふ』と言つて居りますが、全くその通りで、主觀の心持ちと、客觀の對境との交渉關係、事情條件が、人の悲喜苦樂を將ち來たすことを、どうすることも出來ないものであります。それは人は身と心とで持つて居り、肉體の状態が直ちに精神に影響し、精神作用が亦た大に肉體を支配するといふのは、まことに已むを得ないことであります。

酒のめばいつも心が春めいて

借金とりも鶯のこゑ

心理作用には、かう云つた様子もあり、この作用が、清貧のうちに、一段の眞趣を味得せしめることにもなるのですが、唐の玄宗皇帝が楊貴妃にうつゝをぬかし、金殿玉樓に酒池肉林の豪華をほしいまゝにしたのも一場の夢の如く、安祿山の叛逆によつて、忽皇として都落ちを爲すに及んでは、山西より四川へと遷幸の途中、車駕人馬進行の雜音が『三郎郎當、三郎郎當』と聞えて、いとゞ心を悲しがらせ、さびしがらせたといふ。三郎は李氏の家三番目の男といふので、玄宗の若年時の通稱。郎當は零落の意をあらはす語です。此の

心理作用の妙

氣は持ちやう

際に於ける玄宗の心情は、文字通り『錦裳厚味も只だ萬般の愁苦を覺ゆる』のみであつたのであります。しかし、俗に『氣は持ちやう』と云ひ、同じ境遇事情に處しても、これに對する眼の着けどころ、心構への如何によつて、是非苦樂の判斷評價が大變に相違して來るものですから、われ／＼は、内在せる自由意志の發動により物心一如の觀點に立ち、内心以て外境を克服制整して、自ら缺陷を圓滿にするの工夫に力むべきで、精神力が肉體を支配し、外境を制御する事實は、いろ／＼の方面で人々のよく知るところであります。

### 九、衣食、酒色

衣食不過溫飽。惟辛勤省儉。可能續生不<sub>レ</sub>乏。酒色何苦貪戀。惟顧<sub>レ</sub>攄<sub>レ</sub>樽節。

衣食は溫飽に過ぎず。惟だ辛勤省儉、能く生を續きて乏しからざる可し。酒色は何ぞ苦めて貪戀せむ。惟だ顧攄樽節して、能く壽を保ち天せざる可し。

何の爲めの衣食か

衣服は何の爲めに着るのか、それは寒くない爲めに着るので、華美贅澤を要しない。食事もその通りで、主なる目的は空腹を満たすに在る。飽くを以つて足れりとせば、珍味佳肴を求むるに及ばない。されば常に、辛苦勤勉、節約節儉を旨とし、さうして生存、生活を持續し、窮乏を免るゝことの出來るやうにすべきである。人は何のために食ふか。たゞむもじさをやめんが爲めの計略なり。(澤庵禪師)

勤務節約の生活を脅かすものは酒色である。これは『何ぞ苦めて貪戀せむ』で、此の貪戀が、この字眼で



酒色と修養

あります。酒色の如何に害毒であるかは多くのお説教を聞かずとも、人々よく承知して居ることながら、一旦これを覺えると、泥沼に足を突つ込んだやうに、どうにも抜けきれない病つきとなり、貪戀いよ／＼貪戀に深か入りすることになる。貪戀の病ひが無いならば、酒はまことに、天の美祿、百薬の長でもあり、憂へを拂ふ玉箒でもあります。女も人生無くてならぬ美しい花であり、一休和尚の云ふ如く、釋迦も達磨もヒヨイ／＼と生む法の御藏であります。

苦の字は、急切の意で、ネンゴロ。セマル。などいふ訓もあり、こゝではツトメテとよませます。強ひてといふに同じですが、このやうな恐るべき酒色は、何で強ひて求め貪戀すべきであらう。「願説擲節」が、こゝに肝要である。諛は、寤なり、諛なり。ツマビラカ。アキラカと訓む字で、擲はオサヘルといふ字、抑と同義です。ソコで、酒色に對しては、明かにその害毒を知つて、克くこれを抑制し、以て貪戀の病みつきを對治することが肝要で、以て克己修養によつて、心身二面の攝生が出来、天壽を完うし、天死すること免れることが出来るといふのであります。

酒はたゞ飲まねば須磨の浦さびし

すぐればあかし波風ぞ立つ (失 名)

酒のまばほろ／＼酔ひを程とせよ

そのさかづきの數は限らで (安元法師)

一〇、報 答、慎 修

一絲一粒。皆天地化工。皆父祖苦創。皆織女農夫辛力。當思如何報答。一言

一動。有家人瞻顧。有知交察識。有鬼神日月照臨。當思如何慎修。

一絲一粒も、皆な天地の化工。皆な父祖の苦創。皆な織女農夫の辛力なり。當に如何にして報答せむかを思ふ可し。一言一動も、家人の瞻顧する有り。知交の察識する有り。鬼神日月の照臨する有り。當に如何にして慎修せむかを思ふべし。

一絲一粒とは、衣食の微細なるをいふ。吾々は今日衣食を得てその日を暮らして居るが、衣食の由つて來たるところを考へて見る人は甚だ稀であります。しかし一たび眞面目に觀するならば、糸一すぢ米一粒でも、それがこゝに形を示すに至るまでの經過は、實に容易なものではないので、太陽の光と熱、土壤雨露、春夏秋冬の推移等、限りなき天地自然の化育工作の恵み、それを生活物資化するまでの父祖先人の創造や、これを培養し收穫する織女農夫等の操作努力を想へば、實に廣大な恩惠の籠つて居ることを知るべきで、此の恩惠に對しては、如何にして報答すべきかと、絶えず念頭におき、一絲一粒も粗末にしてはならぬといふのであります。

廣大無邊の恩惠

箸取らば君と親との恩を知れ

わが一力で食ふとおもふな (道歌)

禪家の作法は頗る嚴肅なものです。食時には箸取る前に必ず次の五觀の偈を念誦することになつて居ります。



食時の五觀

- 一つには、功の多少を計り、彼の（食物の）來處を量る。
- 二つには、己れが徳行の全缺を付つて供（供養）に應ず。
- 三つには、心（欲心）を防ぎ過を離るゝことは貪等を宗とす。
- 四つには、正に良藥を事とするは形枯を療ぜんが爲なり。
- 五つには、成道の爲の故に今此の食を受く。

一般人誰れにも此の觀想は望ましい。それは衣食と限らず、すべての物資に對してもです。

一言一動の修養

次の對句は、一言一動も慎重にしなければならぬことをいうたので、家庭に在つては、箸の上げおろしかから總ての言語動作が、一家の誰れにも見られ、少しも隠すことは出來ない。それだけに一些事も氣をつけなければならぬ。また外に出て他人と交る上でも、偽り、ゴマカシは勿論、どのやうな行爲言動も、十目の見るところ、十指の指さすところ、必ず明かに察知せられ鑑識せられるものである。更に、人には見られず、人には知られぬと思つても、鬼神、日月の照臨する有り、お天道様は見通して、善惡是非、寸毫もウソ偽りは出來ない。故に一言一動の些末なことも、如何にして之れを慎み、正しく我が身を修めんかと、絶えず心がけ工夫すべしといふのであります。『中庸』の第一章に、

中庸の名句

道なる者は須臾も離る可らず。離る可きは道に非ざるなり。是の故に君子は其の睹ざる所を戒慎し、其の聞かざる所を恐懼す。隠れたるより見はれたるは莫く、微なるより顯れたるは莫し。故に君子は其の獨りを慎む。

楊震四知

とあるのは、こゝに快適の箴言であります。世に有名な楊震四知といふ故事があります。それは後漢に楊震

といふ人があつて、世にも稀なる清廉潔白の人格者で、荊州の刺史から、更に東萊の太守と成つて赴任する時、途中、昌邑といふ處の長吏、王密といふ者が、夜に入つてひそかに黄金十斤を懐にして訪ね、舊恩を謝し並せて將來の引立を受けようとしたのを、楊震は斷乎斥けて受けなかつた。王密がいふやう、『暮夜、知る者なし』

楊震がこれに對して言つたのが四知で、

『天知る。地知る。我れ知る。子知る。何ぞ知る者なしと言はんや』

なほ佛説にも四知があります。それは『罵意經』に、

人の作す所の善惡は四神有りて之れを知る。一には地神、二には天神、三には傍人、四には自らの意と云ふのであります。大西郷が『人を相手とせず天を相手とせよ』というたのも人の知る名言で、要は公明正大、俯仰天地に恥ぢざるやう、一言一行の端も苟もすべからずといふのが、これらの教訓であり、本文一句の主旨であります。

一一、説長、施恩

説短説長。寧説人長。莫説短。施恩施怨。莫施人怨。且施恩。

短を説き長を説くことは、寧ろ人の長を説くとも短を説くこと莫れ。恩を施し怨を施すことは、人に怨を施すこと莫れ。且つ恩を施せ。





口の使命

口は禍の門とも云ひ、また病は口から入るとも云つて、此の口一つが、しばし、重大な問題の發火點と成るのですが、此の口なくんば食ふことも出來ず、此の口なくんば物言ふことも出來ない。食はざれば生きられず、言はざれば意志の表示も疏通も自由に出來ない。人の口には戸はたたず、どうしても食ふ爲め、言ふための天分使命は果さねばならぬ、とすれば、此の口を瀬戸物のキンチャクのやうにすることを以て、沈黙は金なりとばかり澄まして居るわけにはまゐりません。

口の禍

物言ふ爲めの機關たる口である以上、大に言ふのはよろしいが、言ふ可きことと、言つてはならぬ事と、これをよく辨へて、言ふべきを言ひ、言ふべからざるを言はぬやうにする。そこに修養の意義が存するのであります。トコロが、前にも申したやうに、人は自分の事は棚にあげて、人の事はかり言ひたがるもので、互ひにさうするから、ソコに是非對立紛飛して世の中が治まりにくくなるのであります。それを圓く治めるには、同じ他人の事を言ふにも、その短所には成るべく目をつぶつて言はず、つとめて長所に目をつけて、それを稱揚することにせよとの教へであります。

他人の短所  
には目を  
つ

實際、人の悪口をいふのは、傍の耳にもイヤなもので、反對に人をほめる言葉は、自分には何の關係がなくとも、まことに愉快で朗かに感じられるものであります。自分もさうであるから他人もさうで、お互ひに愉快で朗かにゆけば人生は圓滿であるといふわけになります。大乘佛教の徳目にこれを愛語と名づけてありますが、道元禪師の説示に、

愛語

愛語といふは、衆生を見るに先づ慈愛の心を發し、願愛の言語を施すなり……徳あるは讃むべし、徳なきは憐むべし……面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす。面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂

に銘す。愛語よく廻天の力あることを學すべきなり。

とある。かうした慈心より發せられるものであるならば、イクラ喋つてもよい、喋るほど人生の幸福を増進する所以であると謂ふべきであります。

次の句は施に關するものですが、前句と同一の根本精神よりするものでありますから、多くの説明は無用で、自他相對關係に於ける一言一行は、必ず影響反映するものであるが、同じ影響ならば、人に怨まれるやうなものはないやうにし、人の喜び感謝するやうな恩恵を與へるやうにするがよいといふのであります。これ亦た前句と同じ意味に於て、かくすることにより、自他の徳を長じ、人生を美しき恩恵の世界と成すこととなるのであります。

一一一、吃 虧、侮 我

討人便宜 即是吃虧從此起 占人顔面 安知侮我不招來

人の便宜を討ぬることは、即ち是れ吃虧此れより起る。人の顔面を占することは、安んぞ知らむ我れを侮ること招かずして來ることを。

所得なき走  
狗

これは獨立自尊、自己確立の教訓であります。便宜は、都合、勝手。吃は喫と同義、虧は缺なり損なりで、吃虧とは損害を蒙ることあります。獨立自尊の氣概のない者は、他の御都合ばかり検討し追求するが、そのことそれ自體が、自分の損耗そのものなので、獵夫に驅使される走狗同然、うまい汁は皆な人に吸はれて、



自分の得るところはないといふのが前句。

他の顔色具合ばかり窺つて行動する、これも自分といふものをゼロにする奴隷根性で、かやうな無氣力、無見識の輩に對して誰れが敬意などを拂はう。他から侮られるまでもない、自ら自己を侮る結果を招くものであるといふのが下の對句であります。

谷の間に獨りぞ松は立てりける

我のみ友はなきと思へば (西行法師)

こちらから友達にせむ春の月 (大江丸)

一三、知足、多求

達人知足。一榻已自恬如。昧者多求。萬鍾猶不滿意。

達人は足ることを知る。一榻已に自ら恬如たり。昧者は求むること多し。萬鍾も猶ほ意に満たず。

達人恬如

達識達道の人、即ち人生を悟つた人は、私慾私情といふものがないから能く足ることを知つて、貪り執着する念がない。だから僅かに一箇の狭くらしい臥牀の上でも、何ら不満を覺えず、恬如と、氣にかけることもなく心安らかである。

昧者不滿

これに反して、天地自然の正しき道理に昧い者は、利己一べんの意慾情念に驅られて、盲目的追求に飽くことを知らないから、たとへ巨萬の富を得ようとも、猶ほ意に満足が出来ないで、いつも焦躁不安に囚はれ

ねばならない。鍾は支那古代の量目で、六斛四斗を一鍾とす——或は八斛、或は十斛ともいふ——。

この一聯の意味は、釋尊最後の説法の中にも懇説されてあります。

汝等比丘、諸の苦惱を脱せむと欲せば當さに知足を觀すべし。知足の法は即ち是れ富樂安穩の處なり。

知足の人は地上に臥すと雖も猶ほ安樂なりとす。不知足の者は天堂に處すると雖も亦た意に稱はす。不

知足の者は富めりと雖も而も貧し。知足の人は貧しと雖も而も富めり。不知足の者は常に五欲の爲めに

牽かれて、知足の者の爲めに憐愍せらる。(遺教經)

古歌にも、

事足れば足るにまかせて事足らず

足らでこと足る身こそ安けれ

一四、伶俐、混沌

伶俐人。轉博痴迷。混沌氏。原多含蓄。

伶俐の人、轉た痴迷を博す。混沌氏、原と含蓄多し。

伶俐馬鹿

伶俐の人とは、知識才能に富んだ人のことでありますが、さういふ人は兎角、識者ぶり才走ると云つた風のあるもので、却つて智のため才のために、思ひがけない飛んだ馬鹿げた失敗を招くことが往々ある。謂はゆる伶俐馬鹿といふやつであります。



混沌氏とは、ボンヤリ男の異名と見ればよいので、不得要領、一見、無識無能の如く、ちよつと眞價がわからないといふ人ではありますが、かういふ人に、却つて奥底の知れない力量を潜在して居て、馬鹿の功名と驚異せられるやうなことがあるものだといふのであります。

晝行燈の大石と大馬鹿西郷

大石義雄は、晝行燈とアタ名され、伊藤仁齋の講席に列坐しながらも、終始居睡りをして居たと云ふほどで、人々は皆な爲す無き鈍漢だと云つたが、仁齋はさすがに惘眼の大儒、大石は必ず人の耳目を驚かすやうな事を成す大人物だと、その時早くも見ぬいたといふことであります。また有名な逸話で、坂本龍馬が勝海舟の紹介を以て初めて西郷隆盛に面談し、後に海舟に報じて『西郷といふ男は馬鹿者だ、が、その馬鹿が幅の知れない大馬鹿である』と言つた。海舟は『評する者も評する者、評される者も評される者だ』と云つて洪笑したといふことでありますが、まるで禪問答のやうな此のうちに、三偉人の面目が躍如として居ると思はれます。

君子の状貌愚の如し

君子の状貌は愚の如く魯の如しといふ。知識才能あつてソレが鼻につき、識者ぶり才人ぶるといふ臭みがあつては、まだ惻巧馬鹿の仲間を超出することは出来ません。天賦の氣質性格により、容貌態度には各人別様のもののあるは免れませんが、今申す臭みが取れて、愚の如く見えるうちに、測り知るべからざる活機活用を秘藏してゐるといふに到つて、修養は透徹し、人物が圓熟したと謂ふべきであります。

底ひなき淵やはさわぐ谷川の

浅き瀬にこそあだ波は立て (古歌)

### 一五、耕 讀、勤 儉

讀可榮身。耕可富。勤能補拙。儉能長。

讀んで身を榮す可く、耕して富む可し。勤は能く拙を補ひ、儉は能く長す。

晴耕雨讀

晴耕雨讀といふ成語があります。これは且らく農業に従事して生活する者を例として云つたので、讀は讀書即ち學問を勉強すること。耕は家業を勵むことと、廣い意味に解すべきであります。生業に精を出せば生活に餘裕が生じ、餘暇、寸陰も空しくせず讀書勉強すれば、知識を得て時代に後れることなく、道理を明らかにして身を修め家を齊へることが出来るから、期せずして家は富むこと請け合ひであります。

鋏の刃にすみれをのせて子をつれて (梅堂)  
筆取つて向へば山の笑ひけり (寒太)

また、たとひ才拙くして伎倆乏しくとも、勤勉怠らざれば、その拙き天分も補ひ充たされ、恭儉にして憍らざれば、短所も助長せられて、缺陷が圓滿になるといふ。この勤と儉とは兩脚の如き關係で、勤と左足を一步踏み出したところ、儉と右足は止まつてシカと踏みしめるといふやうに、交互に進み止りつゝ、一步一步、つひに遠きに達し高きに上り、目的理想を完遂することが出来るのであります。

おこたらず咲いて上りし葵かな (才慶)

作らずにおいて悔むな今日の菊 (虚白)

勤 一步儉 一



本箱になるべき桐の若葉かな

(許六)

### 一六、改過、安分

能改過、則天地不怒。能安分、則鬼神無權。

能く過を改むれば、則ち天地怒らず。能く分に安んずれば、則ち鬼神無し。

中正を失つ  
た心

過ちといふものは、心の中正を失つたときに犯すので、その心は天地自然の大道、公明正大に背くものであるから、絶えずビク／＼してゐるといふ良心の苛責を受ける。この歪曲せる心に自ら氣づかない者が、よく天命だの運だのと云つて嘆つ。それは天地に難題を吹つかけるものといふべく、その煩悶が即ち見えざる天地の怒りに觸れて居るのであります。

かうした自分を棚にあげて、自己の本分を辨へず、非望を抱き不平不満をならべる其のことが、既に鬼神悪魔の黒き手に捕はれて居るのであります。

反省自覺

過を過と自覺反省して、素直に罪を承服し、綺麗サツパリと悔い改めるならば、俯仰天地に愧ぢざる心境に安住するのであるから、人知れぬ苦悶も不安もない。即ち天地怒らずで、自分に不安が無いと同時に、家庭にも社會にも不安が無くなり、此の世が樂土となるのであります。此の心境には些しの不平不満もないから、よく己が分に安んじ、身のほど知らぬ非望の埒外に一步も踏み越さない。随つて暗鬼冥神の横謀も施すの餘地はなくなる。つまり鬼神なんかに関係はないといふ明朗さになるのであります。

聖賢の懇誠

人、誰れか過なからむで、誰れでも過はあるものですが、只だその過を再びせざるやう反省し改めて一新することが肝要で、若し再び犯さば再び改め、三たび、四たびでも、氣づくと同時に一洗し去り、新たに、いつも新たに、更生躍進の一路を見だすべきであります。儒教に改過と云ひ、佛教に懺悔と云ひ、キリスト教に悔い改めといひ、その他古今東西の聖人賢者は、皆な此の一事を重く見て、懇切の教へを垂れて居るので、如何に大事なものであるかを知らねばなりません。

過つては改むるに憚ることなかれ……過つて改めざる、これを過といふ。(論語)

人誰れか過なからむ。過つて能く改むる、善これより大なるはなし。(玉耶經)

過を改むるには、自ら過つたときへ思ひつかばそれにて善し。その事をば捨てて顧みず、直ちに一步踏み出すべし。過をくやくしく思ひ取りつくろはんとして心配するは、たとへば茶碗を割り、その缺片を集め合はせ見るも同じにて詮なきことなり。(西郷南洲)

### 一七、無聊、不達

家坐無聊。不念食力擔夫紅塵赤日。汝官不達。尙有高才秀士白首青衿。

家坐無聊なるは、力に食む擔夫の紅塵赤日を念はざるなり。汝が官、達せざるも、尙ほ高才の秀士の白首にして青衿なる有り。

懶惰安逸の  
聲しめ

家坐無聊とは、爲す事も無くて、家の内に逸居して居るものが、その無爲徒然なるに退屈することで、ま



ことに今日様に申しわけもなき勿體ない話であります。さういふ有閑者流は、筋肉労働を以て生活する人々が、紅塵にまみれ、灼くが如き炎天下に粒々辛苦の實狀を念ひ見ることをしてしないからで、畏けれど、明治天皇が、

暑しともいはれざりけり沸返る

泥田に立てる賤をおもへば

重荷ひく車の音ぞ聞えける

照る日の暑さたへがたき日に

等と御製遊ばれたる大御心を奉體する一念があるならば、右様の勿體ない考へは起らず、何なりと勤勞のよすがを見出すべき筈であります。これは身分高き者に對する警策であり、次の句は不遇の者への諭誡であります。

不遇不満の誠

官に仕へる者は、自分の地位が上らず、いつまでも下積みになつて居ることをかこち、不平をこぼす者が少くないが、世には才能識見高く、衆に秀れた人にして、つひに一介の老書生で終つて居るのが幾らもあるぞといふのです。白首は白頭に同じく、青衿とは、古、學生は皆な青いえりの服を着てゐるところから、書生の異名となつた熟語であります。

勤勞の意義

ルツソオは『生きるといふのは呼吸をすることではない、何事かを爲すことである』と云つたが蓋し名言で、人が各自の天分に隨ひ何事かを爲すことが人生であるとせられる。この場合、勤勞それ自體が全目的であつて、報酬の爲めといふ如き條件附のものでは決してないのであります。此の第一義に徹底せずして、勤

勞を以て生きるための手段と心得、報酬、成功を目的として唯一觀點に置くのは大なる錯覺で、此の錯覺から不平不満が沸き、各方面に纏れを生ずるのであります。

マーデンが『成功を望む前に汝の職業を愛せよ』と言つて居る此の愛の一字、意味深いものがあるので、仕事を愛人の如くする者、必ず愛の勝利者となるであります。成功、榮達などの名は、職域奉公の一念、以て忠實安分、勵精従業から結果される自然的、必然的の副産物と見られるのであります。

太刀とるも鋤鋤取るも君が爲め

うつもかへすもものゝふの道(田宮如雲)

### 一八、對君子小人

君子固該當親。然亦不可曲爲附和。小人固該當遠。然亦不可顯爲仇敵。

君子は固より該當に親しむべし。然れども亦た曲げて附和を爲す可らず。小人は固より該當に遠ざくべし。然れども亦た顯はに仇敵と爲す可らず。

親しむべし  
阿附すべからず

遠ざくべし  
敵視すべからず

有徳有識の君子大人に親近するといふことは、芝蘭の室に居ればその身も香ばしといふ如く、自然に君子の風に化せられ、君子の徳を學び得ることになるから、こんな結構なことではない。しかし、君子を慕ひ尊敬する純心を曲げて、向ふの意を迎へ阿ねる不純の心を以て附和するのはよくないといふのです。

また小人は固より遠ざくべきで、これに親しむは、恰も鮑魚の肆に入ればその身も臭き思ひする如く、小



比周同和

人の低俗卑風に染むことを免れない。しかし、遠ざけるといつて、何も正面から仇敵とするのはよくない。我れに大心博愛あれば、小人もつひに風化することが出来る、博大の心の中には仇敵はない筈であります。『論語』に『君子は周して比せず、小人は比して周せず』といひ、また『君子は同じて和せず、小人は和して同せず』ともある。内容的に云つて、周と同とはおなじ意、比と和とは同義であります。たとへば、各種の楽器で合奏するとき、各器特有の音聲を出しながら、高きも低きも、太きも細きも、強きも弱きも、それ／＼の持ち味を損はずに、音階調律が一つになつて一曲を成すといふ様子が、周であり同であります。此の調子が一つにならないで、太鼓は勝手にドン／＼、笛はおかまひなしにビィ／＼、三味線ベン／＼、胡弓ギョウ／＼では、只だうるさいばかりで何ともしやうがない。これが和して同せず、比して周せずの様子であります。

君子は自我や私情がなく、公明正大、宜しきに従つて中庸を得るから、道あるところピタリとよく周しよく同する。が、『君子は義に諭り小人は利に諭る』ともあつて、小人は我見利己に出発するから、自分に都合のよい時は一しよになるが、損と見ればテン／＼バラ／＼になる。只だ利害を中心として附和雷同し又は反目離散するのであります。

故に、君子に親しんで附和することは、小人を以て君子を小人にするといふもの、これでは如何に親近しても、自他共に欺き傷ふばかりであります。また小人輩をムキになつて仇敵とすることは、自身早や小人のレベルに落ち込んで居るので、これでは遠ざけたが遠ざけたにならないわけであります。

なにごとその品々を知る人に

ひろくたづねて他をなそしりそ（烏丸光廣）

一九、緘口、惜陰

駟馬難追。吾欲三緘其口。隙駒易過。人當寸惜乎陰。

駟馬も追ひ難し。吾れ三たび其の口を緘ちんと欲す。隙駒は過ぎ易し。人當に寸も陰を惜むべし。

駟馬も追ひ難し

これは、迅速に去つて再び取り返し難きもの、言語と光陰とを雙對にした教訓句であります。駟馬は四頭立ての馬車で、大昔の支那では一番速い乗物とされたものですが、今は只だ快速の形容としたに過ぎません。人が一度口の外に出した言葉は、どのやうな快速力のものでも以て追つかけても取り返しがつくものではない。だからあまり多く喋らぬがよい。じつくり考へて口に出すやうにせよといふのです。三たび口を緘ちるといふのは語呂のアヤで、何も三の字に限定の意があるわけではなく、言はんとして幾たびも口をふさぐといふやうに慎重にせよといふのであります。

舌三寸の殺活とか、寸鐵、人を刺すなどといはれるほどに、人の言葉には時として畏るべき偉力を有するものですから、全くウツカリ口はきかれませぬ。昔、或る大名が夢中で碁を打つて居るところへ家來が、『只今隣國の某侯から御使者が参つて居りますが、いかゞ計らひませうや』

と伺つたが、耳に聲は受け込んで、心は只だ盤上黑白の攻め合ひに囚はれて居る殿様、

『ナニ隣りから……と、そんな手は恐れぬぞ。えいッ切れ！』

一言以て身を滅ぼす



と、勢ひ込んでバチリと一石敵石の一角を切つた。家來は大いに驚いて、『はッ、切るのでござりまするか』

と、問ひ返すと、

『さうさ、こゝで切つて戦はんといふ法があるか』

と、その眼はいよ／＼盤面に焼きつけられる。

『眞實、切るので御座りまするか』

『くだい！ 切らいでか…』

こんなことで、とう／＼隣國の使者を斬つてしまつたので、えらい騒動を惹き起し、その結果は隣國のために攻め滅ぼされてしまつたといふ。これは考へざるの極端な例であります。一言にして國を失ひ身を滅ぼすことも有ること、まアこんなあんばいだ、恐れ慎むべきであります。

隙駒

光陰は矢の如し、これも迅速に去つて絶對に取り返しのつかぬものであります。その形容に『隙駒過ぎ易し』と云うたので、隙駒はまた野馬ともいひ『太陽の光線が、戸のスキ間などを通してチラ／＼する、有るか無きかのかげろひであります。本文には對句の作爲上、『寸惜乎陰』として居るが、陰は光陰の略、光は太陽、陰は月で即ち日月、端的に時の異名であります。

大禹は寸陰を惜んだ、今人は須く分陰を惜むべしと云ひ、朱子も『少年老い易し學成り難し。一寸の光陰輕んず可らず』と詠じて勸誡して居る如く、また西諺の『時は金なり』など、光陰惜むべきことの教訓は、古今東西に多く、人みなよく知るところであります。知りつゝ、つひ忘れて、今日が暮れたら又明日の朝

梵網經の切

といふやうなノンキな日送りをして居る間に、紅顔いつか白髪と變ずるに至つて、今更のやうに驚き騒ぎ出し、末路の恐怖と悲惱に閉ざされるといふのが、尋常世人の生涯ではありませんか。『梵網經』に切實深刻なる説教があります。心に刻み身にしみて頂き度い。

壯なる色の停まらざること猶ほ奔馬の如し。人の命の停まらざること山の水にも過ぎたり。今日は存すると雖も明けんまで亦た保ち難し…是の日已に過ぎぬれば命も亦た隨つて滅す。少水の魚の如し。斯に何の樂しみかある。

二〇、古人水、骷髏詩

奉一杯古人水。願先生洗去怨心。誦幾句骷髏詩。望長者除開業障。

一杯古人の水を奉ず。願はくは先生怨心を洗去せむことを。幾句骷髏の詩を誦す。望むらくは長者業障を除開せむことを。

酒興

この一聯は特に茶根譚的のもので、超俗清逸の風趣が漂うて居ります。一杯古人の水とは、大昔以來、天の美祿と愛用されて來た芳醇の酒で、これを一杯先生に獻じるから、宜しく傾け盡し、陶然と憂さを忘れ、俗事紛々、自他の間に結ばれたイヤな心持などサラリと一洗し去つて下さい。と、先生といふ第二人稱に呼びかけて對話の形で、自分の心境を云つて居るのですが、勿論汎く一般への勸説であります。

詩趣

骷はヒザボネと訓み、髑はサレカウベで、此の二字は脱俗枯淡の形容であります。即ち古徳先賢の風韻格



調高き詩篇をいふのですが、下に業障といふ佛教語を用ひて居るので、これはどうしても禅趣味と見られま  
す。業障とは生死流轉の現實身世を將來せるもの、煩惱妄想の別名として通用されます。長者も前の先生と  
對にした假稱で、同一用句の手法であります。

酒色に貪戀すべからざることは前に申しましたが、時に一杯の美酒に興を發し、一篇の詩文に情を遣つて、  
俗腸を一洗し、古賢と俱に語り、大自然に優游するの襟懷も亦た人生の逸樂と謂ふべきであります。

一一一、説法者、達觀者

説法者。講空空無無。上爲衆生。下爲自己。達觀者。視生生死死。留則煩  
惱。去則逍遙。

法を説く者、空空無無を講ずるも、上は衆生の爲めにし、下は自己の爲めにす。達觀の者、生生死死を視  
るも留まれば則ち煩惱。去れば則ち逍遙たり。

自利他一  
如

これは佛道の玄談であります。佛法を説く者が、一切は空無に歸するといふ般若の空理を談ずるが、さう  
いふ説者と聽者とが對立してゐるのだから、自もあり他もあり、空でも無でもない。ただ、色即是空のとい  
ろ、空即是色で、一面衆生を濟度することその事が、そのまゝ他の一面自己得脱の道で、自他一如、自利と  
利他とが圓滿完了されるのである。

生死の解脱

この一如なる徹底が大事なので、達觀した、悟つたといふ者が、生を明らめ死を明らめたと信じてゐても、

若し僅かでも生死に心が住着するものあれば、それは煩惱であつて、なほ生死の迷ひをぬけきらぬ者である。  
此の住着の跡が全く除き去られるに到つて、初めて逍遙自在、生死中に生死を解脱することを得るのである  
と。これは頗る微妙幽玄の禪談で、ちよつと了得がむつかしいですが、後に亦た更に詳解すべき機會があり  
ませう。

一二一、惜費、受享

不惜費。必至於空乏而求人。不受享。無怪乎守財而遺消。  
費を惜まざれば、必ず空乏して人に求むるに至る。享を受けざれば、財を守つて遺消することを怪ます。

乞食生活

これは貧富、順逆の兩方面に善處すべき心構へを教へた對句で、濫費した結果は、當然生活物資が缺乏し、  
食ふに困ることになる。困つても生きんが爲めには食はねばならず、自分にはその力がないために、他人に  
頼つてこれを求めるより外に道を知らぬといふことになる。物を他人に求めて生きることは、即ち乞食生活  
と謂はれても仕方はありません。

富める貧者

享は、ウクルと訓み、享受、享有、享福、等と熟字せられ、こゝでは、自身が當然受け保つべき富の意味  
であります。富を擁して只だ之れを死藏し、これを活かして有意義に善散することを知らないならば、『遺  
消』で、遺失したも同然、持ちながら持たざるにひとしい者、即ち是れ亦た一種の貧乏人と謂はれねばなり  
ます。



聖賢の教

白樂天は『天、我が才を生ず、黄金散じ去つて又よく收め來る』と豪語しましたが、大丈夫すべからく此の意氣なかるべからずです。孟子は、

富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、是れ之れを大丈夫と謂ふ。と云ひ、程明道はこの意を、

道は通ず天地有形の外

思は入る風雲變態の中

富貴淫せず貧賤樂しむ

男兒此に到つて是れ豪雄

と歌つて居ります。これらは孔子が『富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ふ』と言つたのに據るもので、君子の道は天の命にこれ率がひ、天下國家の爲めといふのを目標とし、その爲めに家を齊へ身を修め心を正しくすべしといふのですから、貧中に尙ほ能く道を樂しみ、勤儉以て自ら窮乏に善處すべく、また道によつて當然享有すべき天分ならば、巨富を積んで而も之れを國家社會のため、人生幸福のために博く活用すべしといふので、要は、勤儉克く産を治め、善散以て世を益せよといふに歸せられるのであります。君子は財を惜む。これを用ふるに道あればなり。(佛源禪師)

一三、做 做、閒 閒

切莫厭繁。當做的也要做。須知分定。得閒處略閒。

切に繁を厭ふこと莫れ。當に做すべき的は、也た做し做すことを要す。須く分定を知るべし。閒を得る處、略ぼ閒閑たれ。

當然の責務

人はもとより懶惰であつてはなりません。此の世に生きてゆく限り、誰れでも當然爲すべき事は、日々甚だ多くあります。しかし、如何に繁劇多忙であらうとも、義務責任は飽くまで果さねばならぬ。斷じて倦怠してはならぬのであります。こゝにある做の字は爲すと同義同用で、的の字は、支那の近體文(時文)會話語には盛に用ひられて居り、モノ、コトの意、また何々のといふ格助詞にも使はれます。

ところで、多々ます／＼辨ずといふ風に、事に當つて猛精進することは最も望ましいが、何事にも限度といふものがある。釋尊は佛弟子等に對して、痛く懈怠を戒め、精進の道を説かれたが、二十億といふお弟子が、不眠不休の極端なる精進をしたのを見て、琴の喩を以て懇誠されて居る。琴が絃によつて妙音を發するのは、その緩急宜しきかなふからで、絃を緩め過ぎては聽かれたものでなく、それかと云つて締め過ぎても耳に痛い、更に強く締めれば絃は切れて全く聽くことが出來ない。緩絃は即ち懈怠、急絃は大精進であるとして、

大精進するときは心亂る。若し精進せざるときは心に懈怠を生ず。若し其の中を得れば必ず解脱することを得む。

と教へられました。何事も此の中を得て宜しきかなふといふ分度限量を知らねばなりません。忙中に閑ありとも云ひ、心に餘裕を保つ修養が出來れば、如何に繁劇急忙の裡にも、心愉しき靜閑のひと時は見出せる



もので、さうした處を得て、悠々閑々たる自適の味ひを知れといふのであります。

雲は嶺頭に在つて閑不徹（不徹は徹盡の意）

水は欄下を流れて太忙生（生は助字——禪語）

### 二四、陰功、顯禍

爲善要藏。作陰功始大。有才莫逞。逞招顯禍禍將來。

善を爲しては藏さむことを要す。陰功を作して功始めて大なり。才有りとも逞しうする莫れ。逞しうせば顯禍を招いて禍將來に來らむとす。

陰功と顯禍を字眼として對句の妙を示してをります。前にも申しました如く、條件附の善事は僞善と謂はれます。眞の善は、天の命に率ふといふ（佛教の眞如法性）自己良心の絶對命令によつて爲されるもので、人に見せびらかし、人からほめられたり、何らかの利益を得ようとするものであつてはなりません。むしろそれは成るべく藏し味ますやうにするのがゆかしいので、これを陰功または陰徳といひ、古徳先賢の最も稱揚する徳目の一つであります。

成語に『陰徳は猶ほ耳鳴のごとし』といふがある。これは『北史』李子謙傳に見える故事で、此の人は自ら節儉を力め、資財を得るに従つて不幸な人々を救恤したが、それはいつも人知れず行ふのであつたが、或る人がその陰徳の大なるを讃嘆すると、

陰徳は耳鳴のごとし

陰徳は其れ猶ほ耳鳴のごとく己れ獨り之れを知るのみ、人の知ること無きものなり。今、吾が作す所、吾子皆な知る、何の陰徳か之れ有らむ。

と答へたといふ。いかにも自分の耳鳴りは他人には知られぬ。絶對無條件の陰徳は、それと同じ様子だと申すのですが、『淮南子』に『陰徳有る者必ず陽報有り、隱行有る者必ず昭名有り』とある通り、徳行善事は、闇中の光りが特に目立つやうに、藏して却つて人に知られ、大きく高く仰がれることになるものであります。この道理を逆に見ればおのづから明らかであるのは、自己の才能に誇り、輝かしい名や利などを豫想して、獨り天狗にのさばる者は、その言行の顯著なると正比例して、人から憎まれたり謗られたりする禍も顯著で、その禍は覆ふべからず、免れるところがないといふ結果を見ることであります。

白百合やおのが花粉の黄によごれ（露石）

### 二五、心不馳、身制慾

心若不馳。閉日天空海闊。身難制慾。請看燭滅燈消。

心若し馳せずんば、日を閉づるとも天空海闊ならむ。身に慾を制し難きとは、請ふ看よ燭滅し燈消ゆるごとくなるを。

只だ自心を覺る

『大莊嚴法門經』に『菩薩は餘事を覺らず、但だ自心を覺る……自心清淨なれば一切衆生の心清淨なり』と説かれてあり、『維摩經』には『菩薩、心淨ければ佛土淨し』ともあります。菩薩といふは道を求め道を成就



する人、賢人君子といひ換へて見られる人です。自心を覺るといふことが、道を求むるの第一であつて、自分の心を清くすれば他人の心も清くなり、人生世界も清くなる、道なるものは本來眞善美なる天地自然の大道であるからであります。

然るに、人心は常に此の道心に違背し、私情私慾を以て公明を味まし勝ちで、心猿飛び移る五欲の枝、意馬馳走す六塵の境といふ如く、五官を通して外境に心を囚はれ、本心をお留守にして居るので、行誠上人が、  
あれまさる心の駒は幾たびも

心の駒

鞭うちてこそすゝむとぞ知れ

と誠へられたやうに、流れやすい放縱の心の駒を、修養の手綱でシツカリ制して、邪道に踏み入れず、正しき道を進むことが出来るのであります。かくて天地の公道とピッタリ契合する本心に安住することになるので、たとひ目を閉ざるとも、即ち如何なる暗黒面に處するとも、天空海淵カラリとした心持で、無碍自在の働きが出来る。『大學』に『止まるを知つて而して後定まる有り、定まつて而して後能く靜、靜にして而して後安し』と云ひ『孟子』に『放心を求む』といふのも、こゝにいへる心を馳せざるの修養に外ならぬのであります。

この心の駒を鞭つことを怠ると、慾火いよく熾にして物毎に執着し滯滞するから、天空海淵の明達自在とは正反對で、『燭滅し燈消ゆる』の慘憺たる暗黒面を見なければならぬことになるのであります。

### 二六、撐天大柱、涉世神方

孝悌忠信禮義廉恥。是撐天八根大柱。慈愛溫良敬讓謙和。眞涉世幾箇神方。  
孝、悌、忠、信、禮、義、廉、恥、是れ天を撐ふる八根の大柱なり。慈、愛、溫、良、敬、讓、謙、和、眞に世を渉る幾箇の神方なり。

人の本然性

父母に孝なる、是れ百行の本、而も我が國體の精華として、忠孝一本、大孝は即ち君に忠で、忠臣にして始めて孝子たり得るのであります。兄弟には悌友、萬事に忠實至誠を致し、人と交つては相信じ、禮を正しくし、正義を重んじ、清廉にして闇根性は微塵もなく、およそ不正は恥とする。此の八つの徳目は、人の本然性であり人情の至極であつて、天地自然の公道と一枚なるものであるから、天を支へ持つ八基の大柱とも見立てられるといふのであります。

人生圓滿の秘法

右は自己主觀に堅く守り保つべき徳であつて、この徳を他に對して行ふ上には、慈悲、仁愛、溫厚、善良、恭敬、辭讓、謙遜、親和と成つて現はされる。この八つは『世を渉る幾箇の神方』即ち社會生活を圓滿にする秘法であるといふものであります。徳目は如何様にもならべ立てられますが、歸するところは一の誠を出す。誠一つの根幹からすべての道徳に展開せられ、眞善美の精華が見られるのであります。

### 二七、住心、閉口

定住心。不令他動作。他自澄清。謹閉口。莫説人短長。人無恩怨。  
定んで心を住め、他をして動作せしめざれ。他は自づから澄清なり。謹んで口を閉ぢて、人の短長を説く

上、靜、班



こと莫れ。人には恩怨無し。

こゝに他とあるのは、カレといふ代名詞で、支那の俗語、會話語に常に用ひられ、禪語には非常に多い。今は心を指して居るのであります。

明鏡止水の心境

心とはコロ／＼の義などとも言はれ、前にも申したやうに、猿の如く馬の如く、絶えず動轉し、そのために邪路に迷ひ入るものでありますから、靜坐、坐禪等の方法を以て、或は道義信念等によつて、シカと一處に定住せしめ、輕舉盲動を制することが肝要である。元來、『他』カレ心なるものは、何ら暗き影もない、何の波瀾もない明鏡止水の如きを本體とするものであるから、心が禪定、寂靜の状態に住すれば、おのづから此の本體と一如になり、散亂妄動は無いわけでありませう。『遺教經』には、妄心の變轉して五欲に散走することを説いて、

佛の教訓

惡馬の轡を以て制せざれば將當に人を牽いて阮陷に墜さんとするが如し……又狂象の鈎無く、猿猴の樹を得て騰躍蹕躑して禁制すべきこと難きが如し。

と言つてありますが、また、禪定を以てこれを攝すべきことを教へて、

念を攝むる者は、心、定に在り、心、定に在るが故に能く世間生滅の法相を知る、若し定を得るものは心則ち散せず、譬へば水を惜む家は善く堤塘を治するがごとし。

といひ『入楞伽經』には、

心則ち濁亂を離るれば、我れ心を説いて佛と爲す。

と示されてあります。次に口を守ることを警しめ、人の長短を説くなど言ふ。口の禍門であること、他人の長短を説くべからざることには前にも申したところでありませう。おのづから澄み透つた清き本心を以て達觀するとき、どこに是非すべき人の恩怨などがありませう。

天津空照る日の下にありながら

くもる心の隈も持ためや (桃蓮)

暑き日や心すませば風のふく (桂丸)

### 二八、怒 氣、勞 心

怒氣伏寛。用寛自然少怒。勞心喜逸。處逸慎勿忘勞。

怒氣は寛に伏す。寛を用ふれば自然に怒を少くせむ。勞心は逸を喜ぶ。逸に處しては慎んで勞を忘るゝこと勿れ。

怒は敵

怒りは敵と思へといふ通り、誠に人生最大の強敵たる一つに數へられ、古聖先賢のひとしく懇誠せられるところでありませう。『大莊嚴經論』に、

身は乾ける薪の如く、瞋恚は火の如し、未だ他を燒くこと能はずして先づ自ら身を焦く。

と切言されてある如く、怒火心頭に發すといはれる通り、實に怒りは身を燒く猛烈な焰であります。これこそ殺人鬼というてもよいでありませう。しかし此の強敵は外に居るのではない、自心の内に頭張つて居るも



ので、一休和尚は、

鬼といふ恐ろし者はどこに居る

おのが心の内に住むなり

怒の正體

と歌つて居る。心の偏狭、わがま、根性といふヤツが、此の恐るべき火の玉を成すのであります。自心の内に在る敵は、自心を以て打ち取るよりほかにないわけですが、その打ち取る一手を、こゝには寛の一字を以て示して居るのです。寛とは、寛仁、寛恕、寛大、寛容で、心廣くゆたかにして、他をゆるし容るゝ度量で、寛廣と偏狭とは兩立出来るものでないから、怒りは寛に伏し、寛を用ふれば自然に怒りが少くなるのは自明の理であります。が、この修養が甚だむつかしいのであります。

沸きかへる胸に劍をおし當てゝ

言ひたきこともしばしとゞめよ

怒と修養

心に刃は、即ち忍の字で、じつところへしのぶことが自心を打ち取るに必勝の陣法と云ふことが出来た。或る人が、腹の立つときには鏡を出して自分の顔を見よと教へたのも一の修養法で、いかな美人でも怒つた顔は何としても好感を以て見られない。怒りは自分の醜態であると同時に、他人の心をも暗くし、恐るべき焰は限りもなく類焼の災禍を捲き起すのであります。

怒つて物を言へばロクなことは言はない。自分の怒りを増し人の怒りを誘發するばかりであるから、或る人は、怒つたときには物言はぬことが一番よいと云ひ、或は、一から十まで黙算せよとか、或は、水を一口ふくんで數分間の後呑み込んでから口をきけとかいふのも、怒りの言を亂發せざるための方法で、これが出

來るといふことは、それだけ心に餘裕が出来たわけで、即ち寛の義に通ふものがあります。

誰にもよく考へてから怒るものはない。つひ怒つてしまふので、怒りを外に現はさないといふ修養は容易でなく、聖賢も之れを難しとするところでありすが、つとめて寛の一字を忘れず、心にゆとりを保つやうに心がけ、怒つても直ぐに怒りを忘れ、怒りを宿さず、移さず、サツパリした氣分を取りもどすことのであります。

ひと時雨しぐれてもとの月夜かな

精力の休養

次に『勞心』とは、疲れた心で、努力勉強はよいが、その結果は疲勞倦怠を覚え、當然、安逸休養を喜び望むやうになる。これもよい。次の新たな精力を養ふために備へる意味に於て、力の休養、涵養は必要である。しかし、安逸に慣れ、これに沈溺しては、精神氣力を沈滞せしめ、腐敗せしめることになるから、逸を得て勞を癒すと同時に、逸を以て勞を忘れてはならぬといふ。これを天下國家にして言へば、治に居て亂を忘れずの戒心であります。

二九、覺 字、夢 看

大藏五千四十八卷 但得一覺字 便識因緣 百年三萬六千餘場 肯作此夢

看 何等自在

大藏五千四十八卷、但だ一の覺の字を得ば、便ち因緣を知らむ。百年三萬六千餘場、肯て此の夢看を作す、何等の自在ぞ。



直覺體得の妙

大藏とは大藏經、佛教の經律論すべてを収めた聖典全集で、一切經とも呼ばれ、漢字大藏經として初めて完成を見たのが、宋の太祖開寶五年に開版されたもので、その數五千四十八卷と算せられた——其後幾種も藏經の開版あり現在日本のもでは萬卷餘にのぼる——これほど浩瀚な佛典は何を説いたのかといへば、一の覺の字に歸せられる。釋迦は、宇宙人生、萬有の生滅變相を、三世十方にわたつて、その由つて來たる原因と事情および其の歸するところの結果を達觀し大覺した。此の覺りを展開して示されたのが一切經典であるから、人若し釋迦と同じ覺りを得るならば、萬有生滅の因縁を明らめ、生死透脱、自在逍遙を得ること佛に異なるなき境界に超入するといふ。これは、禪宗に即心是佛、直指人心見性成佛と高唱し、經典は月を標すの指、文字言語は閑葛藤であると喝破する直覺體得の妙趣であります。

人生は劇場

百年は人の一生を大數を以て表はしたもので、日數にすれば三萬六千日になります。この一生は喩へば芝居の舞臺のやうなもので、貴賤貧富、苦樂禍福、善惡是非、千差萬別なるは、人々主役になつたり端役をつとめたりして、泣いたり笑つたりの所作ごとをして居るやうなものだと見られるので、こゝに三萬六千餘場と、場の字を用ひたのも面白いと見られるのであります。

ところが、人々は芝居の所作ごとを本物にして、眞劍に泣きつ笑ひつして居ると思へば馬鹿々々しい話で、すべては實體なき夢のやうだと達觀すれば、人生の種々相、一として心を煩すものとはではない。何らの自在であらうといふ。夢看即ち達觀とするのは消極的で、眞の大乗ではないと謂はれますが、是れ亦た紛々たる俗事超脱の一工夫として、大に效果的の一法であります。

一切有爲法

如夢幻泡影

如露亦如電

應作如是觀 (金剛經)

露と置き露と消えぬる人の世や

なにはの事は夢のまたゆめ (豐太閤辭世)

### 三〇、布被、菜根

草榻心閑。布被逢春自暖。瓦盆飯飽。菜根放筋猶香。

草榻心閑なれば、布被も春に逢うて自づから暖なり、瓦盆、飯飽けば、菜根放筋も猶ほ香し。

清貧の樂

草榻は、草の座席で、粗末な住居、布被は粗末な布の着物で、たとへどのやうな簡素な住居や衣物であらうとも『心閑なれば』閑は毎度用ひられる字で閑と同義です。心に憂へ悲しみ心配といふものがなく、のんびりと朗らかで安らかな状態を保つならば、いつものどかな春の和風暖日の如く、心は愉しく満ち足りるといふのが前句。

下句は食物を以て住と衣に對にしたので、『瓦盆』は素焼の粗末な食器のこと、これは粗食の形容です。『菜根放筋』は、菜葉や大根、捨てるやうな野菜の屑、コマギレのやうな肉片などのことで、つまりひどい粗食といふのですが、たとへどのやうな粗食でも、『飯飽けば』腹を満たして飢ゑを凌ぐに足れば、何を食べても『猶ほ香し』美味を覺えて舌鼓が打たれるといふので、此の一聯は、衣食住の極めて貧弱のうちにも無限の精神的安慰が見出せるといふ清貧の樂を示したもので、正に菜根譚趣味の標本であります。



人は心の持ちやう

人は心の持ちやうと云ひ、男は氣で持つなども云はれ、同じ客觀對境でも、その人、その人の心次第で随分主觀價値は變るものです。一輪の明月に對しても、此の世をば我が世とぞ思ふと、満月の缺けたることなき得意に思ひ上がった大臣もあれば、月見れば千々に物こそ悲しけれと歌つた古人もある。曾てはハイキングとか、旅行とかで存分われを愉しませて呉れた山水も、若し失意憂愁の胸を抱いて再び往つて見たとしたり、山の高きも我が意氣地なしを笑ふ如く、海の壯快なる波浪も、われの臍甲斐なさを嘲るものの如く感じられる、といふやうなことは、事實、誰れでもが經驗するところでありませう。

神か人か

美人薄命とか、才子不遇とかの成語も、大に再檢討を要する餘地がある、ソノ檢討は、布被、菜根の簡素生活に、王侯の味ひ知ることの出来ない無上の至樂あることを、工夫し修養すべしとの教訓句であります。人間は動物より進化したといはれても、動物の如く本能を主として活動する單なる動物ではありません。人は人である。人である自覺精神は、神であり佛であるといふに通ずる道理があります。こゝのところ、動物か、神人か、唯物か唯心か、各人に篤とお考へねがひたいところであります。古くからの俗諺にも言ふではありませんか。

百萬石の知行取りよりあなたのそばで

手鍋さげるもいとやせぬ

これが客觀的條件のみで言へませうか。この主觀的なる強き力を、再び見なほして活かすのが修養の工夫であります。

### 三一、卿相、乞兒

平民肯種德施惠。便是無位的卿相。仕夫徒貪權市寵。竟成有爵的乞兒。

平民にして肯て德を種る惠を施せば、便ち是れ無位的の卿相たり。仕夫にして徒に權を貪り寵を市らば、竟に有爵的の乞兒たらむ。

平民と仕夫を對句にしてアシラつて居るのですが、平民とは、百姓や町人や、その他の野に在る國民のこと、仕夫とは俗に呼ばれるお役人、官員さんのことであります。しかし、これは貧富とか貴賤とか別たれる境遇地位を對照せしめた假借の名で、こゝでは只だ人間として、價值と意義を持つか持たないか、問題なので、その評價の目安を、どこにおくかといへば、ソレは一に徳に在りといふのが此の一聯の眼目であります。

忠實だ、正直だ、といふのみでは自己を正しくするだけの話、他を益するまでの度量がないならば、乞食が自分だけの生命は、兎も角も持續して居るといふのと擇ぶところはなない。この點に於て、たとへ高官富豪であつても、他に奉仕することを知らねば、これ亦た『有爵的乞兒』で、貴族の形をした乞食だといふのであります。

地位や名譽は問題ではない。徳を種る、自利他圓滿を目安において一言一動を律するといふのが眞の紳士、君子であるといふのが急所であります。今の世、この意味に於ける乞食の多いこと、そして卿相紳士と



讃へるに足る人格者の、何と少いことに痛嘆を禁じ得ないではないでせうか。佛の教訓にも次のやうな  
あります。

真人

自ら貴しとして他を賤しとなす者は真人にあらず。法を行ずること如法にして、眞諦の法に趣向き、自らを貴しとせず、他を賤しとせざるものは真人なり。(中阿含經)  
上族の中に生ると雖も、極惡の行を作せば衆人皆な呵責す、是れ則ち下賤と名づく。種族は卑く微なりと雖も、内に實の道行あれば人の爲めに尊奉せらる、是れ則ち尊貴と名づく。(大莊嚴經論)

### 三二、留 福、種 心

留福與兒孫。未必盡黃金白銀。種心爲產業。由來皆美田良宅。

福を兒孫に留むるは、未必必しも黄金白銀を盡さず。心を種て産業と爲すは、由來皆な美田良宅なり。

有 限 的 の 黄 白

福といふのは、こゝでは物質的な財産を意味して居るので、これに對して心を種るといふのは、精神的の徳を申すのであります。物的資財は有限的で、用ふるに従つて減少し、つひに無くなつてしまふ、しかも如何に巨萬の富を家に留め子孫に遺すといつたところで、金貨、銀貨の或る數量を積むに過ぎず、金銀を盡く我が一手に保有することは出来るものではない、天地の廣大悠久なるより見れば、誠に言ふに足らぬ儂いものである。銀は銀錢のことでありませぬ。

徳は不朽

精神的の徳は、利己主義の物慾を離れたもので、天理人道に合致するから無限の生命があり、不朽に世を

益する、即ち皆な美田良宅であると謂ふことが出来るのであります。

しかしながら、物心は一如、人は精神のみで生きて居るのでなく、衣食住の物資なくしては一日も身を養ひ命をつなぐことは出来ない、この爲めに金錢は事實人生の御寶でなければなりません。金錢を卑しめるいはれはない、但だ之れを扱ふ心次第で、卑しくも尊くもなるのだといふことを知らねばなりません。

昭憲皇太后御歌

持つ人の心によりてかはらとも

玉ともなるはこがねなりけり

### 三三、快 意、傷 心

快意事休誇。自古敗名因快意。傷心事莫説。從來結怨爲傷心。

快意の事は誇ることを休めよ。古より敗名は快意に因る。傷心の事は説くこと莫れ。從來怨を結ぶは傷心の爲めなり。

安 心 満 足 の 限 度

何事にせよ、自分の思ふツボに嵌まり、成功した場合、満足と安心とで愉快を覚えるのは、人情の自然でツレがわるいといふわけではないが、その快心得意の程度が兎角過ぎ易いのが困りもの、得意快心の度を過ぐれば、他に對して誇りちらす。それが小人の常で、心驕り自慢するところに、緊張を缺き中正を失して、人の指笑を招くやうな失敗を招くことになる。自慢高慢馬鹿のうちと云ひ、驕る者久しからずといふ所以であ



失意の脱線

傷心の事とは、前者の反対で、物事が思ふやうに成らず、若しくは思ひも寄らぬ反意的の出来事に遭遇した場合の心配、歎き、悲しみの心的作用であります。かうした失意煩悶の逆境に在つては、孔子の謂はゆる『小人こゝに窮して亂す』で、忽ち心の正常を失ひ、言行も過激となり脱線し易いものである。故に失意の事はジツと自分の心に隠忍し、自重して善處の途を考へるのがよいので、此の慎みがないと、天道是非か、神も佛もあるものかなどと自棄に陥り、世を咀ひ人を怨むやうな言動を敢てするから、當然の反響として、人の怨みをも誘發し、自他の平安を損壞するに至るのであります。

勝海舟の嘗て人に語つて、

天下の事、凡て春風の面を拂つて去るが如き心境、此の度胸あつて始めて天下の大局に當ることが出来る。

と云はれたのは此の場合、思ひ合すべき訓言であります。

三四、忍心、緘口

一忍住心。百辱場中自在。三緘其口。群争陣裡安閑。

一忍、心を住むれば、百辱場中にも自在なり。三たび其の口を緘れば、群争陣裡にも安閑たり。

忍の字を分析すれば、刃に心であると、前にも申しました通り、白刃頭上に臨むもジツとしてゐるといふ

字、このやうな不動の心に成りきるといふことは、ナカノ、容易ではないが、忍の一字には實に、そんなに偉大な力があるのです。

シノブ、コラヘルと訓み、俗に我慢するといふのが此の忍の字であります。これを忍耐と熟字すると、自然的なる對物、對事の意味になり、これが堪忍と熟用されると、對人的になると、かやうに區別して見られるのですが、いづれにしてもコラへ、シノブの心的作用は同一で、『石の上にも三年』とか『憂き事の尙ほ此の上に積もれかし』とかいふのは忍耐の力を道破せるもので、まことに忍耐は、學識、才能、地位、權力等一切を超越し、また有らゆる不遇不幸に面しても、唯一なる良藥となる。人生招福の鍵とも申すべきものであります。

有力の大人  
諺の『負けるは勝ち』とか『成らぬ堪忍するが堪忍』などいふのは、對人的の忍で、頗る消極的のものとありますが、これの徹底的なるに於ては、超積極的ともいふべき偉大な力となるもので、佛陀の遺訓にも、忍の徳たること持戒苦行も及ぶこと能はざる所なり。能く忍を行ずる者は乃ち名づけて有力の大人と爲すべし。

とあります。我慢が出来ない。こらへ情がないといふのは、畢竟、氣宇小にして胸腹が狭いので、修養圓熟した人格の博大さは、實に忍によつて洗練された力の反映であるときへ謂ひ得られるのであります。  
負けてのく人を弱しと笑ふなよ

智慧の力の強きゆゑなり

本文に『一忍、心を住むるとある』此の心とは、一事一物にこだはつて喜怒哀樂する小我の狭き心で、此



の心の輕舉妄動を、忍の強き力で一處に制止して不動ならしめるのを住むると云うたのです。一事一物によくこれが出来たらば『百辱場中に自在なり』で、複雑なる人生に無数の事件に出會ひ、随分我慢のならば屈辱を受けやうとも、毫も心を動轉することなく、自由にさばいて行けるといふのであります。

勘忍六助

むかし六助といふ男、どのやうな事にも曾て怒つたことがないといふので、人呼んで堪忍六助と云つて居たが、無頼漢の若い衆五六人、ひとつ其の堪忍の度を驗めして見ようと物好きな茶目氣を出し、六助を途に要して、あられもない罵詈謗を浴せたが、六助の面上から微笑が消えないので、つひに寄つてたかつて、袋叩きにした。しかもつひに怒りの影さへも浮べないので、さすがの不良青年共も呆れ、且つ畏敬の念に打たれないではゐられなくなり、扶け起して叩頭拜謝した上で、

『あんたは人間ぢやない、神様、佛様だ。どうしてそんなに堪忍が出来るのか、必ず何か秘法があるにちがひない。どうぞそれを傳授して下さい』

と願ひ出るのであつた。六助は笑ひながら、

『秘傳も何ありません。一つ打たれたら、此の一つを我慢すればすむと思ひ、二つ打たれたら、又この一つさへ辛抱すればと觀念する。今あんた等はみんな何百なぐつたか知らないが、私は只だ一つ一つをこらへただけですよ』

と答へたといふ。一を忍んで全てを忍ぶとは面白い。正に一忍以て百辱中に自在なるの妙法といふべき例話であります。俗にも『一事が萬事』と云ひ、禪語にも、『一處透れば千處萬處みな透る』とある如く、一忍よく徹底するならば、人生萬事すべて心を累はすものはありますまい。

『三たび口を緘づる』といふ句は前にもありました。三たびと數を限定した意味ではなく、口を護つて言を少くし、自他を損傷せざるやう慎しめとの意で、これ亦た忍の力によつて能く爲されるものであります。従つて『群争陣裡』いかに周圍がうるさく喧争する中に在つても心は平安閑靜なる状態を保つことが出来るのであります。

もろ／＼の心、柳にまかすべし (芭蕉)

蝶々や花の上下あらそはず (千山)

三五、淡薄處、馳騁時

家常滋味。多偏好。淡薄處。要開口嘗嘗。妄費精神。少不妨。馳騁時。

須轉頭看。

家常の滋味は偏好多し。淡薄の處、口を開いて嘗嘗することを要す。妄りに精神を費せば妨げざること少し。馳騁の時須らく轉頭して看よ看よ。

口の贅澤と  
營養

平生の生活に、濃厚美味の食に慣れると、口がおごつて美味も覺えずなり、アレコレと好き嫌ひをいふやうになつて、食慾と消化の關係から營養價値も自然減殺されることになるものである。だから『淡薄の處』アツサリした軽い物、たとへ菜根の如き類でも、空きつ腹を満たして、旨味を覺えるやうにする必要があるといふ。つまり贅澤趣味で食物の選り好みをするな、食慾を封じて、食は只だ飢を凌ぎ生命を持續すれば



曾呂利が奉  
公の秘傳

足るといふ意味に徹底するならば、淡薄沒滋味の物に於ても滋味養分を攝取することが出来るといふに歸せられるのであります。

かの曾呂利新左衛門を、若侍達五六人が取り巻いて、たづねた。

『貴公は、太閤殿下の前で臆面もなくタワイないことを言ひ、時には随分皮肉なことも申し上げるが、殿下はいつも上機嫌でおはす。われ／＼は賞められるやうにと、些細の事にも氣をつけてゐながら、お叱言ばかり蒙る、これは何としたことござらう。何ぞ必ず秘傳があるにちがひない。是非教授に預りたい』

と、曾呂利は大まじめに、

『それア其の秘傳がござる、お教へ申さう』

と云つて、先づうまさうな菓子や御馳走をいろ／＼とならべ挙げ、かういふ物を毎日食べさせるとしたらどうかと訊く。若侍達はみな大喜びの色を浮べて、そんな有りがたい話はないといふ。そこで曾呂利、

『では當分この曾呂利が各々方々毎日そのお好みの上菓子など存分に御振舞ひいたす、が、しかし、それは三度々々の飯の代りござるぞ、それでよろしいか』

と、聞いて皆なは忽ち困つた顔つき、いくら御馳走でも飯の代りでは困ると、口をそろへていふのを待つて、『そこござるよ、それが秘傳ぢや。各々方の御奉公ぶりは、殿下のお氣に入らうとばかりたくらんで、ちやうど濃厚の滋味、甘味のみを進めるやうなもの、やつがれのはアッサリとした白飯を参らすのさ、おわかりか』

と、諧謔まじりに尙ほ懇々と諭したといふことであります。肉體を養ふ食物ばかりでなく、精神方面の事、

心機一轉の  
工夫

何でも此の要領で、淡泊酒脱の一面を閑却すべからざることを知るべきであります。本文下句は即ち此の意味の延長にほかなりません。

『妄りに精神を費す』とは、物事の中心を外れて、氣力を徒勞に消失する、謂はゆるムダ骨を折ることです。だから『馳騁の時』即ち忙しく奔走し活動せねばならぬ時に當つては、心機一轉の工夫を要するといふのであります。凝つては思案に及ばずとも云ひます。熱中するはよいが、それが能率的でなくしては骨折りの損の結果を免れない。『轉頭』心機一轉して些しく心に餘裕をつけて看なほすとき、徒勞は清算され、そこに復た新たなる精力が發揮される。是れ亦た實際に頗る大事な修養で、禪の悟道に、退歩承當と云ひ、轉身の活路と云ふも、こゝの消息と相通する妙趣であります。

### 三六、榮辱、死生

心中榮辱、心不着。即無榮無辱。世外死生。世肯忘。可任死任生。

心中の榮辱、心、着せざれば、即ち榮も無く辱も無し。世外の死生、世、肯て忘れば、死に任せ生に任す可し。

此の一聯は、眞に能く參究し透徹するならば、人生の一切を超えて解脱自在を得べしと謂ふほどの重要意義があります。

榮辱と恥辱、此の二つを以つて、あらゆる順逆の二境を代表せしめて居ると見られるので、貴賤、貧富、



毀譽は人生の雲霧

苦樂、得失、善惡、是非等々すべて榮と辱のうちに收められるのでありませう。ところで、『言志錄』にも毀譽得喪は眞にこれ人生の雲霧なり、人をして昏迷せしむ。此の雲霧を一掃すれば則ち青天白日なり。とある通り、全く人の口には戸は立たず、善きにつけ悪しきにつけ、何だかんだと揚げたり下げたりせられる。それが謂はゆる盲千人、目明き千人の世の中、君子賢人といはれる人格は甚だ稀れで、他人のことを彼れこれいふ者それ自身が、皆な大に彼れこれ批判を受けねばならぬ連中であり、定見も信念もない雜輩ばかりですから、毀譽、榮辱といふも眞に雲か霧かのやう、自性自體のないタワイないものであると達觀せられる、此の達觀だにあらば、人の噂など、豈七十五日を待たんや、褒貶何かあらむ、すべて即座に雲散霧消し去るものであります。

佛の巧喻

釋尊は、惡言罵詈を戒むるに種々の譬喩を説いて居る、たとへば人の家に物を贈るに、その人受けざれば自ら持ち還らねばならぬ如く、他を罵つて他これを意とせざれば、罵りは只だ自身を傷けるのみであるといひ、或は惡言は天に向つて唾を吐くやうなもの、風に逆つて塵を揚げるやうなもので、結局自分を汚すことになる、等と説かれて居ます。

かやうに世の毀譽榮辱なるものは、人の安心中の所産であつて實體なきものであれば、ムキになつて取り合ふのは愚の至りといふべきで、即ち『着せざれば榮も無く辱もない』わけであります。

君子大人の襟度

伊藤仁齋は君子聖人の風格ありと謂はれた大儒であるが、大高坂芝山といふ學者が『適從錄』一篇を著して、仁齋を槍玉にあげ烈しく譏つたのに對し、門人共が痛憤してこれが反駁を迫ると、仁齋は、『若し彼れの論が是で我が説が非であるならば彼れは我れの益友である。若し彼れ非にして我れ是ならば、



一大事

彼れ他日自ら其の非を悟るであらう。學問の要は虚心平氣、一途に己れの道徳を磨くに在る。君子は争はずとは聖人の教ふるところ、諸子も我見を捨て、自己の徳を修めるに勉めることを先きとせよ』と懇誠したといふ、この虚心平氣にして固我を捨てるのが、心、着せざるところであります。『世外の死生』とは『心中の榮辱』と對にした字句で『死生は世外のもの』と置きかへて見ると意味がよく通じます。榮辱、得失、悲喜、等すべての相對は、もと／＼人が生れて死んで行く此の世一生の間の事で、若し生なく死なければ、人生一切の事が無い。故に死生を明らかにする心によつて、人生のすべてが解決されるとも見ることが出来るので、佛もこれを一大事因縁と呼び、この爲めに出現したのが本懷であると説いて居るのであります。

死の覺悟

希臘のエピクロスは『吾れ在るの時、死なし、死來る時我なし、我と死とは終に相逢はざるなり』といひましたが、此の死生のことには前にしば／＼申しましたから、こゝに略しますが、彼の白隠禪師の

若い衆や死ぬがいやなら今死にやれ

一度死んだらもう死なぬぞや

何ごともみな捨て切つて死んで見よ

えんまも鬼もぎやふんとするぞ

と、若い武士達に教へられたやう。此の死の覺悟さへ出来れば生は一切に善處する活路が見出せるといふ道理であります。が、此の覺悟がナカ／＼たやすく出来難いものであります。長崎の或る醫者で、頗る氣概を自負し、坂本龍馬などに劣るものかと、常に豪語してゐた人が、病床に呻吟して今は臨終といふ直前に大悟



坂本能馬の偉らさ

し『坂本の偉らさが今ハッキリわかつた。おれは矢張り彼れには及ばなかつた。といふのは、彼れは平生に死の覺悟がチャンと出来てゐたからだ』と言つたと、これは頭山滿翁の談であります。死の覺悟の徹底といふことが、如何に難かしいものか、また此の覺悟が如何に偉大な原動力となるものであるかを知るべきであります。

生死に任す

死の覺悟に就ては禪の修行が一番よいと謂はれますが、此の問題は理論説明では到底解決されるものではないので、各自が眞剣なる大死一番の體驗的自得に俟つよりほかないのであります。本文には『世を忘す』と簡明に言つて居りますが、世に居て世を忘れるとは、死んだ身で生きて居る、または生きながら死んで働く云ふのと同じ意味で、死にも生にも心を住着しないといふ超越心境、それを『死に任せ生に任す』と言つたので、この任す心になり切れたら眞に達人と申すべきであります。こゝに道元禪師の深切なる言葉を擧げて、此の説示も及ばざる妙趣の説示に代へ、實參實究の手引に供して置きます。

生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもなし、このとき、はじめて生死をはなるゝ分あり。生死は佛の御いのちなり、これをいとひすとすれば、すなはち佛の御いのちをうしなはんとするなり。これにとどまりて生死に着すれば、これも佛の御いのちをうしなふなり。

もろくの悪をつくらず、生死に着するこゝろなく、一切衆生のためにははれみふかくして、かみをうやまひ、しもをあはれみ、よろづいとふこゝろなく、ねがふこゝろなく、心におもふことなく、うれふることなき、これを佛となづく。

大聖は生死を心に任す。生死を身に任す。生死を道に任す。生死を生死に任す。

### 三七、守心、聽命

即天即地即神明、守心在此。任死任生任遲速。聽命隨行。

即ち天、即ち地、即ち神明、心を守ること此に在り、死に任せ、生に任せ、遲速に任す。命に聽いて隨ひ行ふ。

天地神明の前に俯仰恥ぢざる心を守り保つとは、これほど公明正大な心はありません。人は天地の正氣を享けて能く萬物の靈長たるものといはれ、『中庸』にも『天の命これを性と謂ひ。性に率ふこれを道と謂ふ』とある如く、天地の公道に即し、これに則るのが人の道であります。

この公明正大の心を以てすべての行動の規準と爲さば、生死、苦樂等に心を引かれて悲喜の妄情を起すこともない、只だ天の命として一切を任かせた氣安さで生涯を終始することが出来るといふ。これは淺薄な宿命論、運命觀ではないので、天地神明と一如なる公明正大といふのを前提としての達觀でありますから、謂はゆる人事を盡して天命を待つ立派な態度であります。

なにごとともあなた任せの年の暮 (一茶)

### 三八、天理、機謀

天理路上行走。遭逢俱是福星。機謀場内安身。撞遇盡皆讐敵。

人事を盡して天命を待つ



天理路上に行走すれば、遭逢俱に是れ福星たり。機謀場内に身を安ければ、撞遇盡く皆な讐敵たり。

天理自然の誠に則つて『行走』と何事も實行し活動するならば、直面するところ總てが幸福の運命と感ぜられるであらう。言行は飽くまで眞實至誠であらねばならぬ。

若し公明の心事を掩うて、私心私情の加味された機謀策略を用ひて世を渡るならば、行くところ到處、周圍がみな讐敵となるであらうと、對照的に誠の徳を示して居るので、前にも申した大西郷の名言『人を相手とせず天を相手とせよ』といふのと同じ眞諦であります。

### 三九、佛祖、神仙

佛祖無<sub>レ</sub>奇。但作<sub>レ</sub>陰功莫<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>藥。神仙有<sub>レ</sub>法。只生<sub>レ</sub>歡喜不生<sub>レ</sub>愁。

佛祖、奇無し。但だ陰功を作して藥を作す莫きのみ。神仙、法有り。只だ歡喜を生じて愁を生ぜざるのみ。

純眞なる利  
他心

佛とか祖師とかいふと、何か異常奇特のものを所有した存在の如く思ふが、別に不思議な功德とてあるのではない。但だ人の知らない限りなき慈悲心を以て、世の爲め人の爲めに平等の利益を計り、微塵も人生の災害になるやうな種子を蒔かないだけだといふ、この『だけ』が容易のことではありません。切言すれば、利己の念が一點もなく、利他の精神を無限に貫くのが佛祖であるといふに歸せられるので、道元禪師が『自ら未だ濟ひを得ざる者も先づ他を濟はむとの心を起せば、それは既に世人の慈父であり導師である』と示さ

不安心

れた如く、我々も此の心を發するところに應分の佛祖たり得るわけであります。

神仙といふも同じことで、若し特に仙法有りとすれば、それは只だいつも心に歡喜を生じて憂愁の暗いかげを露ほども宿さないといふだけのことであると、佛教と道教の二つの理想を並べあげて對句にして居るのですが、究竟の心地に變りはないので、有り難くて堪らない心は愉快でたまらないもの、愉快で此しの暗影もない大満足、不安心は有り難い心にちがひありません。

佛はと問へば迷はぬものぞなき

おのがこゝろと知る人もがな(無難禪師)

### 四〇、炎涼之態、妒忌之心

炎涼之態。富貴多<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>貧賤。妒忌之心。骨肉甚<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>外人。

炎涼の態、富貴は貧賤よりも多し。妒忌の心、骨肉は、外人よりも甚し。

質實剛健の  
鍛錬

炎涼とは、暑さ寒さといふことですが、この二つを以て、有らゆる人生の苦樂、悲喜の二面を代表せしめて居るので、人生もとよりこの二面は複雑であります。『富貴』有閑階級といはれる坊つちやん育ちの人には、複雑にして多難なる試練に直面した経験がないために、少しの外的條件でも、忽ち非常に苦痛を感じる——チョツと寒いのが大へん寒く感じ、そんなに暑くないのに馬鹿に暑いと思ふやうに——それは下層勞働者達が、平生心身の鍛錬によつて平氣で忍耐してゆくの比して、誠に弱々しいものであるといふので



感情の修養

つまりこれは身心を錬り意志を鍛へて質實剛健なれといふに歸せられるのであります。

次の句は感情の修養に關するもので『妬忌』と、ネタミ、忌み嫌ひ、相互の平和を破る感情の衝突は、他人に對するものよりも、むしろ骨肉親族間に起つたものの方が、一層深刻であるといふのであります。

普通人の衝突不和といふものは、大ていみな利害損得が中心條件であるから、毎度申す少欲にして利他を念とすれば、斯の紛争は避け得られるのですが、俗諺に『金錢は親子も他人』といふ如く、血を分けた仲は他人に對するよりも、露骨に意志感情を表出するので、争ふべからざる親しい仲の争ひとなると、よく／＼根強いものがあり、容易に納まらないことになるので、近い間にも垣、親しい仲にも禮儀といふ慎しみが必要である所以ですが、何といつても血は水よりも濃しで、互ひに一本の根幹に於ける枝葉である關係に思ひ到れば、醜い親族の争ひは、おのづから解消される筈であります。

上つ枝の花の雪にうるほひて

下枝のつぼみ香に匂ふなり(村上忠順)

四一、事勢、機縁

事勢已成敗局。就該撤下。留在心中。越添愁悶。機縁未、有頭緒。當聽自

然。強去營爲。多貽後悔。

事勢已に敗局を成さば、就該に撤下すべし。心中に留在せば、越えて、愁悶を添へむ。機縁未だ頭緒有らざるば當さに自然に聴くべし。強ひて去つて營爲せば、後悔を貽すこと多からむ。

新規まき直し

何事も最早失敗の狀勢と見たら、早く見切りをつけて、新規まきなほしでやるがよいといふのです。『就ち』は直ちの意、『撤』の字は拂また撃の義で、放下することです。物にならぬとわかつて居るのにクヨクヨして、いつまでも心に留め執着すれば、『越えて』度を過ぎて、いよ／＼心を勞し痛ましめることになり。たとへば板に丸い穴を作る場合、よいかげんにして置けばすむものを、少しイビツだと氣にかけて、小刀の尖でいぢくれば、いちくるほど變な形になり、しまひには途方もない無細工なものにしてしまふと云つたあんばいです。最も適切に見られるのは圍碁で、下手碁に限つて、駄目な石をいぢくりまはす。ソツとして他に局面轉回を圖ればよいのを、わるあがきして、二三日棄て兼ねた結果、十目も二十目も取られて一べんに敗局にしてしまふのであります。何事にもサツパリした見切りの心があつて、種々の煩悶憂愁も乗り越えることが出来、新たな努力向上が期せられる、謂はゆる心機一轉の工夫であります。

事を成す機會

凡そ何事によらず、此の成るには成るべき機會因縁、即ち適當の條件と潮時といふものがある。それをよく見きはめて着手するのが肝要で、機未だ熟せず、事の端緒を見出さない間は、しばらく隠忍自重して、成り行きにまかせるがよい。強ひて躁急に畫策し盲動するならば、多くは慘敗を招き後悔をのこすことになるといふ、尺蠖の屈するは伸びんが爲めなりで、自重して待機するのは、大に成さんとする力の蓄積であるところ、意義がある。但し馬鹿の考へ休むに似たりでは仕様がありません、善く鼠を捕る猫は、實に辛抱強く一つところに蹲んで眠れる如くにさへ見えるが、チラと鼠の姿を認めるや否や、電光石火の勢で飛躍一番、わけなく啗へて居る。あのコツです。前句の事勢と此の機縁と、相表裏して一つに考へ、妙機妙用を體得すべきであります。



### 四一、創業、守成

創業維難。父祖倍嘗辛苦。守成不易。子孫宜戒奢華。

創業は維れ難し。父祖は倍して辛苦を嘗む。守成は易からず。子孫宜しく奢華を戒むべし。

創業はもとより至難、又、その業を繼承し保持する守成も容易ではありません。而も此の兩者全からざれば有終の美を望むことは出来ない。字句甚だ簡明で、特に解釋の要もないほどのものですが、修養の箴、座右の銘として最も意義深い好聯であります。

眞珠取りの話

昔、印度の或る長者が、家の寶庫に無い赤眞珠を一つ欲しいものと思ひ立ち、海に入つて我が身を刺し、その血を草囊に盛つて海底に沈め、珠蛤を誘ひ出すといふ方法により、三年間のえらい辛苦艱難を重ねて、やつと一箇の赤眞珠を獲ることが出来た。それを持つて歸る途中、山中で悪者の爲めにその寶珠を奪ひ取られ、おまけにその身は千尺の井戸に突き落されてしまつた。ソコへ突如、横穴から恐ろしい一頭の獅子が出て來たので、長者は氣絶したものの、如くであつたが、獅子は氣づかぬらしく、水を飲んで直きに行つてしまつた。長者は、しばらくして恐る／＼その横穴をくぐつて見ると、やがて再び往來へ出ることが出来た。それから彼の悪者の家へたづねて往つて、どうか赤眞珠を還してくれといふと、悪者は、地獄の鬼が連れ出しに來たのかと、驚くまいことか、畏れをのゝき、平身低頭して珠を返したので、長者は喜び勇んで無事に我が家へ歸つたのである。

それから幾年か後のこと、長者の愛子、太郎と次郎とが、室の中で赤眞珠の話をして、コンナ立派な珠が一體どこから出たのかといふ話、弟が、囊の中から出たのだといふと、兄は、イヤ囊の中から出たのだといふ。隣室で聞いてゐた父の長者は、子供らは親の苦勞も知らずに、無邪氣なことを云ふと、懲笑を禁じ得なかつた、と、これは『衆經撰雜譬喻經』に見えて居る話で、釋尊はこれを阿難に語つて、汝等は我が成道を只だ六年の修行によるのみ見るのは、長者の子達のやうな短見である。われは娑婆往來八千返の大修行を積んで今の佛果を得たのであるぞ。無上の佛道を成ずること容易の觀をなしてはならぬと誠へて居るのであります。

お五ひ現在の生存生活に、われらの祖先、先覺の恩徳が如何に多く積集せられて居るかを思はなければなりません。日々三度の食事にも、此の感恩感謝は湧かされるので、うまい、まづいの不満など言はれた義理でなく、以て有らゆる奢侈贅澤を封じ、守成報恩の實を示すべきであります。

### 四二、仁人之言、君子之交

仁人之言。藹如其吉。君子之交。淡而無文。

仁人の言は、藹として其れ吉の如し。君子の交りは、淡として文無し。

仁人とは、仁慈の心を以て常に利他を先とする人、佛教の菩薩の如き人であります。心常に慈愛に満ちて居るから、思想の表現である言語も春の如く溫和で、聞く者をして慶快の情を湧かしめる、これは當然、必



愛語

然であります。藹の字は、草木が繁茂するかたち、即ち覆ひ包む義で、賢人の態度風貌をあらはすに用ひられ、吉は善なり、利なり、俗に目でたいといふ字であります。大乘の菩薩の行法に四攝法といふのがあり、その一つに愛語といふのがあることは前にも申しました、内に慈愛の念を蓄へて、それが言葉となつて外に現はされたものが愛語で、愛語は、徳あるはほめ、徳なきは憐む、未だ曾て人を憎むといふことがないから、何人をも悦服せしめずにはおかないものであります。

中正の心

君子とは、理知、情意圓滿なる人格者で、心に偏頗がないから、謂はゆる巧言令色を用ふることがない、従つて、人と交り接する上に、些しの作り飾りといふものがない。中正にして程のよさを保つて居るから淡々と、アツサリしたものであるといふ。文の字はアヤと訓み、上への飾り、模様のことです。

君子は先づ擇びて而して後に交る。小人は交りて而して後に擇ぶ。故に君子は尤寡く、小人は怨多し。  
(文中子)

依頼心によつて吾人の周圍に參集する群は殆ど常に友情なき者なり、(アリストテレース)

四四、天、神

地以上即天。毋曰天之高也。人以外即神。當曰神之格思。

地以上は即ち天なり。曰ふこと毋れ天之れ高也と。人以外は即ち神なり。當に曰ふべし神之れ格思と。

地以上とは、地の直上といふ意味で、今吾人が立つて居る足もとも、地を一ミリでも離れたところは天の

天地神明の靈昭

うちであるといふのです。かう考へると、天とは高く仰ぐところの頭上ばかりではない。つまり天道、天命といふものは、有らゆる空間に普遍的であるといふのであります。

神明といふのもその通り、人の身を離れた一分一厘のところでも、神明の昭臨するところと曰ふべきであるといふ。思の字は、語頭または語尾に置かれて無意味の助字となる例があり、『詩經』の魯頌に『思樂泮水』同大雅に『神之格思。不可度思』の如きがそれで、今も之れに據つて居るのであります。格は至る、來るとよみ、至誠貫通するところ必ず神來るといはれるのであります。原書にも此の一聯には特に註を附して、

畏る可し、敬す可し、時刻も瞞じ味まし得ず。

と言つてある。天命、神意は身邊脚下、いつでも、萬華鏡の如く、昭々靈々として、寸時寸刻もこれにくらますことは出來ない。人の見ざるところでも、獨りを慎しみ一言一行に表裏なく、公明正大であれといふ戒しめで、畢竟、自己の本心を明鏡の如くして暗影を止むるなといふことになります。

神といひ佛といふも世の中の

人のこゝろの外のものは(源實朝)

四五、世事、人情

世事經過。蜀道平。人情歷盡。秋雲厚。

世事經過すれば蜀道も平かなり。人情歷盡すれば秋雲厚きのみ。



蜀道

蜀は今の四川省で支那の奥地、こゝへ行くには山川萬里の嶮を踰えねばならぬ、古來、蜀の棧道と呼び、蜀道と云へは嶮難の代名詞の如くに用ひられたもので、李白の『蜀道難』に『噫嘘噓、危乎高哉、蜀道之難、青天に上るよりも難し』などあるほどであります。轉じて蜀道難といへば、人生行路難の意に用ひられる成語となつたものであります。

世のなかを渡りくらべて今ぞ知る

あはの鳴戸に波風はなし

實際、世路の多岐、人情の反覆なる、眞に嶮惡至難であります。しかし、つぶさに世事人情を経過し體驗して、酔いも甘いも知りぬき、人生は只だ如是と達觀の眼が開けた圓熟の人格境界に至れば、さしもの蜀道難といはれる人生も平々坦々と見られ、測りがたき人情も、秋の高き天空に垂る、積雲を望むほどの思ひで、敢て自心を累はし傷めることもないといふのであります。

人生の二面

現在、日々の仕事にせよ、一般生活上の何事にせよ、愉快で樂なと思ふものよりは、むしろ不愉快で苦しいと思ふ方が多いと誰れもが感ずることでありませう、この順境と逆境、苦樂の二面は人生の現實として何人も逃避することは出來ないので、靜かに考へて突きとめて見れば、此の二面の判斷は各人の主觀に存するに過ぎないとの諦觀も出來るので、甲の樂は乙の苦であり、乙が是といふのが甲からは非と言はれる場合もある。若し相對比較の見を打破する一如觀に透徹するならば、憂しと見し世ぞ今は戀しきと言つた調子に、すつかり見直されるもので、畢竟、順逆、苦樂相對の二境は二物の客觀的存在ではなく、人生行路の難易といふも、本來一本道の行く手に横はる高低起伏の形に外ならぬもの、同じ分水嶺の南と北とも見られ

る地續きである。樂は苦の種、苦は樂の種で、山坂登つて峠を向ふへ下りれば平地坦々の處に出る。そこには嶮しい山も坂もない、と云つた様子が、世事人情を體驗的に經過した人の安らげく平らけき心境でありませう。

秋のそら日々はげて今日の月（左衛門）

四六、擔當、報答

愛惜精神。要留此身。擔當宇宙。蹉跎歲月。問持何事。報答君親。

精神を愛惜し、此の身を留めて、宇宙を擔當せむことを要す。歲月を蹉跎す、問ふ何事を持つてか君親に報答せむ。

天分使命

精神は、元氣、正氣で、これを大事に護り養ひ蓄へること、それは何の爲めであるかといふに、人として此の世に生存する以上、人として天より享くるところの使命、本分を果さねばならぬからである。五尺の一身、小なりといへども、五十年の一生短しといへども、決して／＼無意味の存在ではない、思へば悠久の過去より永遠の未來へと、天地宇宙と俱に、無始無終に不滅なる大生命線の一連鎖を成すもので、全と分との關係に於て、此の一身はそれ一小宇宙、一小天地であるといふことが出來るのであります。

人たる本然の使命

されば、我等が一日の生存は、直に宇宙の生命を保持するものであり、我等の一言一行は、天地自然の活用を體現するものであらねばなりません。故に天地の公道に率ひ、私念私欲を去つて、一日々々の生命を完



うし、天地自然が萬物を生成化育する如く、一事一善を怠らず、分を盡して世の爲め人の爲めに貢獻するを以て念とすべきが、人たるの本然使命で、かくの如き生涯を稱して『此の身を留めて宇宙を擔當する』ものと言ふのであります。

醉生夢死

此の身は焼けば灰となり埋われれば土となりて何も残らぬといはれるが、人が生涯に爲した事業または精神は永久に宇宙に留むる不滅の力となる。たとへば、石炭は燃やされて灰となり形は消え去るが、燃ゆる作用は蒸気を作り汽關車を運轉して、人や物を目的地に送り届けるといふ使命を果すと云つた様子であります。『蹉跎』は、事成らずして徒らに歲月を空費すること、人生成すこと無くして終るのは謂はゆる醉生夢死の徒、盲目的なる本能に終始する動物と擇ぶ所はない。それでは何として『君親に報答せむ』現在不忠不孝の甚しい者であり、遠き過去の祖先にも、未來悠久の子孫にも、誠に相濟まぬ次第で、さういふ者には全然人生がないと謂ふべきであります。

一天下二親に仕へ三寶を

四民まもらば五體あんぜん(宣應)

四七、眞學問、大文章

鳥語枝頭會心處。皆爲眞學問。花明檻外觸目時。盡是大文章。

鳥語枝頭會心處、皆眞學問爲り。花明檻外觸目時、盡く是れ大文章なり。

一幅有聲の畫

一幅有聲の畫とも謂ふべき好聯であります。春うらゝかに、庭の木の枝には小鳥が楽しさうに囀つて居る。その閑かな氣分に浸ることが、何の理窟なしに、眞實の學問である。學問とは天地の眞實を知ることにはかなりません。

窓外欄干の彼方には目も醒むるばかり、花の色鮮かなるを見る時、それは如何なる技巧作爲を弄した文章句も及ばざる自然の大文章である。文とは物の條理文彩の意で、巧まざる自然のそれは、美の極致であります。

般若多羅尊者は、出入の息の間にも常に如是經を轉すること百千萬億卷なりと云ひ、二宮尊徳翁が天地は常に書かざる經を讀むと歌つたことは前に引例しました。本文は春の花鳥を假つて自然の美、天地の眞を示して居るのですが、春に限つたことではなく花鳥のみの談ではない。蘇東坡は、

溪聲是れ廣長舌たり 山色豈清淨身に非ざらむや

と吟じ、道元禪師は、

春は花夏ほととぎす秋は月

冬ゆきさえてすゞしかりけり

と歌つて居られます。質實剛健、勤儉努力といふことの、生活戦線に如何に重要なかは申すに及ばずですが、人は他の一面に於て、心にゆとりを持ち、ゆつたり、どつしりとして、朗かに、愉しく、天地の徳、自然の美と溶け合ふといふゆかしさがなくてはなりません。それが人格の匂ひとなり、光彩となる貴いもので、要は情操の陶冶、趣味の涵養が必要だといふわけであります。

人生のゆとり



### 四八、酒、花

飲酒莫教成酩酊。看花慎勿至離披。

酒を飲みては酩酊を成さしむること莫れ。花を看ては慎んで離披に至ること勿れ。

孔子は『酒に量なし、たゞ亂に及ばず』酒量に限度はないが、飲んで亂醉するなといふのですが、常人はどうもむつかしい。『飲んだ酒なら酔はずばなるまい』湯や水を飲んだとちがひ、アルコールの作用は生理的に必ず酩酊の状態を招来することを免れませぬ。酩酊の結果の亂痴氣は今更言ふに及ばずです。ソコで常人は聖人の眞似は出来ないから、亂に及ばざるやうに、『酩酊を成さしむる』前に量を限定せよといふ訓であります。花を觀賞するにしても、爛漫たる満開まで楽しみ、更に紛々と枝を離れて落花するまで貪り觀ようといふのは、その貪りの心自體が美を損穢すると申さねばなりません。邵子の句にも、

美酒飲みて微醉せしむるの後

好花看到る半開の時

とあつて、酒はほろ酔ひ、花は半開とは、誰もが口にするところの、通り相場ですが、どうも度を過ぎやすいので、こゝに特に修養の必要があるわけであります。

酒ならぬ酒

若し廣義に申すならば、酒と云ひ花といふも、アルコール含有液や、草木枝頭の花とのみ限らないで、財慾に酔ひ、名譽慾、知識慾、權勢慾、等々いろ／＼な物に酩酊し昏醉し亂醉する連中が、世には甚だ多いこ

酒は微酔、花は半開

とであり、華美豪華、虚榮虚飾の花ならぬ花への飽くなき追求にうつゝをぬかすやからも、如何に少くないこととせう。すべてに此の陶醉と貪りとを慎むべきが精神修養、人格完成の要諦であらねばなりません。

花散るや末代無知の凡夫衆（一茶）

### 四九、塵心減、善念生

每想病時。則塵心漸減。當防死日。則善念自生。

毎に病時を想へば、則ち塵心漸く減ず。當に死日を防ぐべし。則ち善念自づから生ず。

生理作用と  
慾情

佛教で説く四苦八苦の一つに、五蘊盛苦といふのがある。これは、肉體が丈夫過ぎると、生理作用で慾情が旺盛になり一つの苦痛であるといふのですが、塵心すなはち妄想煩惱といふものは、すべて人の慾から生れるのであれば、たしかに此のやうな觀方も出来るのであります。ソコで慾情塵垢を去らうとする修養の方法は、慾情の起る毎に自分が病氣で惱んで居ることを假想するがよいといふのであります。病みほうけて苦しんで居るとき、何の慾情がありません。病態が重れば死より外に途はないと思へば、望みは唯だ健康のみ、他に何の欲しい惜しいものがあり得やう。

また惡念生じたときには、今、一息截斷、閻魔の廳に引かれ行く最後の日だと、強く死の場面を視つめて見るがよい。さうすれば自己中心の悪い考へなど忽ち影を消して、善念が生ずるといふ。誰れも地獄入りは好ましくない、望むは極樂往生です。

上、聯 蓮



兎角、人は得意に乗じ、元氣一ぱいの時には、どうも浮つ調子に成りあがり、靜かに反省し自覺するなぞの心の餘裕を有ち得ないもので、そこに邪惡禍害の萌芽を、知らず／＼種を付けてしまふのです。病床に呻吟する身となると、始めて深い考へに沈み、非常に眞面目になる。更に死の斷末魔となれば「今までは人のことかと思つたに、オレが死ぬとは、こいつたまらん」と、眞劍に己を檢討せずに居られなくなる。鳥の將に死なんとするや其の聲悲し、人の將に死なんとする、その言や善しで、死の一刹那には惡心は有ち得ないとされて居ます。消極的ではあるが、此の考へ方によつて、平生に眞面目な修養をするといふのも、大に効果的であると謂はれます。

ねいるにも心靜めて寝入れかし

そのまゝ死することもありけり(蓮如上人)

五〇、公私二語

居官有二語。曰。惟公則生明。惟廉則長威。治家有二語。曰。惟恕則平情。惟儉則足用。

官に居るに二語有り。曰はく、惟れ公なれば則ち明を生じ、惟れ廉なれば則ち威を長す。家を治むるに二語有り、曰はく、惟れ恕なれば則ち情を平かにし、惟れ儉なれば則ち用を足す。

官途に就くのは職を公に奉ずる者であれば、第一標語とすべきは公の一字である。公正にして私心なければ、

明徹の心を持って善政を布くことが出来るのは必然であります。もう一つ是れと並行すべきは廉直なることで、心操身行潔白であれば、民衆は皆な信望を寄せるから、威嚴體面もおのづから備はる。むやみに威張りちらす役人は、此の公明と廉潔の要を具へて居らぬと見てよろしいであります。公と廉、此の二語は眞に公吏の箴言であらねばなりません。

また家庭生活に於ける第一標語は寛恕にして、他の家族に同情し、輕々しく怒つたり責めたりしない心構が肝心で、曾子が、孔子聖人の道、他なし忠恕のみと言つて居る如く、恕の一字は、仁、慈悲と異語同義とも見られる大きな徳で、此の心によりて自他俱に情を平靜にし、和合親睦も保たれるのであります。今一つは儉約で、無駄を省き、贅澤は敵なりと、物資を愛護するならば、利用厚生のおのづから備はり、生活上曾て用に事缺くといふことはない。無ければ無きが中に用を足すの途も開けるのであります。

道元禪師は、寺有の物資はすべて三寶物であると心得、自己の眼睛を護惜する如くせよと訓へて居られますが、官に在ると家に在るとを問はず、此のやうな嚴肅な心持を以て、極めて大乘的に、國家、社會、人生更に天地宇宙の大精神を常に念頭に置いてこそ、公明も廉潔も、寛恕、儉約も、本當に徹底し實現せられると申すべきであります。

一筋に人をも身をも思ふかな

打つ墨なはの直かれとのみ(中納言定房)

詔はずおごることなく争はず

慾をはなれて義理を安ぜよ(烏丸光廣)



# 中、紳 瑜

## 一、多 福、多 壽

人要多福。全在知受享。人要多壽。全在惜精神。

人多福ならむことを要せば、全く受享を知るに在り。人多壽ならむことを要せば、全く精神を惜むに在り。

福といふにも各人の主観で、いろ／＼になります。評價の標準を主観（心）に置くか、客観（物）に置くか、ソコから非常なトラキが生ずるし、心的にも物的にも、細かに分てば、また様々な条件があるわけですが、一般、通念的に福といへば財産の福、即ち富のことであり、本文の意味もそれであると見られるのであります。

### 天運の意義

受享は、福運といふやうな意味で、富を身に受くべき天分のことです。「稼ぐに追いつく貧乏なし」ともいふが、「稼げども／＼樂にならざりジツと手を見る」などの嘆聲も聞かれ、運は天に在り、富貴命ありとの信仰的思想は、古來頗る根強いものがあり、本文も此の信念より立言して居るのですが、天道私無し、運は天に在りと雖も之れを開くは我が腕に在りて、果報は寝て待てといふ如きムシのよい注文は、天のおタナでは決して卸さない。棚に在る牡丹餅は坐しては食へず、やはり起つて手に取り口に運ばねばならぬ取り運

### 樂を欲せば 墓場に眠れ

ぶの活動に運の意義が見出されねばなりません。

或る大學出の青年が、ビーチョル博士に、何でもよい自分が容易に出来る業務を授けて呉れと、就職の世話を依頼すると博士は、世には樂々と容易に出来る仕事は一つもない。給仕でも、ルンペンでも容易には出来ない。君が欲する適當のものが只だ一つある。それは墓場へ行つて眠ることだと言つたといふ逸話があります。人生何を爲すとして、樂なものではない。永眠するまで勤勞奉仕すべきが人生であります。

富貴は天に受くるの福分であるとして、その天分に遇ふ者は、須らく進んで之れを享受すべし、但しその享受は昭々無私、公明正大なる天道に副ふものでなくてはならぬ。鄙吝なる死藏や、放蕩逸樂などは、富貴を殺すものであつて、富貴にして而も乞兒にも劣る者と謂ふべく、有り餘る富も猫に小判同様の價值となる。そんなことではなさない。天理人道一如の精神に基き、天運に遭うたら宜しく人事を盡し、人類社會の爲めに善散活用して、福分に生命あらしめ、富に意義あらしめることを心がけよといふのが第一句であります。

福と並びて人の渴望するものは壽命であります。多壽長命をねがはゞ『全く精神を惜むに在り』精神は、精力神氣で、常人はこれを粗末にして愛惜しない有様である。何かといへば、酒色、その他衣食住の各方面に於ける生活に、有害にして無用なことを盛にやる。つまり慾望の爲めに節制の度を失ひ、無意味に心身を過勞するので、命を惜みながら事實は命を縮めつゝあるのだ。故に長壽をねがはゞ、精力の徒消を豫防するやう、克己節制、心身安慰の修養が大事だといふのが次の句の意であります。要するに、福と壽とを欲するものは、天理人道完き徳を修めよといふに歸するので、福徳壽三拍子そろふこと、これぞ人生有終の理想でなければなりません。石天基は此の一聯に註して言つて居ります。

### 福徳壽圓滿



受享を知らざれば、福有りと雖も而も虚受なり。精神を惜まざれば、壽有りと雖も而も自ら虧く。然れば須らく徳行を以て之れを統ぶべし。否らざれば毎に磨折を致さむ。

一、聖賢、豪傑

爲聖賢的妙法。只在一點仁心。爲豪傑的妙法。只在一腔義氣。

聖賢爲的妙法は、只だ一點の仁心に在り。豪傑爲的妙法は、只だ一腔の義氣に在り。

的の字は前に『聯瑾』の中で申したやうに、『之』の字に改めて見ればよろしいのです。聖賢は儒教の理想人格であり、仁はその人格を成す生命精神とも謂ふべきもの、よくキリスト教の愛、佛教の慈悲と比べられ並せ稱せられて、ずるぶんやかましく説かれますが、至大至善なる人道の極致に名づけて仁と謂ふので、孔子は時に隨ひいろ／＼に示して居ります。『己れに克つて禮に復るを仁と爲す』ともいひ、『汎く衆を愛して仁に親しむ』とも云ひ、或は忍の意、恕の意にも説かれ、または『里仁を美と爲す』と云つて、人情の厚い風俗をもこれを以て稱して居り、韓退之は『博愛これを仁と謂ふ』と解して居ります。根本觀念は、天に出づる徳、此れを天の命に率つて人の至徳とするのが仁であるのです。故に仁は人の本然性であり、佛教の法性、佛性に相當すると見られ、人欲、妄想と呼ばれる二次的の障礙を去れば、本然の仁に復り、至徳の光りがおのづから發揮せられる道理で、此の心性の光りが磨き出されたのが、理想人格たる聖賢であるのですから、本來具備の本性に於ては、凡人即聖賢たるの可能が謂はれるので、佛が『梵網經』で『我れは是れ

仁は人の至徳

已に成れる佛、汝等は當に成るべき佛なり』と説かれたのも同じ意味であります。互は幾ら磨いても鏡とすることは出来ないが、璞は磨いて明珠とすることが出来る如く、我等には本然性として、聖賢たり得る素質あり、可能性を有して居るのだから、此の至寶を持ち腐れにせず、努めて之れが光輝を發せしむるやう、常に『只だ一點の仁心』に目覺め、これを持続し、己れを空しうして博愛衆に及ぼすことを心がけねばなりません。

磨いたらみがいただけは光るもの

何の玉でも性根玉でも

豪傑といふと、英雄と並べ稱せられ、力千人に勝る者とか、智萬人に勝る者とか謂はれますが、そのやうな限定的の標準があるわけではなく、才徳拔群なる人を豪傑と稱するので、『孟子』には『若し夫れ豪傑の士は、文王無しと雖も興らむ』とあり、君子、偉人といふのも同じと見ればよろしいのです。此の豪傑たるの妙法も別にあるのでない、只だ『一腔』腹一ぱい義氣があるといふのが、唯一の要件だといふのであります。

義は前項の仁と合せて、仁義禮智信の五常といふ、即ち人に備はつた五つの常道本徳であるとせられるものであるから、これによつて豪傑たり得る道理は、仁によつて聖賢と成ると全く同じであります。義はタダシと訓む字ですが、その正しさが、實際にはむつかしいので、韓退之は『行つて之れを宜しくする之れを義と謂ふ』と解して居る。仁が至徳の體ならば、義はこれを實行に示す用であると見られます。宜しきを得るとは、過不及なき程よきところをいふので、謂はゆる中庸、佛教の中道であります。中と云つて數學的



中道

物理的にいふ物の中心、中央の意ではなく、たとへば冬の夜の鍋焼うどんは熱いのがよいと云ひ、夏の冷麥は冷たいほどよいと云ひ、酒の爛は人肌<sup>ひと</sup>の程度と云ふ。これらはそれ／＼の中を得て宜しきかなふもので、若し冷熱の中間を目ざしたら、みなその旨味を失ふ、といふ如く、萬事に程よき處を行つて、人生を活かすのが義人<sup>ぎにん</sup>であります。これはなか／＼容易ではありませんが、仁者は能く勇なりともいふ、本心本性たる仁の徳を把握する者ならば、主観内面の中は、外に發して皆な節にあたり、義となり禮智信ともなつて宜しきにかなふのであります。『論語』には、

君子は義に喩<sup>たと</sup>り、小人は利に喩<sup>たと</sup>る。

とあり、利己を主として行動するのが小人凡夫、仁義を中心として言行を律し人の爲めにするのが君子であることを教へてあります。孟子は、

生も亦た我が欲する所なり。義も亦た我が欲する所なり。二の者兼ねることを得べからずんば、生を捨て、義を取る者なり。(告子章上)

とまで切言して居る。天に享くる人の本然性たる仁義は、全人としての生命であり私人の私物ではない。此の道理に徹底して、始めて生を捨て、も義を取ることが出来るので、志士仁人は身を殺して仁を爲すといふ所以であります。

三、實心、虚心

不實心不成事。不虚心不知事。

心を實<sup>こころをみ</sup>てざれば事<sup>こと</sup>を成<sup>な</sup>さず。心を虚<sup>こころをな</sup>しうせざれば事<sup>こと</sup>を知らず。

袋はカラでは立たぬ

西諺に「袋はカラでは立たぬ」といふのがあります。大黒天の袋でも布袋和尚の袋でも、カラツボで布呂敷見たやうなものであつたら福の神として拜む者はありますまい。人間も風袋ばかりの見かけだふしては仕様がなない。人格の充實、即ち心の充實がなかつたならば何事も成し遂げられるものではありません。脇坂義堂といふ昔の心學先生が面白いことを言つてゐる。

袋は福勞なり、福は勞にありと解して、福の神の道具たる有難味を知るべし。

心を充實し身を勞し、各自がその任務使命に熱中してこそ、事は成就し福德はおのづから恵まれるのであります。凡そ何事に當るにも、その事に對する脳味噌が必要だといふのであります。

しかし一ぱいに膨らんだ袋には、最早その上に何も入れる餘地がない道理で、脳味噌の充實を圖らんとしたらば、脳をカラツボにしてかゝらねばならぬ。『心を虚しうする』といふ修養が、他の反面に必要なわけで、我慢己見といふヤツが心を占めてゐたのでは、如何に立派な道理も方法も受けつけることが出来ない。前に申しました或る書生は、南隱老師を訪ねて大に禪を叩き哲理を論じ立てたのに對し老師は、お茶あがれと番茶をすゝめたが、茶碗にまだある上に更に茶を注がうとするので書生は、もう入りませんと斷ると、老師初めて口を開き、『お前さんの心に自分勝手な理窟の番茶が入つて居るから、その上に禪の清談など入る餘地がない。眞に禪の味が知りたければ、一切打ちちやつて心をカラツボにして出なほしなさい』と誠へたといふ。知識を求め眞理を得んとならば、心を空虚にしなければなりません。謙虚にして益を求むとは是れであります。



す。學ぶには虚心。爲すには實心。語甚だ簡にして、意頗る深きを認得すべしです。

#### 四、志、心

志不可墮。心不可放。

志を墮す可らず。心は放つ可らず。

人生と意志

志とは、目的、理想を意識して、これに到達せむとする心的作用の發動で、即ち希望追求の意志であります。東洋の古徳は『志立つて學半ば成る』と訓へ、西哲の言にも『意志あるところ必ず道あり』とあり、我が狹生徂徠も『志なき人は如何ともする事なし』と言つて居る如く、人が此の世に處して、心の指すところの目標がないならば、全く人生の意義はないと申してもよいのであります。

意志の強さは成功の速度を促進し、また志望の高さは事業の偉大さと正比例する。が、人生の事すべてが意の如く成り難く、百を望んで十を得、十を求めて一を得ると云ふ如き有様であるから、志は遠大なるべしと謂はれるのであります。

毛利元就の逸話

戦國群雄中に傑れた一英雄、毛利元就は、もと一地方の豪族に過ぎなかつたが、その少年の時、老臣が社前に参拜して、主人が將來一國の主と成るやうにと祈つたのをとがめて、何故天下の主と成るやうにと祈らぬかと言つたといふ逸話は有名であるが、さすがに英雄らしい志と稱すべきです。而も事實は山陰山陽十餘國に主となつて終つた元就でありました。かういふわけですから『志は墮すべからず』目先が狭く、志望の

放心を求む

低い者は、殆ど爲す無くして終らねばならぬ。英雄偉人もとより種なし、彼れも人なり我れも人なりと奮ひ起つた志氣が無くてはなりません。志氣の高大なるに至つて、人を相手とせず天を相手とすといひ、佛祖何者ぞ、自心清淨これ佛なりと云ふ如きは、その究極と謂ふべきであります。

しかし『心は放つ可らず』この心といふのは本心のことで、これを放つとは、外境に囚はれ、千差萬別の條件を追うて、心をお留守にすることでありませぬ。この内面殿堂の主人公が五欲六塵の境に飛び移り散走して居るのを探し求めて引き戻し、止まるべき至善に止まらしめるのが修養の極致で、孟子は之れを『放心を求む』と言ひ、よく放心を求め得るならば、心の本徳なる仁義にかなふといふことを説いて居ります。

心を放つ説

トコロが、宋の邵康節といふ哲學者は、『心を放たんことを要す』と言つて居る。全く孟子と反對のやうであるが、ソコには深い意味があるので、澤庵和尚が『不動智神妙録』の中に此の事に言及して、禪の機要を示して居ります。その要旨は、たとへば、猫が籠の小鳥を捕らうとするのを、紐で繋いで置くやうにするのが放心を求むる様子で、心の放逸、放縱を一處に制止して不善を爲さしめないことが出来る。しかし十分馴らし教へ込んだ猫にすれば、鼻の先に鳥籠があつても見向きもしなくなる。何も繋いで窮屈な思ひをさせずに及ばず、猫の行き度いところへ自由に行かせて一向差支がない。邵康節の心を放つの意が是れで、禪道でも劍法でも、初心修行の時は、求放心が大事であり、達人の域に到れば要放心で、一切の上に一切に囚はれざる自由の働きを爲すべきである。之れを経文には『應無所住而生其心』——まさに所住無くして而も其の心を生ず——と説くのだといふのであります。

内面の主人

近江聖人藤樹先生は『日々心の奥の主人公に面會なされば然るべく候』と教へて居る。此の主人公なる本



心が五官、六根の手代番頭共に咬かされて、五欲六塵の外境に遊びまはるのが小人凡夫の常態で、心が全くお留守になる。世間で普通に放心状態といふのが是れで、ウツカリ、ボンヤリして居るのです。しかし主人公を正しくその位置に迎へて、日夕面會出来るならば、和平明朗、大安心で何も問題はない。全く以て御放心下さるべく候といふことになります。

## 五、四 不可

不可乘喜而輕諾。不可因醉而生嘖。不可乘快而多事。不可因倦而鮮終。喜びに乗じて軽く諾す可らず。醉に因つて嘖りを生ず可らず。快に乗じて事を多くす可らず。倦に因つて終り鮮からしむ可らず。

人は感情の動物といはれ、人の心の移り變りは雲の變更よりも尙ほ奇しとされます。苦樂是非の境に對して、喜怒哀樂の情を起すのは當然で、これを斷滅することは死を意味し、到底不可能であります。活ける人間として感情の躍動するところに、活ける人生ありとも謂ひ得られるのです。但だ人としての修養の要は、克くこれを節制し調整して心の中正を失はざるやうにし、自他の平安和樂を損じないやうに努めるに在るのです。

何か喜ばしいことがあると、早や心のタガを外してしまふ。ソコへ『お日出度う』などと祝福されると、いよく好い氣になつてしまひ、人のいふことを何でも聴く。輕はづみに承諾して、後でどうにもならない

## 感情の調整

やうなことが、實際よくあるものです。

酒に酔うた者、これは最も心の中心が、ぐらつきやすい。何でもない事に絡まつて怒りつぽくなるのは、誰れもよく知る事實であります。また快心得意の事あれば、忽ち有頂天になつて、自分の力量を過信し、出來もしない事でもドシ／＼引き受ける。此の反對に、多くの事に當るうちに、倦怠を生じ、ウンザリして投げやりになり、完全を得ないへまな結果を見ることになる。これらは何れも心の中正を失ふ爲めで、或は過ぎ或は及ばざるものであります。反省、克己、自重、緊張を以て此の過失を救はねばなりません。

## 手代の出世

寶曆の頃、勘定奉行を勤めて令名のあつた小野日向守は、頗る謹嚴でまた機智に富んだ人であつたが、或るとき代官に伴はれて何かの書面を携へて來たその手代を引見して、その才能を見て取り、『まだ若いに似合はず、文筆といひ才智と云ひ、末頼もしき仁ちや、他日一かどの御用にも立つやうにならう。折角勉強するがよい』

と激勵を加へたが、辭し去るに當り、玄關で代官へ特に、『この若者には御油斷あるな』

と警告した。手代は、褒められたり、貶されたりで、その眞意の判斷に苦しんだが、その後大に勉強して支配勘定の役にまで出世した。その述懐に、

『自分の今日までの永い間には、喜び悲しみ、得意失意のことも随分多くあつたが、その度にいつも日向守の一言を思ひ出して、浮いた心は抑へ、沈む心は引き立て、横にそれさうな心は取り戻し、進まぬ心は鞭つて、兎も角大した過失なく通つて來た。全く日向守がナツの一言のおかげである』



と、『油斷あるな』の一語、亦た頗る妙と申すべきです。

### 六、反省 六 知

靜坐。然後知平日之氣浮。守默。然後知平日之言躁。省事。然後知平日之費閒。閉戶。然後知平日之交濫。寡欲。然後知平日之病多。近情。然後知平日之念刻。

靜坐して、然る後平日の氣の浮なることを知る。默を守つて、然る後平日の言の躁なることを知る。事を省みて、然る後平日の費えの閒なることを知る。戸を閉ざして、然る後平日の交の濫なることを知る。欲を寡うして、然る後平日の病多きことを知る。情に近づいて、然る後平日の念の刻なることを知る。

靜坐して瞑想すれば、氣が落ちつき、心が明鏡の如く澄むから、平生はあまりにも浮つ調子で、心を散亂せしめてゐたことがよく検討される。沈黙して見ると、平生あまりにも躁がしく、自他の心を傷つけたことがわかる。爲して來た事を整頓して調べて見ると、如何にもムダなことに心身を費し、物を粗末にしたかが反省せられる。(閒は閑と同字でムダのこと) 戸を閉ざし一室にこもつて見ると、平生交友のだらしなさが思ひ知られる。欲を寡くし、食りの念を斷つて見ると、平生に慾情を逞しうして、健康を害ふ所以が明かになる。人情に近づきその温かさ美しさに接すると、平生自分があまりにも刻薄で、他人に情誼を缺いて居たことが知られると、字義語意は明瞭であります。

### 體驗自得

石天基の註に『須らく事々體驗し過し來ることを要すべし』とあるのは要領を得て居ます。王陽明は、事上磨練の要を高唱しましたが、萬般の事、實地體驗を経て、能くこれを整理し検討するところに、修養の眞實が在ると申すべきであります。

### 七、讀 書

讀書。不獨變人氣質。且能養人精神。蓋理義收攝故。

讀書は、獨り人の氣質を變するのみにあらず。且つ能く人の精神を養ふ。蓋し理義收攝するが故なり。

讀書の利益効果は今更いふに及びません。人類が萬物の長と誇る斯程の高等文化を築き上げるに至つた唯一の武器は、言語、文字の發明に在りといはれます。言語は思想の二次的のもの、文字は三次的のものであるが、形のない思想、言語を、文字文章の形に寫すことにより、能く千古不滅に留むることが出来、これによつて先覺の思想精神を土臺に、後人が次々と向上の道を開き得たので、文字は實に重寶といふべく、その文字を印した書物の亦た如何に貴き寶であるかを知るべきであります。

西哲の言にもある如く、我等は書を読み文章を通して、坐がらにして古今の聖賢偉人と語ることも出来、時間空間を超えて、世界の涯ての風光にも接し、地理人情をも知り、天地自然の靈徳妙用を覺ることも出来るのであります。文字を有たぬ未開野蠻の土人は、遠き過去より依然として現に未開人たることを如何とも出来ない。ヨリ多く文字に親しみを有つ國民、それは教育普及せる文化の高級優等國家を建設する。實に文

### 人類文化の武器

文化のバロメーター



讀書の眼目  
肝要

字こそは、國家の興衰、社會の明暗を卜知すべきバロメーターであるとも謂へるのであります。かうした重寶であるが故に、讀書によつて、人の氣質は陶冶せられ一變するに至る。氣質一變するところに即ち向上進化があるのです。イヤ普に後天的なる氣質變化ばかりではない。先天的なる本然性、天地と俱に公明なる精神に磨きをかけ、よく之れを養ひ保つことも出来るのである。それは如何によるかといへば、讀書によつて眞實の道理と意義とを攝取して、心の糧とするからで、此の『理義收攝』といふのが讀書の眼目肝要であります。

讀書百返、意おのづから通ずと言ひ、眼光紙背に徹すともいふ。大に、眞劍に讀むべしです。荻生徂徠は逆境に生ひ育つて、讀み度い書物も得られなかつたが、父の筐中に唯だ一部の『大學諺解』を見出し、十四歳から二十五歳まで、明けても暮れてもそれを反覆精讀し、深思工夫を重ねて、つひにアノやうな一世の碩儒文豪となつたといはれてゐます。

されば讀書は必ずしも多く讀むことを要とせず、また良師を得られずして獨學することも悲しむに及ばない。盡く書を信ぜば書なきに如かずともいはれます。飢ゑて食を求め渴して水を望む者の如き熱烈さを以て書に對し、濫讀せず、これを心に讀み更に身を以て讀むといふやうに、能くその理義を攝取し、精神を養うて博く人類文化に貢獻するところがなくてはなりません。

書よまで遊びわたるは網のうちに

集まる魚の樂しむがごと (源光武)

今の世は月に日にげにあらはして

讀書の四種

いや足らひゆく道々のふみ (本居大平)

なほ次にコルレッヂの讀書四法をあげて參考に供しておきます。

- 一、水母讀（水母） 水母といふものは、清き水をば吐き出して泥水を吸ふ。書を讀んで善きことは皆な忘れ、惡しきことばかり覚えて居る者は是れ。
- 二、漏斗讀（漏斗） ザアット入つてザアツと出てしまふ。書を讀んで、すぐに解つたやうに覺えるが、直ぐに忘れてしまふのは是れ。
- 三、海綿讀（海綿） 海綿に水を注げば忽ち汲ひ込んで膨脹するが、チヨット押へるとシユツとみな出してしまふ。書中の義理を早呑み込みして、清濁並せ得たるが如く見ゆるも、未だ徹底せずして、實際にこれを叩けば知識忽ち涸渴して用を爲さぬ如きが是れ。
- 四、鑛夫讀（鑛夫） 鑛夫が鑛物の塊を掘り出して金銀等を探り分け採るやうに、讀書に於て棄つべきを棄て、取るべきを取つて要旨を確保し、我が物とするのが是れで、本當に書を讀む者である。

八、眞心即奇策

救荒不患無奇策。只患無眞心。眞心即奇策。

救荒は奇策無きことを患へず。只だ眞心無きことを患ふ。眞心は即ち奇策なり。

救荒とは、天變地異その他種々の事情で窮乏に困んで居る民衆を救護捐助すること、さしあたり官途に



眞心是れ妙策

在る爲政者は、最も責任を自覺し、應急適宜の方法を講じ實施しなければなりません。一般人としても元より傍觀すべきではなく、民間には民間相當にその手段を盡すべきであります。此の救済の手段方法には勿論いろ／＼有り得ることで、實際に即した名案は望ましいものであるが、しかし、敢て奇謀妙算をと、思案に凝つて、調査だ研究だと時間を空費するが如きは愚な話で、奇策よりも先とすべきは、無私公正にして博大な眞心、至誠を有つて、獻身的にこれに當ることです。至誠は神に通ずともいはれ、誠の心あるところ、おのづから宜きに適せる道が開ける、即ち眞心こそ唯一の奇策妙案であるといふのであります。石天基曰はく、官と爲り民に臨んでは、一切、利を興し害を除き、人と爲り徳を積むことは、一切、危を扶け難を救ふ、都て是れ此くの如くすべし。

神こそは野をも山をも作りおけ

人は誠の道をふめとて（九條基家）

### 九、太和元氣

青天白日。和氣慶雲。不特人多喜色。即鳥鵲且有好音。若暴風怒雨。疾雷閃電。鳥亦投林。人亦閉戸。乖戾之感至於此乎。故君子以太和元氣爲主。

青天白日、和氣慶雲には、特りに人に喜色多きのみならず。即ち鳥鵲も且つ好音有り。若し暴風怒雨、疾雷閃電には、鳥も亦た林に投じ、人も亦た戸を閉ぢむ。乖戾の感は此に至る乎。故に君子は太和の元氣を以

て主と爲す。

この一項は、和の一字を提唱するので、天地の徳は萬物を和らげ、朗かに生長發展せしむるに在るの一面を示し、之れを太和の元氣と呼びかけ、この徳は人の齊しく天に享くるものであれば、これを體得し現前すべきであるといふのが大旨であります。

和と暴との二面

天地自然の運行推移にも、常住、太和の一面ばかりではなく、和の反對なる暴の一面をも現す。人にも和氣喜悅の情と、暴戾憤怒の情とを並べ有して居るが、自然の本徳は太和に在り、時に暴ら／＼しい方面を示すのは天の警戒として畏れ慎しむべきであります。

和は自然の本徳

一天晴れわたり、吹く風和かに雲の立たずまひも慶でたく眺められるといふ好き日には、人の氣も晴れやかで、誰れの顔にも喜びの色が漂ふ、人ばかりではない無心の鳥どもまで樹頭に群れ遊んで、好い聲で囀り、萬物みな愉しげである。が、これに引きかへ、暴風怒雨、疾雷閃電といふやうな陰惨な日には、鳥も林の深く影を潜め、人も戸を閉ぢて家に籠つてしまふ。これを以て見ても、晴朗和氣に乖き戻るのは、自然の情として厭はしいものであることが知られる。此の厭はしきを捨て、好ましきを主として、常に天地太和の元氣を養ふことにつとめるのが、君子たる人格を成す所以である。

此れ世を渉る妙法なり。暴戾の人も之れを讀まば、汗下つて急に當さに改め悔ゆべし。（石天基）

### 一〇、忍 辯



忍亦有辯。畏勢而忍者。不足爲忍。無可畏之勢而忍者。是名爲忍也。忍にも亦た辯有り。勢を畏れて忍ぶ者は、忍と爲すに足らず。畏る可きの勢無くして而も忍ぶ者、是れを名づけて忍と爲す。

忍の徳を骨張した句は、前に『聯珠』でも挙げましたが、この『紳瑜』中にも諸所に散見せられ、

百戰百勝、一忍に如かず。萬言萬當、一黙に如かず。(黃山谷の言)

の如き好句もあるのです。しかし今はこゝに再び忍字の解説を重ぬるの煩は省くことにし、忍の辯といふ、ちよつと變つた見方の句を摘出すことにしました。

公明の心事  
れ忍

『弱い者いぢめ』といふ語は、大人君子の辭書中には見出されない。自己の勢ひに乗じ、威を假つて他に臨むといふのは小人凡俗の常である。さうした多くの小人輩の合言葉には『長い者には巻かれよ』なぞいふのがある。實力ではどうしても敵はないから、まア頭を下げておけといふ猪い態度で、心服するのではない。かういふ態度は、みな利己的なる打算に出づるもので、公明なる本心の徳は全然味まされて居る、小人俗輩たる所以であります。

大人君子の心事は、自己中心の條件は微塵もない、俯仰天地に恥ぢざるもので、此の心事に基いて他に對するとき、何ぞ利を云はむ唯だ仁義あるのみで、その現はれの一として忍の徳が見られるのであります。だから曾子の云へる如く、自ら反りみて縮ちぢからざれば、たとひ走卒ルンペンにでも頭を下げよう。若し自ら反りみて縮きときは、百萬人なりとも我れ往かむといふ大勇も發揮せられる。これが本當の忍であります。

名將軍の名  
言

ヒンデンアルグといへば、前の世界大戰の大立者であり、また敗亡ドイツ國の建て直しに中心礎石となつた名將軍として、あまねく知られて居る。將軍は、軍紀嚴正、眞に秋霜烈日の概あり、また自ら持すること極めて謹嚴で、滅多に笑ふこともない、それでゐる部下の將卒は皆な親しみ深く懐き慕うたといふのですから、大人の風格想ひ見るべしです。

大戰のさなか、將軍が陣營で幕僚達と閑談のひと時、參謀の一人が、

『閣下は腹の立つといふことはないのですか』

と問ひかけて、次のやうな問答が交はされた。

『それア腹が立つやうなこともあるさ、わしだつて人間ぢやもの』

『でも閣下が人を嘔鳴りつけたやうなことは、まだ一度も見ませんが……』

『それは、わしはせんよ。なぜと云つて、腹が立つのはわしの心ぢや、傍の人を嘔鳴つたつて、その人によつてわしの心を、どうしやうもないからな』

『それなら閣下は、腹の立つときには、どうなさいますか』

『腹が立つたら口笛を吹くのが、わしのクセぢや』

『しかし、閣下の口笛は、開戦以來まだ一度も聞いたことがありませんね』

『勿論ぢや。軍人が職務に獻身して居る時、腹など立て、居る暇があるものか』

慈悲の心、仁の徳これ忍なりと云つても、何やら漠然として、自分の心にシツクリ來ないといふかも知れない。が、自己の本分使命に忠實にして、職務責任の爲めに全身心を打ち込むこと、これ即ち忍なりと觀



れば甚だ近く親しい思ひが致されませう。眞劍に事に當るとき怒るとマさへないとは、蓋し忍の修養に於ける一妙法ではありませんか。

われに勝ち味方に勝ちて敵に勝つ

これぞ武將の三勝と知れ(植木正成)

### 一一、平以長久

危崖之石先傾。掉枚之葉先落。萬物惟平。可以長久。

危崖の石は先づ傾く。掉枚の葉は先づ落つ。萬物惟だ平なれば、以て長久なる可し。

斷崖の上に在る石は、平地のそれとちがつて傾き轉じ易い。樹の枚にヒラ／＼と振り揺いて居る葉はぢきに落ちる。これは物理的に疑ひなき事實であります。此の崖の石と木の葉とは假借客語であつて、主語眼目は次の『萬物惟だ平なれば以て長久なるべし』といふに存するのです。石天基註していふ。『平の字最妙要妙知り曉るべし』と。心、いつも中正を保てといふ訓であります。

#### 境遇と信念

人は境遇地位によつて大に精神を支配されることを免れないものであります。しかし、境遇は自分の思ふ通りにはナカ／＼出來ないもので、不測の事情條件の爲めに、期せずして危崖の頂上の如き社會的地位に身を置かねばならぬやうなことも、事實するぶんあるが、唯だ心は修養によつて、如何なる事情の下に在つても平正を保ち、傾き轉ずることを免れることが出来るものであります。大西郷の詩に、

我が髪は氈々として漆よりも黒し

我が心は皓々として雪よりも白く

我が髪は猶ほ斷つべしとも

我が心は轉ず可らず

といふのがある。道義心肝を貫くところ、如何なる場合に臨むとも、心を傾斜させる如きことは無い。更にこれが徹底は、宗教信仰によつて、一心安住、能く不動なることを得るといふ妙致を知るべきであります。うつせみの世を卒るまで富士の嶺に

むかへるときの心ともがな(大西祝)

### 一二、人生一日

人生一日。或聞一善言。見一善行。行一善事。此日方不虛度。

人生一日、或は一善言を聞き、一善行を見、一善事を行はば、此日方に虚しく度らず。

一日一善の訓であります。唯だ一つの善い事でよろしい、それを三百六十五日缺かさず續ければ、一年に三百六十五の善を堆積する。假に百年の一生とすれば、三萬六千の善の堆積、まことに偉大なる生存と謂ふべきではありませんか。この偉大は唯だ一日にあり、基礎員数は唯だ一善に在ることを思へば、一日の生命、一事の價値は實に貴いものであることが知られ、この一日を完うせんが爲めに、一言一行を愼み、一念々々



を正しくする、修養の極意これに過ぎたるはありません。

徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲しむべき形骸なり。たとひ百歳の光陰は聲色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみにあらず、百歳の他生をも度取すべきなり。此の一日の身命は尊ぶべき身命なり。貴ぶべき形骸なり……我等が行持に依りて諸佛の行持現成し、諸佛の大道通達するなり。(道元禪師)

朝に道を聞いて夕に死すとも可なり(孔子)

慧聞思修の三

一善を聞くといふ、只だ聞いただけで、馬耳東風の如くであつては何もありません。一善を見るといふも只だ見るだけで、猫に小判の如くであつても無意味です。聞いてこれを心に思ひ、思うてこれを身に實行する、こゝに至つて一善の完成と謂ふことが出来るので、佛教に之れを聞思修の三慧といふ。解脱安心といふものは、眞實の智慧——般若——に依らねばならぬとせられるが、此の聞思修の並行は佛道成就の眞實智慧であるといふのであります。人から聞いて水邊に到り、見事な魚を目の前に見て、あゝほしいなアと、いくら熱烈に思うても、魚はつひに自分の物とはならぬ、これを捕るといふ實地行動がなくてはなりません。若し能く善を見聞して之れを行ふならば、前申す如く、只だの一善、只だの一日だけで十分で、尊ぶべき一日を『方さに虚しく度らず』百歳の一生を立派に度るもの、此の一日によつて悠久不滅の大道を通達する所以となるのであります。但し、昨是今非、今是非といふムラがあつてはなりません。一日々々相續不斷にして、始めて一善是れ萬善の生命があるのだといふことを忘れてはなりません。雲門禪師云はく、『日日是れ好日』と。

一三、穿着鼻孔

得意而喜。失意而怒。便被順逆差遣。自己何曾做得主。馬牛爲人穿着鼻孔。要行則行。要止則止。不知世上人。一切差遣得我者。皆是穿我鼻孔者也。

自朝至暮。自少至老。其不爲馬牛者幾何。哀哉。

得意にして喜び、失意にして怒るは、便ち順逆に差遣せらるゝなり。自己は何ぞ曾て主と做し得む。馬牛は人に鼻孔を穿着せられて、行らんと要せば則ち行り、止めんと要せば則ち止めらる。知らず世上の人、一切我れを差遣し得らるゝ者、皆な是れ我が鼻孔を穿たるゝ者なることを。朝自り暮に至り、少より老に至るまで其れ馬牛爲らざる者幾何ぞや。哀しい哉。

馬牛の鼻繩

人生には好もしいことや厭はしいことやが、變轉さまゝ走馬燈の如くであります。その目先の變る毎に心を動揺して、僅かの事に、忽ち得意満面で喜び忽ち失意不満で怒るといふのは、客觀的條件に左右せられ、順逆の境遇に支配せられて驅使されるといふもので、それでは全く自己の心に主人公といふものが無いわけである。かの牛が、鼻の孔に繩を通されて、行くも止まるも人の自由にされて居るが、自己の主人公をお留守にして、客觀狀勢にのみ支配せられ、他人の顔色を見て奔走する者は、何のことはない、自分の鼻づらに繩を通して居るものだ。こんなぎまで、明け暮れ一生を過す牛も同然の輩が何と多いことよ、何といふなさない話だといふ文意、石天基は『説到穿鼻不覺噴飯』と寸評を下して居るが、可なり辛辣な諷刺と



親子の驢馬賣り

申すべきであります。

御存じの人も多いと思ひますが、親子の驢馬賣りといふ童話があります。或る愚かな男が、家に飼つてゐた驢馬を市に賣らうと、一人の息子と伴れ立つて牽て往く途中、行き會つた人が『何て馬鹿な人だ、驢馬について歩いて居る、騎つて行けばよい』といふのを耳にして、いかにもと思ひ先づ親が騎つたが、しばらく行くと又或る人が『何といふ無慈悲な親だ、自分獨り樂をして子供を歩かせて居る』といふ。早速下りて息子を騎せて行くと、『何て不孝な子供だ』と言はれ、それではと親子が騎つて行くことにしたが、『何といふ残酷な親子だ、アンな小さな驢馬に二人も一しよに騎つて……怪しからん、動物虐待だ』と罵られ、當惑思案のあげく、驢馬の四足を縛つて棒をさしこみ、二人で擔いで行つたといふ話であります。何でもバカの冠詞がついたのは過不及のいづれかで、正直もバカ正直では何もならぬ。忍と云ひ、謙といひ、和といひ、すべての徳目みな然りで、平和圓滿といふにも、中心に自己の本面目は確保し、自重自尊、斷じて他の爲めに瞞着せられてはなりません。自心の主人公を味まざるまでに徹底して後の言行ならば、たとひ牛と云はれやうと、馬と云はれやうと一向平氣で、一喜一憂の動搖などあるものでない。

臨濟禪師云はく『隨處に主と爲れば立處皆な眞なり』と。

一四、儒佛争辯

儒佛争辯。非惟儒者不讀佛書之過。亦佛者不讀儒書之過。此兩家。皆交淺

而言深。

儒佛の争ひの辯。惟だ儒者が佛書を讀まざるの過のみに非ず、亦た佛者が儒書を讀まざるの過なり。此の兩家は、皆交り淺くして而も言深し。

互ひに知らざるの過

儒者は佛者を罵り、佛者は儒者を輕蔑する。何の爲めに争ふのかの辯を爲していふ、それはお互ひに相手方の教理を研究しないからである。十分研究して儒者が佛教を知り、佛者が儒教を知るならば、決して深刻な争ひなど起るべきではない。儒佛二家、俱に深遠の教義を有つて居るのに、兩者親しく交らない爲めにこれを認め得ずして、徒らに争ふのであるといふのであります。

ひとり儒佛の二家のみではない。婆羅門教、道教、キリスト教、回教等、古來異教徒間の争ひは頗る烈しいものがあり、同一宗教中にも分派の抗争があつて、分裂に分裂を見るに至つたといふ現状は、人のよく知らるゝ通りであります。何れの教へにしても、神人合一とか、凡聖一如とかの究竟を目ざして居るのだから、我見我慢は、サラリと一洗しなければならぬ筈であるのに、『我が家の本尊貴し』の宗我といふものは、俗世界の我見よりも甚だしい。争ひなからしめんための教でありながら、却つて醜い争ひを爲すとは、争ひそれ自體が、内輪から自教を破壊するものであり、宗教家に果して宗教信念ありやと謂はざるを得ません。大綱和尚は、

大方の世すて人には心せよ

ころもは着ても狐なりけり



と罵倒してゐますが、眞面目な宗教家ならば皆な此の痛感を懐くことありませう。

白魚も洗へば水の濁りけり (玄々一)

二人してむすべ濁る清水哉 (蕪村)

どうも人の世の中は、これで困るのですが、誰やらの句に、

八宗も色あらそはぬ白蓮華

とあるやうに行きたいものであります。宋の張商英(無盡居士と號す)は、青年時代に氣を負うて、佛教撃滅を思ひ立ち『無佛論』を著はさんとしたが、たま／＼寺院に遊んで『維摩經』を見て、感悟轉向し、後には一流の禪傑を以て目せられる居士と成つた。唐の韓退之や歐陽永叔などが、専ら排佛をやつたのも、此の若き商英と同じく、未だ佛書を看ずして佛を嫌つたものと謂はれるのです。

天龍寺の峨山禪師は、曾てバイブルを讀んで、アノ有名な、ソロモンの榮華の時にだも野の花の一輪にも及ばずといふところに至り、覺えず案を打つて、至人の至言であると絶叫したと云ひ、權田雷斧僧正は、眞言密教の曼陀羅の内にキリストを加へて然るべしと云つたといふ如き、眞に透徹して固我の見を去れる佛者は、外教といへども眞理は眞理として、決して棄てない。かうしたこたはりのない老大大心こそ宗教人、教學者の襟度といふべきであります。

をしへ説くその品々の法の門

ひらくる道はひとつなりけり(後伏見院)

### 一五、説得、行得

説得千般明曉。不如行得一字到底。

千般を説き得て明曉ならんよりは、一字を行ひ得て到底せんには如かず。

有らゆる方面にわたり、精しく解釋し説明するほどに、知識明かで眞理を曉つて居る人は、ナカ／＼えらい、が、只だ一つの事でもこれを完全に實行する人には及ばない——到底は徹底といふに同じ——百言一行に如かずの意で、此のことは誰れもがよく言ふことでありながら、これが徹底實現は甚だむつかしいのであります。

#### 藥の効能

藥は病を治す爲めに調合せられるが、只だ効能書きを精讀語記しても、若しくは藥の素性化學作用まで調べて知りぬいても、それだけならば治病とは全く没交渉です。たとひ藥品の知識はゼロで、効能書きの振り假名さへも讀めない者でも、只だ一事、これを服むことによつて効能を實現することが出来る。百の理論も一の事實に及ばずであります。しかし、もとより知識能力は無視するわけにはゆかない。藥は服めばよいと云つて、灌腸藥を口に入れたり、目藥を瘡に塗つたりしても仕様がなないし、誤つて劇藥を服むなどは大へんです。石天基が奉じたといはれる陽明學では、知行合一の説を主唱し、人には先天良心、即ち完全なる良知良能といふものがあり、これによつて徳を完うする。知つて行はざるは、此の良知良能に徹底しないので、眞に知るものではない。知る如く行ひ、行ふ如く知る、知と行と同時一枚にして全徳と謂ふべきだといふ。

#### 知行合一



智目行足

恰も藥病同治の様子であります。

佛教では、智目行足と云つて、智慧は目、行ひは足のやうなもの、盲では行く先がわからず、イザリでは先は見えながらも行くことが出来ない、故に、般若の智慧と、禪定の原動力と、そして之れを正整する規律と、此の三つが並行して圓滿の道を體現すべしと説き、之れを戒定慧の三學と名づけ、修道實踐の根基として居るのであります。

禪の教

佛教の中でも、禪は特に此の行を最も重んじ、經論の文字穿鑿に没頭するを嫌つて、月を標すの指、門を開くの瓦といふ。恰ど藥の効能書き同然だといふ言ひ分で、鹿門の覺禪師は、端的に、

一丈を説得せんよりは一尺を行取せんには如かず。一尺を説得せんよりは一寸を行取せんには如かず。と言つて居り、聖一國師は、

經陀羅尼といふは文字にあらず、一切衆生の本心なり……本心を悟り根源にかへる人、眞實の經をよむなり。文字をまことの經とは云ふべからず。若し文字を口々にとなへて至極といはゞ、寒するとき火と云うて煖かに、熱するとき風と云うて涼しかるべきや。又、飢ゑて食の名を唱へ、ほしき物の沙汰をして即ち飽滿すべしや。故に終日に火々と唱へても熱かるべからず、通夜に水々と云ふとも口は沾ふべからず。文字言句は是れ繪にかける餅の如し、一生口に唱ふるとも飢はやむべからず。

と懇説して居ります。陽明學にせよ、禪にせよ、要するに一心を突きつめて本心の本徳を磨き出し、常識、學識の知識でない本然の見識により、學得底ならぬ見得底の眞知に透徹して、ソコに知即行、行即知の完全なる境地が得られるといふに歸するので、吾等は決して知能を無視せず、知行合一、行解相應を目標として

一心の檢討修養に向上すべきであります。

一六、十中一不

十語九中。未必稱奇。一語不中。則愆尤駢集。十謀九成。未必歸功。一謀不成。則訾議叢興。君子所以寧默毋躁。寧拙毋巧。

十語九中なるも、未必しも奇と稱せず。一語中らざれば、則ち愆尤駢集まる。十謀九成なるも、未必しも功に歸せず。一謀成らざれば、則ち訾議叢がり興る。君子は所以に寧ろ黙して躁くこと毋く、寧ろ拙にして巧むこと毋し。

雄辯宏辭、説き來り説き去り、能く人を感ぜしめ、每語宜しきに適中するの概ありとも、それで直に奇れたものとの賞讃は許されぬ。若し十たび言ふうちに、つひウツカリして一語を誤れば、人を愆まり、人の尤めを受けて、前の九たびの適中が、すべて帳消しにされて、結局、十たび説いて十たび全部失敗に終つたことになる。

老成圓熟の境

事業を成すにしても、十のうち九まで成功しても、まだ本當の成功とは謂へない。若し十中の一つを失敗に終れば、全部の失敗として、周圍から訾られ責め立てられる。だから君子は、常に口を護つて躁がしく多辯せず、無能の者の如き態度で、輕々しく巧者ぶることをしないといふので、石天基は本文を『老成閱星の見』と評して居るが、全く修養圓熟の人格でないと、此のゆかしさは匂ひ出ないものであります。これには



次の語句を並せ考へて修練の資とせられることを勧めます。

勝利は最後の五分間にあり。

上手の手から水が漏る。(弘法も筆のあやまり)

善く騎る者は落ち、善く泳ぐ者は溺る。

君子の状貌、愚の如し。

### 一七、和 而 莊

待下固當和。和而無節。反生其侮。惟和而莊。則人自愛而畏。

下を待つには固より當に和すべし。和して節なければ、反つて其の侮りを生ず。惟だ和して莊なれば、則ち人自づから愛して畏る。

人生と秩序  
安寧

夫婦別あり、長幼序ありといふ風に、近くは家庭生活より、隣人、社會ひろく處世生活に於て、秩序正しくすることによつて、安寧幸福を見ることが出来るので、目上と目下の禮儀動作は、それ／＼厳正に區別せられねばなりません。しかし同じく是れ人であるといふ平等觀からは、太和の一氣に歸して、上下一つに相和することが最も肝要であります。

然るに、兎角みな我見を立てるから、上に立てば威張り得るやうな態度を取りたがるが常、それでは正しい人道でないから、上の者は下に對して和親を旨とし、また下の者は長上に對して敬ひを失はぬやうにする

ソレで朗かに温かに圓く治まるのですが、上に立つ者が只だ和一ぺんのみで節度——もののキマリ、ケジメ——が無いと、下の者が和親に忤れて上を馬鹿にするやうになり、禮儀作法も何もないといふ秩序紊亂を招くに至る。

威あつて猛  
からず儀あ  
つて則るべ  
し

こゝに於て『和して莊』なるべきを要すといふ。莊の字は莊嚴、莊麗、謹莊など熟用し、威儀作法、言容態度の、つゝましく、おごそかなことをいふので、此の嚴しい外貌のうち、春の如き温和を包んで居るならば威あつて猛からず、儀あつて則るべしで、下の者は自然に敬愛し親しみながら、而も畏れ謹んで禮を失ふやうなことはないといふのですが、これが亦た實際には頗るむづかしい。上の者も、下の者も、互ひに上があり下がある世の中であれば、上下に論なく、愛と敬の並行圓滿を期し、日々反省し修練を心がければなりません。

楠公の用兵

楠木正成は、兵を使ふこと手足を使ふ如くであつたといはれますが、それは實によく部下の親和と畏敬とをから得たからで、例へば、部下の將兵が、何か失策をしたのを呼びつけて叱るのにも、先づ其の者の以前の美事善行を數へ上げて、汝は何の場合に比類なき手柄をした。かしこでは目ざましき働きをした。また何の戦ひに味方不利と見えたのを汝の機轉によつて大に有利に立てなほした。それほど智あり勇ある汝にして此くの如き振舞ひをするとは何事ぞ。前々の功名がみな無になる、口惜しい限りではないか。といふ風に叱るので、部下は叱られながら却つて感激を増すのであつたと。此のコツです。但し、これも權謀手段ばかりでは決してさうはゆくものでなく、楠公が至誠の結晶ともいふべき人格の持主であつたからで、單なる術策ではない、心術であることを見のがしてはなりません。



いなづまや泣く子をすかす親心(遊路)

一八、召 福 遠 禍

福不可邀。養喜神。以爲召福之本而已。禍不可避。去殺機。以爲遠禍之方而已。

福は邀ふ可らず。喜神を養ふ。以て福を召くの本と爲す而已。禍は避く可らず。殺機を去る。以て禍を遠ざくるの方と爲す而已。

豫知す可らず  
逃避す可

福は内、鬼は外と、萬人ひとしく福を求め禍を拂はうとするが、濁浪に明月を宿さんとする如く、人に誠なければ祈る神佛の靈驗もなく、人生の禍福は人爲を以て如何ともすることが出来ない。即ち『福は邀ふ可らず、禍は避くべからず』で、豫め待ちまうけることも出来なければ、身に逼る運命を逃避すべき手もない次第であります。

こゝに禍福の由つて来る源を究めて見るのが大事で、佛教では三界唯一心、心外無別法と説き、地獄、極樂、三界六道は皆な一心の展開とされ、一心を究むれば禍福すべて自業自得と知られるのであります。邦諺にも『人は氣の持ちやう』といひ『笑ふ門には福来る』といふのは、本文の『喜神を養ふ』の意で『泣き面に蜂』といふのは『殺機』と相通するものがあります。泣いたり、怒つたり、怨んだりの心は、人の幸福喜悅を殺し奪ひ去るものであるから、此の一念萌すところを殺機といふのです。西諺にも『壁に悪魔を畫けば

悪魔出現し來たる』とあり、喜び愉しむ心は自分ばかりでなく周囲をも明るくし、殺氣立つた心、憂鬱の心は自他を重くするしく暗く塗りつぶす事實は、みな人の經驗的に知らるゝところでありませう。故に一念の喜神を養ふことは福を招來する根本であり、一念の殺機を去ることが、禍を遠ざかることになるわけで、此の心構へで豫知すべからざる禍福を超えて居れば、よし福來たるも得意有頂天になることもなし、よしまた禍に見舞はれても、少しもうろたへず、悲痛怨恨に脱線するやうなこともないといふものであります。

フグとドク濁りを取れば福と徳

一九、貧 者 之 功 徳

貧不能濟物者。遇人痴迷處。出一言提醒之。遇人急難處。出一言解救之。便是無量功德。

貧にして物を濟くこと能はざる者も、人の痴迷せる處に遇つて、一言を出して之れを提醒し、人の急難の處に遭つて、一言を出して之れを解救せば、便ち是れ無量の功德ならむ。

貧乏人で何も施し恵む物を有たない者でも、他人が知らぬ土地で方角を取りちがへたり、目ざす道に迷うたりして居るところに出會つて、わづか一言でも助言して、その迷ひを醒ましてやるとか、或は人が危急の災難に直面して居るのを見て、只だ一言を以て之れを救ひ、難を解くとかいふことは、ずるぶん出来るものである。迷子を探しあぐねて困つて居る母親に、あそこの原の中に泣いて居る兒を見たよと云つたルンペン



の一言によつて、愛兒を連れ戻すことが出来たといふやうなことも有り得るし、自動車、汽車などの身近かに迫つて居るのに氣づかないで居る人に、あッあぶない！ と一聲叫んだだけで、咄嗟の危難を救ふことが出来たといふ例も有ること、かやうな場合に助かつた人は、手を合せて拜まんばかりの感謝をさへける、實に無量の功德と謂はなければなりません。

無限の同情 親切

施しといふことについては、前に『聯瑾』の中で詳しく説きました。貪らざる心が眼目であり、財施、法施のほかは無畏施といふのもあると申した如く、今の救済の例は無畏施のうちに入るのであります。施し、恵み、濟ひといふも物に限らない。心に在りといふのですから、貧婆の一燈で、如何なる貧乏人でも、人に對する同情、親切といふ心は何の限定もなく持ち得られる。此の無限博大にして私なき心から湧き出る一言一行ならば、そのまゝに功德無量なる布施であり救済であると謂ふべきで、反對に巨萬の富を擁するとも、利他の心が無ければ一介の乞食にだも及ばずと謂はれよう。佛はこれを有財餓鬼と呼んで居ります。

隨喜功德

更に精神的に極言すれば、一糸一錢をも用ひず、一言一行をも要せずして、而も大きな功德を成すいはれがあります。それは、他人が善い事をしたのを見たり聞いたりしたとき、あゝ善い事だ、美しい事だと、心から讚嘆し、わが事のやうに喜ぶことで、佛は之れを隨喜の功德と名づけ、

若し貧窮の人ありて財の布施すべきものなければ、他の施を修するの時、隨喜の心を生ぜよ。隨喜の福報は施と等しくして異なることなし、是れ太だ易行なり、何人能くせざらむ。(因果經)

と説いて居ます。博愛慈善も世務公益も、すべて物にあらず心に在りといふ要諦を味得すべきであります。泣いた子へ乞食櫻を折つて來る(柳葉)

雪の夜に泊めずば常の源左衛門(召波)  
田の人を心で拜む晝寝かな (一茶)

二〇、順逆一視

子生而母危。鐵積而盜窺。何喜非憂也。貧可以節用。病可以保身。何憂非喜也。所以達人。當順逆一視。而欣戚兩忘。

子生るれば母危く、鐵積みて盜窺ふ。何の喜びか憂へに非ざらむ。貧すれば以て用を節す可く、病んでは以て身を保つ可し。何の憂へか喜びに非ざらむ。所以に達人は、當に順逆一視して、欣戚兩ながら忘るべし。

喜愛同時

人間萬事寒翁が馬、何が幸になるやら、幸がまた如何なる悲しみに成るやら、全く豫知も期待も出来ない人生であることは、前の禍福に對する觀察の如き意味合であります。子供が生れるといふ喜びの一面には、若しや難産で母體が危いやうだつたらと、大へんな心配が伴ふ。鐵の字はゼニサシとも訓み、また銀錢なりともあつて、金錢のことです。折角稼いで財産が出来たといふ喜びと共に、今度は盜難の心配で、家のまはりの嚴めしい堀に釘やガラスの破片を植えたり、鐵條網を張つたりと云つたやうな、醜さを暴露してまで、えらい苦勞をする『何の喜か憂に非ざる』喜びを心配にして、幸か不幸かわからない話である。

愛の中の喜  
貧よりつらい苦みはなし、貧乏は最大の不幸のやうであるが、貧しくして物資不足なるが故に、萬事切りつめて無駄を省き、節儉の徳で心を練るといふことになれば、貧も必ずしも不幸ではない。また病苦に悩む



のも人生の大きな不幸ではあるが、病中の修養は平生考へ及ばざる眞剣なものがあり、節制、克己、保健と云つたやうな反省と良習慣を養ひ得るとすれば、これも悩みが仕合せと成るもので、憂へが喜びの種となり憂の憂とすべきものを見ないわけになる。

かやうに達観する達人であるならば、誠に人生の順境逆境の二面は二面とするに足らず、境遇が上らうと下らうと、一つに観て心を動揺せず欣びも戚しみも兩方とも忘れたかのやうに、のぼせ上がることもなければ、沈んで憂鬱にとざされるやうなこともないといふ。これ亦た容易の修養では出来ません。故に達人と呼ばれるので、石天基も『是れ高明の人の見解なり』と評を附して居ります。

昨日今日、事同からず。一般は寒雨、一般は雨。(禪林類聚)

## 一一一、妄 想

若想錢而錢來。何故不想。若愁米而米至。人亦當愁。曉起依舊貧窮。夜來徒多妄想。

若し錢を想うて錢來らば、何が故に想はざる。若し米を愁へて米至らば、人亦た當に愁ふべし。曉起舊きに依つて貧窮なり。夜來徒らに妄想多し。

世の中は三分五厘梅の花。前項の如く、喜憂苦樂これ一如と、超然達観して現實の囚はれから放たれた境地に安住するといふのは、たしかに高尚な修養法であります、極端に走せて、全く現實を無視し、淺薄な

## 空想と理想

唯心論に墮して、取り止めもない空想に耽るのは甚だ危険であります。輝かしき希望に燃え、高き理想に勇むのは大によろしいが、それがあまりに非現實的な、飛び放れたもの——青年兎角これに陥り易い——であるならば、雲にかけ棧を架し、霞の面に千鳥を畫かんとする如く、到底實現出来ない儂いもので、さうした空想は理想とは謂へない。これを妄想といふ。理想とは實現可能のものをいふのであります。

本文は諧諷的の諷刺で、滑稽味タップリです。貧乏するとムヤミに錢がほしくなるもので、あゝ今こゝに百圓、イヤ十圓……一圓でもあつたらなアなどと妄想を逞しうする。それで目の前に錢がヒョッコリ出現するといふことがあるか。あるなら何故大に想はぬぞ。又食べる米がない、米がほしい、米がほしいと一心に想ひつめて、その心配が有効的に、米を持ち來たすとしたら、一生懸命に心配するもよからう。

ところが、夜通し眠らずに、錢よ、米よと想ひつめて、夜が明けて見たらどうか。舊態依然、前夜の我れと寸毫も變りなく、夜來徒らに多くの妄想を重ねたばかり、一錢も一粒も出現せず、元の木阿彌である自身を見出すばかりであらうといふ。諧諷のうちには深い勸告警誡の意味を含んだ輕妙の文辭であります。

元の木阿彌 筒井順慶——秀吉が山崎の弔合戦の時以來洞ヶ峠の名を後世に呼ばれる男——の父、大和國郡山の城主順昭が病んで死んだとき、四隣の状態から、しばらく喪を秘して發表せず、依然病臥の態を装ふことにしたが見參の者をゴマカす爲めに、順昭ソツクリと言ふほどよく似た木阿彌といふ坊主を代へ玉に使つて、床中に置いた。それが三年もつゞいて、やつと喪を發したことであるが、木阿彌は此の間、假りにもせよ城主に成りすまし、ウム／＼と作り聲をしながら、多くの家來共を鷹揚に持ち扱つたのも忽ち幻滅、こゝに至つてまた一介の坊主木阿彌に還らざるを得なかつた『元の木阿彌』となれば誰れの尊敬も受けることもならぬ。實



體なきものを求める妄想者の嘗める悲哀の味は之れ以上でありませう。

世人皆是妄  
想人

この妄想といふヤツは、ひとり貧乏人ばかりのことではないので、米錢の物資に限らず、名譽、利權、地位等々それらの境遇にあつて、限りなく欲望追求の妄想を逞しうすること上下貴賤を問はず、滔々として世人みな然りと云はれる有様で、石天基も之れには特に次の如く附言して居ります。

獨り貧窮の人のみならずして、富貴の人は更に甚し。都て是れ自ら愁煩を尋むるなり。殊に知らず、一飲一啄も俱に定數(天命)有ることを。人常に分に安んじ、命に憚はば、心中許多の快活を落得せむ。各自現實の分に安んじ、人事を盡して天命にしたがふと云ふ質實さに活きぬくことであります。

### 一二一、恐 懼

恐懼者。修身之本。

(註) 事前恐懼則畏。畏則免禍。事後恐懼則悔。悔則改過。所以智者保身。

愚者殺身。常存恐懼。受益甚大。

恐懼は、身を修むる本なり。

事前に恐懼すれば則ち畏る。畏るれば則ち禍を免る。事後に恐懼すれば則ち悔ゆ。悔ゆれば則ち過を改む。智者の身を保ち、愚者の身を殺す所以なり。常に恐懼を存すれば、益を受くること甚だ大なり。

恐懼とはオソレルと訓まれる字ですが、こゝに使はれたのは卑怯、臆病で物ごとをコワがるといふ意味で

はない。反省と慎重と、恭謙とを一つにしたやうな大變大切な意であります。およそ人の失敗は、得意になつて物事をあまりに樂觀し安易に思ひなして、行き過ぎるところに多いので、この結果がうまく行くかどうかと、ピク／＼しながら、大事に大事を取るといふ心構には、細心の注意も届き、氣の緩みもないから、事前にも事後にも大てい間違ひはないといふことが出来た。本文は甚だ簡單であります。修身上の金言として、誠に寸珍とするに足るものであります。石天基が特に長い註を添へて居るのも尤もと首肯せられるので、原文を掲出することにしました。和譯でその意は十分味得せられることと信じます。楠木正成の歌として傳へ稱せられる一首に、

ふかき淵うすき氷の戒めを

こゝろにかけぬ人ぞ危き

といふのがあります。深淵薄氷の戒めとは『詩經』小雅篇に『戰々兢々として、深淵に臨むが如くし、薄氷を履むが如くす』とあるのをいふので、戰々とはオソレ、オノノクこと、兢々とは謹みの至りをいふ。本文の恐懼とは、此の戒めにほかなりません。また『論語』には、

孔子曰はく、君子三畏有り、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人、天命を知らずして畏れざるや、大人に狎れ、聖人の言を侮る。(季氏篇)

とあり、朱子が、

尹氏曰はく、三畏は己れを修むるの誠にして當に然るべきなり。小人は身を修めずして、己れを誠にすることを務めざれば、雖も何の畏れか之れ有らむ。



と註を添へて居るのは、石天基の註と全く同義の親切さで、恐懼の意義は、この三長に至つて窮まれりと申すべきであります。

### 一三三、觀人四法

觀人於臨財。觀人於臨難。觀人於所忽。觀人於酒後。

人を觀るには財に臨むに於てし、人を觀るには難に臨むに於てし、人を觀るには忽にする所に於てし、人を觀るには酒後に於てす。

これは人物鑑定の四つの標準を云つて居るのですが、ちよつとおもしろい着眼點だといふことが出來ます。

一は、財産主として金錢と見られるので、金錢は親子も他人といはれるほどに、人の欲求と執着を吸收するものですが、金持の心と灰吹は、たまる程穢くなるなども云はれ、儉約が吝嗇へと兎角限度を越え易いまた金放れがよいとか、金使ひが綺麗だとかいはれるのが、是れまた多くは亂費放蕩に流れやすい。此の兩極端に馳せずして、眞に勤儉にして能く財を造り、それを國家社會人類の爲めに善散し活用する人、即ち經濟と道德とが並行圓滿ならば、立派な人物と申すべきで、澁澤榮一翁が提唱された『論語と算盤主義』が望ましいものであります。一代にして巨富をかち得た或る實業家に、致富の秘訣を問ふと、金がほしいといふそのホの字をヲの字に代へて、金がをしいとすればよいと言つたとか、此の惜しい心は無駄にせぬ心で、天下の寶を寶とし、大事にして粗末に扱はぬ、殺して使はず活かして有意義に使ふといふ意味に通ずると思ふ

金で人を觀る

のであります。

難事に臨んで人を觀る

二は、人物の試金石として艱難の事を以て鑑定するといふのです。平生無事の時には才能辯舌だけで一角の人物に見えても、一朝非常の難事に直面すると、忽ち馬脚を現はし、唾棄すべき小人物の全貌を暴露するといふのが少くない。また一寸見たのでは大小も賢愚も見きよめぬの出來ないやうな人が、大事に臨んで大人の面目力量を發揮するといふ例は多いのであります。

非常時、難事といふものは、いつ突發際會するかも知れないもので、火事を見て水を求むるに狼狽したり泥棒を見て繩をなつたりといふ調子では役に立ちません。治に居て亂を忘れずで、非常に備へるには常時の修養が大切であり、大難にビクともせぬ覺悟は無難無事の時にきめて置かねばなりません。

天下の難事は必ず易きより作り、天下の大事は必ず細きより起る（老子）

緊張を缺いた人

三は、忽せにする所、即ち物事をやりつ放しにするやうな人物はダメだといふので、注意、整頓、緊張と云つた風で、氣にゆるみなき人物でなくてはならぬといふことになりす。

四は、酒を吞ませて見ると人物がよくわかつていふので、これは誰れもよく知るところであります。一盃一盃重ねて居るうちに、ガラリと人間が變つたやうに、豹變ならぬ大虎になるのが頗る多いこととあります。酒に量なし亂に及ばずと、いくら飲んでも崩れぬといふのは大人物、すぐに酒に飲まれるやうなのは語るに足らぬ小人物と、鑑定が明かにつけられると申すのであります。

酒後に人を觀る

しづくだに先づ心せよさかづきの

うかぶ流れも淵とやはならぬ



### 二四、作文之法

作文之法。要心細如毛。胆大如天。心不細文無理路。胆不大文無力量。  
 作文の法は、心の細なること毛の如く、胆の大なること天の如くなるを要す。心細ならざれば、文に理路無く、胆大ならざれば、文に力量無し。

#### 心細胆大

これは一般に言はれて居る文章の法として、最も根本的の要件であります。心は細なるを要す、毛の如くあれといふのですから細なるほどよい。胆(膽)は大なれ、天の如くに大なるほどよいといふのですが、たとへば景色を眺めるにしても、庭の築山に對するのと、富士の秀峰を背景に、漉てなき大洋を望むのと、その氣持が大へんな違ひであるといふ様子で、文の機構、目標、輪廓は悠大高遠なるべく、而もその全態を描く筆の運びは、細心周到寸分のスキもないものでなくてはならぬ。細心ならざれば、整然たる道理筋みちが立たず、バラ／＼で纏まりがつかない。纏まりわるく、しまりのない文章は見られたものではありません。それかと云つて、如何に微に入り細に入り織麗を究めても、規模の大ならざる文には力がないといふのであります。

かの謝枋得が『文章軌範』を選輯した着眼點も正に是れで、正續兩篇、古今數十大家の各種名文を、放膽文と小心文とに鑑別して居り、卷首に、

#### 謝枋得の言

大凡、文を學ぶに、初めは膽の大ならむことを要し、終りは心の小ならむことを要す。藝より細に入り

俗より雅に入り、繁より簡に入り、豪蕩より純粹に入る。此の集は皆な藝枝大葉の文にして、禮義に本づき、世事に老け、人情に合す。初學之れに熟して、其の胸襟を開廣し、其の志を發舒せば、但だ文の易きを見て文の難きを見ず、必ず能く放言高論して、筆端窄束せざらむ。

と言つて居ります。禮義、世事、人情に通曉して、初めて眞の放膽も小心も本物であるといふ點を看過するわけにはゆきません。石天基も『胆の大なるを知らんと要せば、須らく學問中より來たるべし』と註して居る。學問知識により、正しく明かに物事の道理を究めることによつて、理路整然たる細心といふことも出來また正實公明なる知識見識は、おのづから自信と意氣とを養つて大膽となり、敢然放言高論することをも得しめるに至るのであります。

#### 三多の法

だから何と云つても先づ學ばねばならぬといふわけですが、その學ぶことに就いて、古人に三多の法といふのがある。先づ古人先覺の名作、文範を勉めて多く讀むこと、次いで讀んだ物を心に多く考へること、そして心構へと手法を會得して、今度は自分で多く作ること。多讀、多思、多作の三多であります。これは特に文章のことばかりでなく、詩歌俳句にも、また雄辯法にも、更に廣く事務業務乃至處世一般の上に應用し修練せらるべき要訣と申すべきであります。

#### 八十翁の歌

雨森芳洲は世に知られた儒者であるが、八十一歳のとき初めて和歌を學ばうとの志を發し、今の三多の法で『古今集』を繰り返し讀むこと一千遍、これが趣味と練想に二年を要し、それから三年間に、自作の和歌三萬首に上つたといふことあります。まことに欽すべく學ぶべき志氣精力ではありませんか。

ならひつゝ、見てこそ知るれ習はずに



よしあしいふはおろかなりけり(蜀山人)

### 一五、心地涼爽之藥

凡遇不得意事。試取其更者譬之。心地自然涼爽矣。此降火最速之藥。  
凡そ意を得ざる事に遇はゞ、試みに其の更る者を取つて之れを譬へよ。心地自然に涼爽ならむ。此れ降火最速の藥なり。

事が自分の思ふやうに成らないと、誰れでも氣をわるくする、或はイラノ／＼して焦せるか。或は悲觀憂鬱滅入つてしまふか。若しくは絶望の極、自暴自棄に陥るか。大ていは此のいづれか、又は此のいづれもの並發かの傾向を免れないものでありますが、かうした心の動き、傾きは、惰力的加速度を以て、失敗、不如意に拍車をかける効果を増すのみであります。

心理作用の妙

さういふ場合には、一時その直面せる現實を忘れることです。人間の心的作用には、注意の轉換、記憶の忘却、觀念聯合などの妙用があるから有り難い。かうした作用によつて、人は當面の現實から、飛躍的に超逸することが出来るのです。その忘却法、轉換法を『試みに更る者を取つて譬へよ』と教へて居るので、眼前の失意とは正反對なる得意快心の場面へ、心を放ち入れて見るのです。心機一轉、目先を新たにすると、沈んだ心も浮き、動搖の心も靜まつて、憂鬱の雲霧はカラリと晴れる、ソコに新たな精力がまた發揮されるので、失意より得意へ、失敗より成功への道が開けるといふものです。故にこれを以て『降火最速の藥』と

す、心火逆上の状態を平靜に降すに、一番速効的の妙藥は、氣分轉換、サツパリした心になるに限るといふのであります。

### 二六、吉 凶

行合道理。不卜自吉。行悖道理。縦卜亦凶。人當自卜。不必問卜。  
行ひ道理に合はゞ、卜はずとも自づから吉なり。行ひ道理に悖れば、縦ひ卜ふとも亦た凶なり。人當さに自ら卜ふべし。必ずしも卜ひに問はざれ。

文意は甚だ明瞭です。自分の行ひが眞實の道理に合つて居れば、何も吉凶を卜占に問ふ必要はない。行ひが正しければ、卜はずしておのづから吉であり、行ひが不正なれば、たとひ卜ふといへども凶である。だから吉凶は自身に問へば明かなことで、卜占に問ふ必要はないといふのであります。

迷信と自信

まことに簡にして而も明、全くこの通りであるべきで、人は誰れも此の道理は一應承知して居ながら、實際に自分が何か思案にあまる不幸逆境に行きづまると、すぐ當惑して、吉凶の占ひやマジナヒなどの迷信に陥るのが頗る多いことは、文化を誇る一等國人として、大に慚ぶべく悲しむべき事實であります。迷信打破は、正常なる知識——常識、科學知識——を鏡として照して見れば、おのづから暗い影は消え去るので、要は此の正常の心を保つといふ修養工夫に在りといふに歸せられる。これには前項の、氣分轉換、心地涼爽の一法も妙であるが、一體、自分が自分の事に當惑し、自分で解決出来ないで卜占に問ふといふのは、全く自



信がないからで、固き信念がないといふのは、あまりにも自己中心に執着し、凝り固まる爲めに、何でもない正常の事も見えなくなるのです。故に自ら省みて俯仰天地に恥ぢずとの自信があれば、吉凶はまさに自ら卜すべし、何ぞ必ずしも卜占に問はんやで、自分の信念を以て、自分の心を吉にも凶にも指し向けることが出来るのであります。

天海僧正の祈禱

徳川三代將軍家光の時、江戸城の北の方に當つて、毎夜怪しい火柱が立つといふ噂が高くなり、豪傑家光もつひに氣にし出した。若しや近いうちに此の城が大火災にかゝるのではないかと、使者を天海僧正の許に遣つて、吉凶の判断ならびに除災の祈禱を頼み込んだ。天海はそれを斷つて應ぜず、使者の詰問に答へて、『自分が明け暮れ佛天に祈ることは、天下國家の安寧幸福に在り、徳川一家の小さい事にかゝはつて居る如き暇はない。江戸城に火がついたら焼けるぢやらう。火は焼く物にきまつて居る。火の吉か凶かは卜ふには及ぶまい。焼けるのが恐はいなら火の用心に限る。また焼けたらドシ／＼建てたらよい。その位の事が出来ぬやうでは徳川の天下も見込みはないといふものぢや』

といはれたので、これを聞いて、さすがに賢明な家光、直に天海の眞意を諒會して、物々しい祈禱などは沙汰止みとなつたが、その後江戸城には何の異變もなく、一代の治政は後世に永く誦はれるものとなつたのであります。

おしなべて心ひとつを知りぬれば

うき世にめぐる道もまどはず

### 二七、貧時、富時

貧賤時。眼中不着富貴。他日得志必不驕。富貴時意中不忘貧賤。一旦退休

必不怨。

貧賤の時、眼中に富貴を着けざれば、他日志を得たるとき必ず驕らず。富貴の時、意中に貧賤を忘れざれば、一旦退休したるとき必ず怨みず。

成金根性

本文の主旨は、要約すれば、貧賤の境遇に在るときには、決して富貴に眼を着けるな。そして富貴の身に成つたときは、却つて貧賤を思へといふのであります。孔子は『富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行へ』と教へ、孟子は『富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず』と言つたが、かういふことは、君子、大丈夫と稱せられる人格に於て見られる面目であります。常人凡夫はナカ／＼これが出来ない。世俗によく言ふ『成り上り者』『成り金』根性が、どうも治し難い病ひなので、貧賤の者は富貴に對してムヤミに羨望と嫉妬との情を沸かし、富貴の者は貧賤に對して、只だ優越感を懐き威張り散らす。いづくんぞ知らん、人生は井戸の釣瓶の昇り降り、昨日は人の身の上も今日は我が身にふりかゝる。誰れか貧、誰れか富と豫斷も決定も出来るものではありません。勤勉努力、今の書生が大臣大將にも、一代の富豪にも成り上がることもあり、また一時の顯榮から忽ち轉落して誰れも相手にして呉れぬと云つた幻滅を見ることもある。かうした外的變轉の條件によつて左右せられるといふのであつては、人格そのもの、價



人格の價值

値はゼロで、價値はたゞそれら外的條件のみに在るといふわけではありません。

人格の價値は物にあらず、精神に在り。この精神的眞價、尊嚴を保つてこそ人格存在の意義があるので、その修養の一法として、貧賤の時には富貴に眼をつけず、終始、質實恭儉を以て通すこと、さうした良心の習性は、成功榮達の身に成つても決して『志驕らず』さもしい成金根性などは出さない。いはゆる『富貴も淫せず』の君子たるを得るのであります。また富貴の身分であるならば、常に心に貧賤の境遇を描き、自分に引きくらべて見ることによつて、前者と同様質實恭儉の良習性を保持することが出来るから、たとへ一朝貧賤に轉落するの運命に遭はうとも、決して世を怨み人を恨む如き精神動搖を來たさず、貧賤にも移らず、菜根を咬んで悠々自ら樂むの境地も見出されるといふのであります。

二八、不到不知

不到極逆之境。不知平日之安。不遇至刻之人。不知忠厚之易。不經難處之事。不知適意之巧。

極逆の境に到らざれば、平日の安きを知らず。至刻の人に遇はざれば、忠厚の易きを知らず。處し難き事を経ざれば適意の巧を知らず。

極處體驗自知

非常の逆境に行きつかなくては、平生無事の時が如何に安らかなるものであるかの眞味は知ることが出来ない。『至刻』トテも殘酷な、沒義道の人物に打つかつて見なければ、忠實篤厚の行ひが、人としていと易

き常道であることの意味が味ひ知れない。また何とも處置解決の方法もないといふやうな困難な事を乗り切つた者でなくては、適意快心の手段の眞價は知ることが出来ないといふので、石天基が『歷て後、方さに明かなり』と評して居る通り、人生萬事、體驗的に究めて初めて極致妙趣が會得せられるといふに歸するのであります。

人、一たびしてこれを能くせば、己れこれを百たびす。人、十たびしてこれを能くせば、己れこれを千たびす。果して此の道を能くせば、愚なりと雖も必ずや明に、柔なりと雖も必ずや強し。(中庸)

蚊帳を出て又障子あり夏月(文章)

二九、成業刻苦

成大業。致大名。決非逸豫可得。必自刻苦中來。若自刻苦中來。須有圓

木驚枕之意。乃可。

大業を成し、大名を致すことは、決して逸豫して得可きに非ず、必ず刻苦中より來たる。若し刻苦中より來たらば須く圓木驚枕の意有つて乃ち可なり。

大事業に成功し、輝かしい功名を博するといふことは、決して安樂な、ノンキな氣構へや行動を以て得られるものではない。それは必ず骨身を削るやうな、深刻なる艱苦の中から成し遂げられるのであるといふ。大小の事すべてがさうで、結果だけ見れば、何でもないこと、甘いものやうに見られがちですが、その結



果するまでの素因並びに過程に於ては甚だ多種多様な事情條件を伴はないものはないので、古今東西の英雄豪傑、乃至、詩人文豪、實業家、發見發明家等の成功と名譽とは、いづれも命がけの、慘憺たる艱難辛苦が、無數の前提として積み重ねられて居ることは、多くの傳記、物語によつて皆人のよく知らるゝ所で、擧げて例示するに違なきほどであります。

かくの如く、成功名譽なるものは必ず刻苦によつて、將ち來たされるといふ事實を知るならば、『圓木驚枕』の心持で努力すべしといふ。これは宋の名臣として有名な司馬光（溫公）の故事で、司馬光は青年時代に、寢食を忘るゝほどの猛勉強を爲したが、眠るときには圓形の木を枕として、ちよつとしても動轉して驚覺するやうにし、睡魔を拂つて勉強したといふことです。

『艱難汝を玉にす』とか『梅は寒苦を歷て清香を發す』とか、人口に親しまれて居る金句格言も多くあることですが、西哲の語にも、

西哲の警句

艱難を知らざる人より不幸なるはなし（ヂミトリアス）

不幸艱難の時最も偉大なる人格を生ず。猶ほ最も純なる鐵は最も熱せる竈より生じ、最も赫やける電光は最も暗き嵐の中に現はるゝが如し。（コルトン）

艱難は、始めて人を見る時に、必ず咆哮して齒をむき出すといへども、一旦之れを馴致するときは、その口より蜂蜜を見出すことを得べし。（マツシンヂャー）

新井白石と庭訓

など頗る味ふべきものがあります。新井白石は、立志奮勵、刻苦成功の標本として知られて居るが、彼れはその父與右衛門正濟の庭訓を、幼年の胸に刻みつけ、以て生涯を通したといふことで、その庭訓とは、

男兒はたゞ事に堪ふことを習ふべきなり。これを習ふには、何事にもあれ、我が極めて堪へがたく思ふことより堪へ始めぬれば、久しくしては、さのみは難事と思ふ事はあるべからざるなり。

といふので、事艱克服の修養工夫として何人も心得べき一法であります。西郷南洲の述懐にいふ。予、壯年より、艱難といふ艱難にかゝりしゆゑ、今日は、どんな事に出遇ふとも動搖は致すまじ、これだけは仕合せなり。

### 三〇、三 論 三要

#### 論理要精詳。論事要剴切。論人要渾厚。

理を論ずるには精詳ならむことを要し、事を論ずるには剴切ならむことを要し、人を論ずるには渾厚ならむことを要す。

簡にして明、而も盡きざる旨味を含蓄して居り、壁書箴言とするに快適のものであります。文意は特に解釋の要もありません。『剴切』は共にキルと訓む字で、近接至極の意、ピタリ、シツクリとよく當てはまることで、『唐書』魏徵傳に『凡そ二百餘奏、剴切にして帝の心に當らざる者無し』とある如き例であります。『渾厚』はオットリとオホマカなことで、よくいふ『重箱の隅を楊子ではじくる』の正反對なる態度であります。石天基の註が甚だ要領を得て居ります。曰はく、

精詳なれば則ち疑似を介せず。剴切なれば則ち浮夸（淺薄皮相）に近づかず。渾厚なれば則ち苛刻に流れ

剴切渾厚



### 三二、惡中之善、善處之惡

爲惡而畏人知。惡中猶有善念。爲善而急人知。善處即是惡根。

惡を爲して人の知らむことを畏るゝは、惡中に猶ほ善念有り。善を爲して人の知らむことを急まるは、善處即ち是れ惡根なり。

良心の命令

人の本性は天に享くといひ、天性の本徳は一の誠であり、人に在つて之れを誠にする之れを良心といふので、良心の命令に従つて行動するが善、これに違背するのが惡と、大體標準づけられる。それで若しヒョット物欲に引かれて惡の道に脱線したとき、他人からそれを氣づかれたら困る、恥かしいと思ふ一念があるならば、それは猶ほ良心が全く麻痺して居らぬので、善の光りが全く消え去つたのではない。微光を掻き立て、更に明るくすることも出来るといふものであります。

聖話三人醉狂

『舊雜譬喻經』に三人醉狂の訓話があります。釋尊が遊化の途上、三人の醉漢に出遭つたが、そのうちの一人は、佛の尊容を一見するや否や、急ぎ逃げ出して、叢の中に身を隠した。第二の男はベツタリそこへ坐り込んで、何やらワケのわからぬタワごとを卷き舌で喋り散らしてゐた。第三の醉漢は、威丈高に、大聲で啖呵を切つていふことに、

『俺ア酒なんか酔つちアるねエ、何も逃げ隠れするにア及ぶめエ』

と、千鳥足で傍若無人に踊り狂ふのであつた。釋尊は隨行の阿難尊者を顧み、誠へ諭された。

『さきに逃げて叢の中に隠れた者は、當來彌勒佛の時に至つて成佛するであらう。次なる者は未來千佛を禮するに及んで證りを得るであらう。最後の者は到底佛の縁はないぞよ』

三品の人

と、自己反省を以て、罪惡を罪惡と氣づき、人に見られて恥かしいと思ふ心、その心自體が惡を清算して善に遷るので、これは上品の人とされる。惡の自覺なきも、自覺反省の可能性を存する者が中品の人、惡を自覺しながら之を改めざるは、つひに極惡に到る、之れ下品の人とされるのであります。

また善い事を爲して、それを鼻にかけ、名利を要求する如きは、是れ亦た純眞なる良心を冒瀆するもので誠の心ではない。若し求むる條件が充たされなければ、何を仕出かすか知れない心、此の不純なる心自體が早や惡の根、不善の萌芽と申すべきであります。

實勝つは善なり。名勝つは恥なり(周茂叔)

實を努むるの心一分を重んずれば、名を努むるの心一分を輕んず。全く是れ實を務むるの心なれば、即ち全く名を務むるの心なし。(王陽明)

### 三三、自己檢點

要知自己是好人壞人。只於五更頭睡醒時。檢點思想的是甚麼便見得。

自己是れ好人か壞人かを知らむと要せば、只だ五更頭睡り醒むる時に於て、思想的是れ甚麼ぞと檢點して



便ち見得せむ。

自分が善良な、立派な人格者であるか、それとも何の役にも立たぬヤクザ者であるかを知らうとならば、夜の明けがた（五更）は午前四時、頭の字は其の頃といふほどの軽い意味の助字）睡り足つて目が醒めた時に、自分が内面抱懐して居る所の思想の何であるかを、自分で仔細に取り調べて見るがよい、（的は之の字に代へて見るべく、甚麼は常用會話語センモ、何といふ字に同じ）

人間は鬼はるぬともいふべきに

心の問はゞなにと答へむ（矢部駿河守）

わが心の中には、善し悪し様々な考へを蓄へて、人には知れず秘めて居るが、自分の良心には、自分の思ひを隠すべき術がない。而して孟子が夜氣を貴ぶと言つた如く、夜來安眠して目覺めた瞬間には、人は誰れでも此の良心が最も明徹であります。故に曉天五更、天地の大氣蒼々として、萬象すべてまだ靜寂なるとき獨り自己思想の如何を検討し來たれば、さながら閻魔の廳の淨玻璃にかけられた如く、眞安明暗の心の姿が歴々として照映する。こゝに於て肅清一番、本來自己の面目を見得るといふ。これは最も眞劍に、毎晨實地にやつて見て其の妙味を知るべきであります。理論學得ではどうしても此の本面目は見透されるものではありません。純一なる清澄の心を以て自己検討を爲し、これに徹底するところに『便ち見得』といふ悟境に到達せられるのであります。

みな人の本の心はますかゞみ

良心明澄の時

みがかばいかで曇りはつべき（室鳩巢）

三三、倚 勢 恃 智

倚勢凌人。恃智愚人。猶如登山。自謂身高。但恐太陽當空。冰山消釋。

則身落泥塗。置足無所矣。願以爲戒。

勢に倚つて人を凌ぎ、智を恃んで人を愚にするは、猶ほ氷山に登つて、自ら身高しと謂ふが如し。但だ恐らくは太陽空に當つて、冰山消釋すれば、則ち身は泥塗に落ちて、足を置くに所無けむ矣。願はくは以て戒と爲むことを。

禍福は綱へる繩の如しで、人生の苦樂浮沈は常ならず、自己の變轉は自ら豫測することは出来ないが、人は境遇に支配せられて、得意には有頂天になり、失意には自ら滅入つてしまふばかりでなく、人を恨み世を怨むといふあんばいで仕末がわるいのです。

一時的の得意に陶酔し、優越の態勢を背景として他人を壓倒するやうな振舞ひをしたり、僅かばかりの世智才能を恃んで人を馬鹿にするといふ如き輩は、たとへて見れば、氷の山に登つて自身の高きを誇るやうなもので、やがて太陽が大空に輝くところ、氷の山は自然に溶けて消えゆき、高いと思つて居た身は、地面に轉げ落ちて泥まみれになるといふ醜穢の狀を暴露しなければならぬ。『不義にして富めるは浮雲の如し』といはれる所以で、まことになさけないことである。人は之れを以て戒めと爲し、常に言行を慎むべしといふ

單純なる自己陶酔



高慢梵志

ので、亦た好諭善誠と申すべきであります。

昔、印度の拘淡尼國クダニに一人の梵志ボンシ（婆羅門教の道士）があり、天性聰敏にして各方面の知識技能を究め、つひに高智大才、天下に匹敵する者なしと自惚れるに至つたが、或る日彼れは、白晝に炬火かざして城中の大路小路を横行濶歩したので、人々驚異してそのわけをたづねると、彼れは傲然と、

『世間のヤツらは、俺から見れば、兩眼あつても木の節穴同然、お先き眞つ暗といふべき愚か者ばかり、物の道理を知るの明がない。それで俺が皆人のために道筋を照してやるのぢや』

と答へるのでした。人々はあきれて誰れも相手にしなかつたが、彼れはいよ／＼獨り天狗の鼻を高めるのみであつた。釋尊がそれを憐んで、或る日、彼と同じ梵志の姿で彼れの前に現はれ、四明を以て問はれた。四明といふのは、

四明

一、天文地理に明かにして、よく四時を調和すること。

二、星宿に明かにして五行をよく分別すること。

三、治國の法に明かにして、綏化宜しきを得ること。

四、兵を將ゐることに明かにして、固く守つて失ふことなからしむる事。

といふのですが、彼の梵志は之れを知らなかつた。そして炬火を地に投じ、禮を施して教へを乞うた。こゝに釋尊は端嚴なる佛身を現じて一偈を説いて示された。

若し多少聞くこと有れば

自ら大として以て人に憍る

是れ盲の燭を執るが如し

彼れを照せども自らは明ならず

なほ淳々と諭されたので、梵志は五體を地に投じて懺悔轉向し、佛弟子となつて正しき道に精進し、つひに淨き證りを得たと『法句譬喻經』に見えて居ります。小智小得を以て他に誇るは、全く盲の手燭の如き憐れさと申さねばなりません。

手はつけど頭の高い蛙かな（逸名）

三四、天 堂、地 獄

行一件好事。心中泰然。行一件歹事。袞影抱愧。即此便是天堂地獄。

一件の好事を行へば、心中泰然たり。一件の歹事を行へば、袞影に愧を抱く。即ち此に便ち是れ天堂と地獄とあり。

好心と愧心

どのやうな事にせよ只だ一つでも好い事を實行した時の心持は、誰れしも愉快で、安らかに心満ち足りるものであり、その反對に、一つの好くない事を爲した時は、『袞影に愧を抱く』で、中夜就寢の後、萬籟寂として、良心獨り冴ゆるとき、しみ／＼と反省され、慚愧悔恨の念を禁じ得ない。これはその程度の差こそあれ、無能力者でない限り、何人にも體験的に首肯せられる事實であります。此の安泰愉悅の心境が即天堂、極樂であり、悔やしい、愧かしい心そのものが即地獄の苛責であるといふのであります。——歹の字は



音がツ、サレボネと訓ず、醜怪なる骸骨で、最も厭はしいものですが、轉じて好の反對の意を表はすに用ひ、『悖德逆行を歹と爲す』とも註解せられて居ります。――

地獄餓鬼畜生阿修羅佛菩薩

何にならうとまゝな一念

火の車造る大工はなけれども

おのが造りておのが乗りゆく

地獄、極樂、乃至、六道、十界すべて衆生の安心煩惱から展開する、自業自得の現象であると説くのが佛敎の建前で、經典には、一心淨ければ國土淨しとか、地獄等も客觀的存在ではなく、衆生の惑業の反映であるといふやうな意味が、諸所に説かれてあります。刑務所は罪人があるから設けられるので、犯罪事實が若し皆無であるとするならば、裁判所も刑務所も、自然消滅の道理だといふのと同じ様子であります。

念佛婆さんの往生

念佛婆さんとアダムを取つたほどに、明けても暮れても、居ても起つても念佛を口に絶たなかつた老婆が、娑婆をお暇するや、絶對無條件で極樂往生が出来ると確信し、一生涯の念佛を大八車に山と積んで、得得として冥途の旅を進んだことであるが、三途の河から地獄道の方へ導かれ、閻魔の廳に立たされたので、大八車を指しながら猛烈に異議を申し立てた。そこでその山積の念佛を獄卒共が唐箕にかけて吹きかけて見るに、みな糞くそ見たやうなもので正味がなく、箕の中間から落ち残るのが一つもない。いよ／＼惡道落ちと決定せられんとしたとき、最後にコト／＼と微かな音がしたので、よく調べて見ると、小豆のかけほどの小粒ながら、正味のある念佛が見出された。ソレをやつと極樂参りの仲間入りが出来た。淨玻璃にかけて審査

の結果、此の婆さん一生の念佛は雜念妄慮の形式的カラ念佛であつたが、只だ一度、曠野で身近に落雷があつた時、眞劍、命がけて『南無阿彌陀佛』と絶唱し、其の場に氣絶したことがあつた。その一唱が小粒ながら正味であつたことがわかつたといふことです。

六祖の垂誡

一心、只だ純一無雜の一心、この外にないといふことを知るべきであります。『六祖法寶壇經』に慧能禪師は示して居ります。

十惡の心を斷ぜざれば、何れの佛か即ち來迎し請さむ。若し無生の頓法を悟らば、西方を見ること只だ刹那に在らむ……自性悟れば即ち是れ佛。慈悲は即ち是れ觀音、喜捨を名づけて勢至と爲す。能淨は即ち釋迦、平直は即ち彌陀……貪瞋是れ地獄、愚痴是れ畜生なり。

若し不善の心を懷かば、念佛するも往生し到ること難し……念々に見性して常に平直を行ぜば、到ると彈指の如くにして便ち彌陀を見む。

極樂も此の通りなり益の月（物外和尙）

### 三五、聰明誤事

大凡聰明之人。極是誤事。蓋惟聰明生意見。意見一生。便不忍捨割。往往溺於愛河慾海者。皆是聰明之人。

大凡聰明の人、極めて是れ事を誤る。蓋し惟れ聰明なれば意見を生ず。意見一たび生ずれば、便ち捨割す



るに忍びず。往往にして愛河慾海に溺る者、皆な是れ聰明の人なり。

こゝに聰明の人とは、世に謂はゆる才子肌の人といふ意味が多分に匂ひ出て居るので、才走つて目先きのよく利く、何をさせても人一倍の働きを見せると云つた風な人、それがよく失敗するといふのであります。一體どういふわけかといふに、聰明で、才智技能に豊かな頭の持主は、どうしても自己の意見を先き立てたがる。それには自分が精神を傾倒した意見だといふ自負と愛着が伴ふもので、そいつがナカ／＼割愛し難い。此の自己中心の執着が、往々偏狭執拗なる私見私慾に囚はれて『愛河慾海』の深みに、知らず識らず溺れさすやうなことになる。俗に『萬能ありて一心足らず』といふ。または『器用貧乏人寶』など言はれる類で、私見固執の爲めに、全局、大勢に通ずる一般條理を、つひ見損ずることになり、利巧にして却つて馬鹿な失敗を招くことが多いのであります。聰明が決して悪いのではない。之れは人に大事な徳の一つであるが、只だあまりに自己を中心に、己見に囚はれるのがよろしくないので、聰明をして暗愚に如かざらしむるに至るのであります。されば石天基も、之れに附記して、

若し能く愛慾を識破して沈溺を爲さざれば、縦さに是れ眞に聰明の人なり。

と言つて居ります。孟子の言に『大人とは赤子の心を失はざる者なり』とあるが、赤子の如く天真爛漫、無邪氣にして、此の私心執着の疾ひから救はれ、能く公明正大の心を以て、事に當ることが出来るのであります。

才子元來多く事を誤る

議論畢竟世に功無し

誰か知らむ黙々として理を言はざるを

山は是れ青々花は是紅 (西郷南洲)

### 三六、一 忍 一 恕

己情不可縦。當用逆法制之。其道在一忍字。人情不可拂。當用順法調之。其道在一恕字。

己れの情は縦にす可らず。當さに逆法を用ひて之れを制すべし。其の道は一の忍の字に在り。人の情は拂ふ可らず。當さに順法を用ひて之れを調ふべし。其の道は一の恕の字に在り。

人の二大徳

人は自他相對の間に於いて、相互に我情我見を押し通さうとしたのでは、角突き合ひになり何事も平和圓滿に治まるものではない。且つ前來しば／＼言へる如く、我見は人の不徳であり、謙遜にして他の爲めに自分を譲るのは、美しく望ましい善行であるので、此の美德を保ち人の道を完うせんとするには、先づ自己本位の情念をほしいまゝにしないことが肝要で、我情にはその鋒尖を挫くべく逆手を用ひ、頭を出させないやうに制壓するがよい。その制壓の道は他なし、只だ一の忍の字に在り、忍耐、勘忍——これは前に出た——に限るといふのであります。

これと反比例的に、他人の情は、無下に押しつけることはよくない。押しつけ打ち拂はうとすること其の



ことが、早や我情を縦にして居るのである。自分を引つ込める代りに、相手の情意に逆らはず、出来るだけは之れに順應し、然るべく調和することに努むべきで、その道は只だ一の恕の字に限るといふのであります。恕の美德についても前に述べた筈ですが、曾子が『夫子の道、只だ忠恕のみ』と讃嘆して居る如く、恕の一字は聖人の理想とする仁と相通する博大の徳で、寛容仁恕など熟用されることのある、神の愛、佛の慈悲とも内容的に同じ様子が見られるのであります。

片倉小十郎  
と近侍

伊達家の老臣として令名を誣はれた片倉小十郎の近侍で、澤村五郎、奥田清七といふ二人は、交情水魚の如き仲であつたが、或る時、小十郎の手文庫中より百兩金紛失の事件があり、寛厚の小十郎が温言以て諄々として、理をせめての調べに、如何なる不心得者でも、最早白状せざるを得ないハメとなつたとき、澤村五郎が卒然と名乗り出て成敗を乞うた。と同時に、奥田清七が『眞實の不心得者は私奴にござりまする』と悲愴な言容を以て自首して出た。二人は互ひに、自分こそ、自分こそと争うて決しなかつたが、しばらくジツと黙念して居た小十郎は、やがて他の者は皆な退けて、只だ二人だけに就いて、眞實を吐けと促したが、二人とも自分だと云つて相譲らなかつた。奥田が必死の面持で言ふところを聞くに、彼れには老いて病める母があり、家貧にして醫藥も得られず、命旦夕に迫り、つひに主人の金に手をかけ、奥醫師良庵に診療を頼んだ、證人として良庵を呼んで問うて下さらば明了であるといふのであつた。

腕こまぬいて聞いてゐた小十郎は、急に晴れやかな顔色を見せ、言葉いよく、温和に、

『いや、これは飛んだ予の失態であつた。兩人共許せよ、予は昨日アノ金子を使つたことを、つひ失念して居つたのぢや。しかし兩人も怪しからん、何故取らぬ物を取つたと虚言を吐いて我を張るぞ。金子僉議の事

は、予の過ちとして片はついたが、汝等兩人が主に虚言を吐いた罪は許すわけにゆかぬ、兩人は十日間の謹慎を申しつける。立て！』

といふことで一件は解決を見た。十日の謹慎がすむと小十郎は二人を呼び出して、  
『その方達の處置はすんだが、元を正せば予の思ひちがひであるから、予の粗忽を詫びるしとして、兩人へ五十石づゝの加増を取らするぞ』

と言ひわたした。金百兩は奥田がたしかに一時の思ひつめた心の過ちで盗み取つた、その事が、かうした美しい情義と情義とを以て結末づけられたのであります。謂ふところの忍と恕との活ける範例と爲すに十分であります。

### 三七、不勞無用之人

人生於世。未有不勞心力者。或勞心而不勞力。或勞力而不勞心。若不勞心。又不勞力。乃餓孳無用之人。

人の世に生くる、未だ心と力とを勞せざる者は有らず。或は心を勞して力を勞せず、或は力を勞して心を勞せず。若し心も勞せず、又力も勞せざらんは、乃ち餓孳無用の人なり。

心を勞すとは精神的労働、力を勞すとは筋肉労働で、人は此の世に生存する限り、誰れでもが、馬鹿か氣狂ひか幼老病者かでないものは、皆な働かなければならぬ。人々の地位や業務には、それ／＼の別ありと



も、或は精神的勞務、或は筋肉勞働、何れかの方面に於て、謂はゆる職域奉公の實を擧げないならば、一個の人たる資格も價値もない、人生の意義はゼロだといはねばなりません。故に心も力も勞すること無き者は『餓李無用の人』であるといふ。李の字は、フと發音すると葦の薄皮のことになり、ヘウと讀むと飢ゑ死の意になる、今は後者で、働かなければ食へない、食へないから當然餓死を免れない。死は人生の終末、即ち人生が全く無い人、即ち無用の人といはれる所以であります。孟子は『飽食暖衣、逸居して恥なき禽獸にひとし』と言つて居る。醉生夢死といふのも此の無用の人のことであります。

唐の百丈大智禪師が、高齡九十に垂んとするも、尙ほ若い雲水坊さん達と一しよに、毎日の作務(禪院の行持的勤勞)をせられるので、侍僧がいたはしく思つて、或る日の庭掃除に禪師の帚を隠してしまつた。かくて作務が出来なかつた禪師は其の日つひに食堂に赴かず、侍僧の問ひに答へて『一日作さざれば一日食はず』と言つたといふ話は、廣く人口に傳へられて居る。誠に千古の名言であります。

二宮尊徳の  
教訓

我が二宮尊徳には、勤勞節儉に關する多くの教訓があるが、その中の一つ――  
尊徳翁の血縁の者で川久保民次郎といふのが、翁の許に下男の様にして仕へて居たが、暇を乞うて國元へ歸ることになつた際、翁は懇々と誠へて言つたのです。

『たとへば、他所へ行つて、腹が減つて弱つて居るから、どうか一飯食べさせて下さい、そのお禮に、あとで庭を綺麗に掃きますと云つても、ちよつと一飯を振舞うては呉れまい。苦しくとも空腹をこらへて、先づ庭掃除を、まめやかにすれば、先方にわが誠實が通じて、一飯にありつくこともあらうといふものだ。わしが若い頃、たつた一挺の鍬が損じて役に立たぬので、隣家へ行き、鍬を貸して下されと云つたが、ちよつと

今畠を耕して菜を種まよとするとところだから、それが済むまでは貸すわけにはゆかんと、尤もな話だが、わしにすれば家へ歸つたつて、鍬がなければ、何もする事が無い。する事がないからとて何もせず居るのは天道様に相濟まぬ。ソコでわしは考へた。隣の畠仕事が早くすめば、それだけ早く鍬が借りられる、よし一番精出して隣の仕事を手傳はうと、その日一日は隣の畠でセッセと働いたが、先方は大へんに喜んで、快く鍬を貸して呉れ、尙ほ何品でも入用の物は遠慮なしに言うて來なさい、有る物は何でも用立てるか、と、親切に言うて呉れた。世の中の事、萬事この呼吸で、先づ働くことだ。國へ歸つて一家の暮しを立てることになつたら、常に此の心がけを忘れるでないぞ』

働け！働け！先づ働け！大に世の爲め人の爲め働くべきであります。

三八、古之學者、今之學者

古之學者。得一善言。附於其身。今之學者。得一善言。務以悅人。

古の學者は、一の善言を得れば、其の身に附く。今の學者は、一の善言を得れば、務めて以て人を悦ばす。

學問は何の爲めにするか、古來、修身齊家、治國平天下を標語としたことは、誠に至要を道破して居ります。一の善い言葉、一の善い事を學び得ても、直ちにそれを身に體し、我が身の修養に、我が家庭生活に、また出で、は國家社會の爲めにと心がける、謂はゆる學は是れ實學なりといふのが、欽尙すべき古人が學問



の態度であつた。然るに今人の多くは、學問をして何か一つ善い言葉でも覺えたと、我が身に附けるといふことはお留守にして、人に向つて説き、人の歡心を買ふことに務める。即ち名利の爲めの請け賣り學問であると、寸鐵的の皮肉警句であります。

利他の説法

道元禪師は、一事一善でも、これを東に聞かば、これを西に説くといふ如く、常に他の爲めに佛法を宣傳するのが菩薩行だといふ意味を説いて居られるが、これは正しい菩薩心に發する利他行で、他に向つて正しく眞理を説くといふには、無論一たびそれを我が身の血とし肉とするほどの體驗を透したものでなければなりません。本文にいふ『今の學者』の『人を悦ばす』といふのは、此のやうな深味のあるのではなく、淺薄な物識り面をする連中のことで、無益の學、無用の學……といふよりも更に有害有毒の學と申さねばなりません。

學問の心得

足代弘訓が學問の心得にいふ。

- 一、人を欺くために學問すべからざる事。
- 一、人と争ふために學問すべからざる事。
- 一、人を誹るために學問すべからざる事。
- 一、人の邪魔するために學問すべからざる事。
- 一、己れの自慢するために學問すべからざる事。
- 一、名を賣るために學問すべからざる事。
- 一、利を得るために學問すべからざる事。

三浦梅園が戯れに學徒に示せる文。

- 一、學問は飯と心得べし。腹に飽くが爲めなり、掛物のやうに人に見せんずる爲めにはあらず。
- 一、書物は金貨の帳のやうなもの也。金なき人の持たんは澁紙ふむほどの用にこそ。
- 一、學問は臭き菜の様なり。とくと臭みを去らざれば用ひ難し、少し書を読めば少し學者臭し。餘計書を読めば餘計學者臭し、こまり者也。
- 一、學問を芥のやうに思ふべからず。上に浮きたがる程に下地の水も今は飲まれず。
- 一、學問は置き所によりて善惡分る。臍の下善し、鼻の先惡し。
- 一、學問は輕業かろわざの様にするが惡し。輕業は人を目の下に見おろし、人の頭を踏むものなり。
- 一、衣裳うつくしく飾り、人にすかれんとするは賣女なり。人の見る時所作をなし、人に譽められんとするは歌舞戲のものなり。今の學者はどうやら此の眞似するやうなり。
- 一、碁の打ち様は、何時にても先を取れば負けぬものと我れも知り、兎角道理は呑込みよし、わざのきかぬが笑止なり。
- 一、足の皮は厚きがよし、面の皮はうすきがよし。人諸共に小賢しく口はきけど、行ひは女童よんごうに見限らる。さる故面の皮厚くなり、足の皮薄くなり、株なむこと多し、能く心得を謹むべし。

三九、安 足



非無安居也。無安心也。非無足財也。無足心也。  
安居無きに非ざるなり、安心無きなり。足財無きに非ざるなり、足心無きなり。

居は氣を移す

居は氣を移すといふ語がある如く、人はその居處の如何によつて、精神状態に大きな影響を受けることを免れない。されば坐禪を修めるも、専ら清淨閑寂の道場を必要とし、而もあまりに高明ならず、あまりに幽暗ならず、以て心の散亂したり、昏沈したりすることを防ぐべき条件が注意せられて居るといふほどであります。心の修養が十分出来れば、環境の外的条件などは問題にならず、到るところ是れ清淨安樂境と爲すことが出来るのであります。『無難禪師假名法語』に、

境に在らず  
心に在り

ある人悟らで山居せしよみてやりける。

おもふまゝに捨て、山路に入りぬれど

その身のぬしはもとのぬしなり

ある人さととりて山ふかく入りぬるよみてやりける。

山かぜもさとのあらしも身にしみて

おなじいろなる秋の夕ぐれ

といふのがある。世間がやかましい、うるさいと云つて山の奥へ隠遁しても、山には亦た山の雜音がある。

世を捨て、山に入る人。更に山を捨て、何處へ逃避すべきでせう。前にも擧げた杜荀鶴といふ人の詩に、

三伏門を閉ぢて一衲を被す

兼ねて松竹の旁廊を掩ふ無し

安禪は必ずしも山水を須ひず

心頭を滅却すれば火も亦た涼し

安分知足

次に『足財』とは、十分に足りたる財産といふ意味ですが、有つても、足りないと思ふ人の慾には、これで十分といふ限がない。しかし是れ亦た心足れば、すべてが足るの道理で、安分、知足が修養の大事な教として力説されるゆゑんであります。『聯珠』の中でも申した通り『知足の人は地上に臥すと雖も猶ほ安樂なり、不知足の者は天堂に處すと雖も亦た意に稱はず』です。居と同じく財に於けるも、自己の心に満足が無ければ、如何なる條件を完備しても、つひに満足の期とはありません。不知足の者は、

大名と扇がれながら暑さかな

で、火も亦た涼しいといふのは、極端なる對比であります。知足の人であれば、

暑き日や心すませば風の吹く

物持たぬたもと涼しや夏の月

と云つた樂天地が、どこにも待つて居るといふものであります。

人若し安足の心を了すること有らば、則ち隨地隨時、都て是れ快樂を享けむ (石天基)

四〇、三 不



務博之學不精。好大之願不副。過望之福不享。  
博を務むるの學は精ならず、大を好むの願は副はず。望に過ぐるの福は享けず。

間口と奥行

博學高識は望ましいことであるが、限りある人の頭腦は、たとへば同じ面積の、間口を廣くすれば奥行はそれだけ浅くなるといふ如く、只だ博學を是れ念とする者は、どうしても深く精しく通ずることが出来ない。精通しない知識では、たゞ物識りといはれるだけで、實學として役に立たないといふのです。

むやみに大きなことを目ざしても、その願ひは叶ひ難い。その身不相應の願ひは、それは理想ではなく、單なる空想に過ぎないからで、天の星ばかり見て居て足もとがお留守になり、溝に落ち込むといふやうな結果を招きやすいのであります。

人はたゞ身のほどを知れ草の葉の

露も重きは落つるものなり (水戸義公)

夢幻と現實

道理はおなじで『望みに過ぎたる福は享けず』一攫千金、濡れ手で粟なぞいふうまいことは、到底これ一場の夢幻でしかない。人生夢幻の如しとはいへど、吾々の生活は日々事々みな現實であります。現實を無視して、人生生活は有り得ません。而も此の一日一日が、永遠不滅なる生命の連鎖として、貴ぶべき一日であることは前にも申した通りで、此の一日を善く務めて意義あらしむること、これ以外これ以上の幸福はないのであります。道歌に、

長生きと福をねがはば働けよ

流るゝ水のくさらぬを見て

月雪も花ももみぢもぜに金も

わが身にあるぞ働いて取れ

四一、心中 矛 戈

矜字從矛。伐字從戈。心中如何容得矛戈。

矜の字は矛に從ひ、伐の字は戈に從ふ。心中如何ぞ矛戈を容れ得むや。

矜の三音三義

矜。この字には三音三義あり、(一)音キン、またゴン。矛の柄、また杖。(二)音キヨウ。哀れむ、惜しむ、苦しむ、等とも訓まれるが今はホコルの訓みで、矜驕と熟用され、自負尊大の義。(三)音クワン。男やもめの意。

伐の字

次に伐の字、これは誰れもよく知つて居る征伐のウツといふ字ですが、本來は、進軍に鐘鼓あるを伐と云ひ、之れなきを侵というたもので、謂はゆる旗鼓堂々の正攻法が伐、旗を卷き枚を啣んで間道より奇襲するなどは侵であります。しかし、今は征伐の意ではなく、殺伐の意、また自ら其の功に誇るの意。轉じて悖徳の義にも用ひられるのであります。

ソコで此の字體を分析して見ると、矜の字は矛をヘンにして居り、伐の字は戈をツクリにして居る。矛も戈も共にホコと訓み、人を殺したり傷けたりする武器である。人の心中に此の兇器を覆藏してゐるとは、ま



反省慚恥

ことに氣味わるいこと、醜いことではないか。自負自慢、獨りつけあがり、人もなげに振舞ふのは、正に此の兇器を振りまはすにひとしい狂氣沙汰であるといふのであります。

現代の青年男女は生意氣で困る、といふやうな歎聲を、一部の老人達からよく聞くことであります。時代は移り變り、思想の新陳代謝といふことは亦た止むを得ないことですが、青年は人生の春で、春に花開き新緑芽ぐむ如く、活力に矜り濃潤の氣溢るゝは、もとより青年の眞面目、然かあるべきです。しかし、氣に驅られ力に乗ずるところ、兎もすれば無反省なる放縱にまで發展してしまふ、その態度がナマイキにも、困り者にも成るので、無反省、無自覺は、人格上、處世上たしかに大きな疾患であります。この無反省の適樂は慚恥の心に限るので、臭いもの身知らず、自分の事は自分では氣づかない勝ちであるが、一たび反省自覺の眼が開くと、何人も恥かしいことだらけとなる。恥かしいと氣づけば二度と繰り返すまいと工夫する、ソコに精神の修養、人格の向上が見られるのであります。

謙虚にして充實

人には各々長所短所のあるもので、それが多くは個性に根ざし、全く取り換へ取り除くといふことは至難であるが、しかし生來の短所缺點も、自覺反省して習練と修養とを重ねるならば、初めの短所も後には顯著な長所と化することが出来る。と同じくその長所も、自負自慢のためには進歩向上を阻止し、折角の長所が即短所となる可能性が十分あることを、深く注意すべきで、古來、偉人賢者の人格に輝ける長所美點も、仔細に調べて見れば、大てい修養せられ洗練せられた後天的のものであるのが多い。此の修練の要諦は、才力、兇器と目せられる矜伐、即ち自負自慢を警醒鞭策し、萬事に謙遜を旨として、空虚の心に益を求め徳を充實するの工夫を怠らないことであります。空虚の者には受け入れる物みな美味を感じる。海綿が濡れてゐて

は何の吸收作用もありません。

四二、不妄語

以誠爲終身行己之要。而其行之也。自不妄語始。

誠を以て身を終るまで己れを行ふの要と爲せ。而して其の之れを行ふや、妄語せざることより始めよ。

天地一枚なる至徳

誠の一字、人の徳はこれに過ぎたるはなく、種々多くの徳目が列べ擧げられるが、歸する所は唯だ一の誠のほかには有り得ません。誠實、至誠、此の一を以て貫くならば、一生涯いつでも、何事にも間違のあらう筈なく、終身己れを盡して行ひきれない。天地と一枚なる至大の徳と申すべきであります。

而して此の誠を身に體し實踐するには、先づ「妄語せざることより始めよ」口に一切ウツを言はぬといふ修養を積みといふのであります。誠といふ文字自體が、言と成で、口に出す言葉が完全だといふ意味に取られ、これを日本語でマコトと訓むその日本語も全く同義であります。マは眞で純粹にして少しのまじり氣のないこと、コトは言葉です。即ち人の口に出す言葉は本來眞實にして不安なるべきものだといふ意味に解せられます。それはその筈で、人の本心は天地自然の純粹を享けて居るといふ建前から、内なる心が口を通して表示せられる言葉は、當然、心と一つでなければならぬは自明の理であります、それが本心を物欲に蔽はれて、誠ならぬ妄心をほし、にする人が大部分であるから、口に誠なくして、妄語虚言の應酬で、だまし合ひ偽り合ふ此の醜い人生が眼前に展開して居るのであります。故に絶対妄語無き人ならば、無條件で誠



司馬溫公と  
劉安世

心の有ち主と断定せられるわけになるのも亦た當然の理合と申さねばなりません。

本文の出處は多分、宋の名臣司馬溫公に據つて居ると思はれるのです。司馬溫公は至誠一貫の人として知られ、後世永く清範とすべき言行が頗る多く語られるのですが、嘗て自ら晁無咎といふ學徒に語つた言葉に、

『吾れには人に過ぎたるものなし。たゞ平生の爲す所、未だ人に言ふ可らざるものあらざるのみ』

とある。人に言へない事は一つもないといふに至つては、微塵も言行に眞妄表裏がないといふ高潔の自信、

實に偉らい人格ではありませんか。此の溫公に教を受けた劉安世といふ人が、

『心をつくし己れを盡して、身を終るまで行ふべきもの何を以て要と致すべきでありませうか』

と問うたに對し、溫公は、

『それ唯だ誠か』

と答へた。安世が重ねて、

『誠を行ふこと、何を以て始むべきか』

と問ふと、

『それは妄語せざることより始めよ』

と教へました。安世は、妄語せずといふ位のこと、何だ平凡なと、一向感服しない容子で辭し去つたが、その後、實際に當つて溫公の此の一語を念頭に置き、一々自省して見ると、公私大小の事、毎日々々何か衷心安んずることの出来ない安心妄語の暗い影を感じないでは居られない。言行一致、身口意清淨といふ自己満足の出來るといふのは、之れは實に容易のことではないと、大に自警して、一心に之れに努め、日に省み、

日々新たにするの工夫を重ねること七年に及び、始めて司馬溫公の教を身に奉ずることが出來たといふ自信にまで到達したといふことであります。理窟でなしに、此の劉安世の修養工夫を、何人もそのまま實地に修練體得するならば、亦た何をか言はんやであります。

妄語の言説は一切衆生を惱ます。彼れは常に黑暗の如し。命あれども死せるに同じ。(正法念處經)

實語の者は、布施、持戒、學問、多聞を假らず、但だ實語を修めて無量の福を得。(智度論)

君子は九たび思ひて一たび言ふ。(孔子)

言必ず信あらざれば行必ず果さず。(孟子)



## 下、家寶

### 一、敬 上

天。地。君。親。師。此五件。世人都該感激。都該設牌位。早晚焚香叩謝。

切不可懈怠。做個忘恩負義的人。

天と地と君と親と師と、此の五件には、世人都て該な感激し、都て該な牌位を設け、早晚に香を焚いて叩謝すること、切に懈怠す可らず。做す個は忘恩負義的人なり。

『傳家寶』全四十卷の第一卷には、事親。敬長。和妻。教子。治家。待人。重儒。安分。行善。戒惡の十章が收められてあり、各章に六項を擧げ可なり長文であります。今その中から隨宜小節を抜萃したのが、(一)より(一〇)まで、(一一)以下は『快樂神言』『快樂聯珠』その他から選び採つて『家寶』の一篇としたものであることを、おことわりいたしておきます。

此の本文の前に、

天覆地載。日月照臨。風調雨順。都是天地莫大之恩。

といふ語句があるのですが、天地廣大の恩恵については今更申すに及びません。それで天地と國君と兩親と

### 八大恩德

師長とを並せ、八大恩德として禮讃して居るので、而もこれに對する感謝感激は、絶對至上のものたるべきを強調し、世の人は都てみな除外例なく、此の八つの尊位を標示せる牌を設けて淨き壇上に安置し、朝に晩に、香を焚き叩頭禮拜して、洪大の恩德を感謝すべきであるとし、これを行持として決して懈り缺かしてはならぬ。敢て懈怠を做す者あらば、それは恩を忘れ義にそむく人で、人たる資格のない者だといふのであります。日用行持として、このやうな嚴肅な威儀型式は、極めて大切なもので、無知無心の幼兒時代から、父兄の威儀にならび、それが長じて精神的に習慣づけられるところに、實に微妙の功德が味はれるものであります。

### 嚴肅なる威儀

古來我國の各家庭には、神棚と佛壇とが設けられ、朝夕、皇太神、その他の神々を拜し、祖先の靈を禮することになつて居るが、正に本文の理想を實現し來たれるものと申すべきであります。但し、正月だけの神棚、お盆だけの佛壇で、平日は蜘蛛の巣と鼠の糞に委して顧みずといふやうであつては、およそ意味ない限りであります。禪院では、本尊正面の壇上に『今上牌』を安置し、月の朔日十五日には、早晨必ず『祝聖』と稱して、特に誦經、

今上皇帝聖壽萬安

と唱へて祝禱し奉り、年中毎朝の行持勤行に、必ず『皇國鞏固、國土昇平、萬民快樂』の廻向祈念を爲すことになつて居る。かうした行持儀式は甚だ大事なものであります。されば道元禪師も『威儀即佛法』と高唱せられ、印度のベダンタ學者ラーマクリーシナが、

米を得んとして、親のない米を播いても米の實は生らぬ。宗教の儀式もこれと同じで、儀式は種子の外

米と親

下、家寶



皮である。眞理に透達せんとする者は、儀式を通さなければならぬ。

と言つて居るのは知言といふべきであります。斯様な意義に味到して、本文を身を以て讀まれんことを勸奨いたします。

靈棚の奥なつかしや親のかほ (去來)

### 二、君 恩

皇上大恩。每年用俸祿。給養官員。爲官的。就該盡心愛養百姓。鋤奸懲惡。興利除害。不受賄賂。不聽情面。就是報答皇恩了。爲百姓的。只要安分守己。莫作非爲。錢糧早早完納。解濟的需。不煩官府催捉。凡事讓人。不與爭訟。就是報答皇恩了。

皇上の大恩。毎年俸祿を用つて、官員を給養す。官爲る的是、就ち該な心を盡して百姓を愛養し、奸を鋤き惡を懲らし、利を興し害を除き、賄賂を受けず、情面を聴かざること、就ち是れ皇恩に報答するなり了。百姓爲る的是、只だ分に安んじて己れを守り、非爲を作すこと莫く、錢糧は早々に完納し、解濟的需は、官府の催捉を煩はさず。凡そ事は人に譲り、與に争訟せざらんことを要す。就ち是れ皇恩に報答するなり了。

皇室上御一人は國民の大御親と仰がれ、その御恩徳の廣大なることは、特に我が國に於て、今更申すも畏

官途に在つては

き極みであります。こゝには臣として國政に當る官員と、民としてそれらの立場に在る者との二面より、齊しく奉公の忠誠を致すべきことを教へて居るので、年々、皇上より俸祿給養を受けて居る官員たる者は、各自擧つて爲官的的的是近體文または會話語の常用字で、多くの場合、何々のといふ格助詞の如くに用ひられるが、こゝは者の字に代へて見ればよく當る。就該は即皆に同じ——心を盡して百姓人民の生活を愛護し、安寧秩序を損ふ如き奸邪は雜草を鋤き取るやうに根絶やし、惡事を懲戒して、國利を盛に興し、民福を計つてこれが弊害を除くことに心を用ひ、自己の進退は飽くまで公明廉潔に、いやしくも賄賂を受けたり、情實的面接をしたりする如き瀆職行爲があつてはならぬ。能く此の心を體現することは、皇上の大御心に副ふので、即ち皇恩に報答する所以となる。了の字は、文法的に云へば、現實完了の形。また斷定的の意を強めた助詞、いはゆる置き字ですから、ヲハルと讀むに及びません。

人民として

次に百姓——農民に限つた意ではない、一般人民の意——は、各々その身分に安んじて自己の地位を守り、生活上、不正の行爲あることなく、年貢租税等の金品は早々に、遲滞なく完納し、當然納むべく解決され定まつて居る需を納めずして、官廳の催捉を煩はす如き手数をかけてはならぬ——普通には催促と熟字するのを、今は捉の字にして居るが、促はセマル、捉はトルで大意には格別の相違なし——凡そ何事でも謙遜を旨として他人に譲るやうにし、以て我見我欲の爲めに争ひ、訴訟を起して官に厄介をかけぬやうにする。以上が人民としての心得の肝要で、かくすることが、皇上の赤子として純心を盡すので、即ち皇恩に報答する所以となるといふのであります。

おこたらず祈るも御代の爲めなれや

下、家 書



君と神とに身はつかへつ、(津守國夏)

### 三、親 恩

備仔細想。備身體。是何人生出來的。就知道父母大恩了。備仔細想。備乳哺饑寒。是何人撫養的。就知道父母大恩了。備仔細想。備懷抱時。痧麻痘疹。一切風寒病症。是何人醫救的。就知道父母大恩了。備仔細想。備今知南知北。識長識短。是何人指教的。就知道父母大恩了。要知父母一團心血。全全放在兒子身上。然後纔得長大成人。是以父母大恩。比同天地高厚。並非虛言。

予有常歌云。我能數盡青絲髮。只有親恩數不來。因其恩多難盡也。

備仔細に想へ、備が身體、是れ何人より生出し來たる的ぞと。就ち父母の大恩なりと道ふことを知る。備仔細に想へ、備、饑寒を乳哺する、是れ何人の撫養するの的ぞと。就ち父母の大恩なりと道ふことを知る。備仔細に想へ、備が懷抱の時、痧麻痘疹、一切の風寒病症、是れ何人の醫救するの的ぞと。就ち父母の大恩なりと道ふことを知る。備仔細に想へ、備が今南を知り北を知り、長を識り短を識ること、是れ何人の指教するの的ぞと。就ち父母の大恩なりと道ふことを知る。父母が一團の心血、全全兒子の身上に放在して、然る後、纔さに長大成人するを得たることを知らんことを要す。是を以て父母の大恩は、天地の高厚なるに比同すること、並びに虚言に非ず。予常に歌うて云へること有り。我れ能く青絲の髮を數へ

盡すとも、只だ親恩のみ有つて數へ來らざると、其の恩多くして盡し難きに因るなり。

知恩者は  
報恩者

父母は我が身の本、父母無くしては此の身が有り得ない、之れは甚だ明白な事實であるが、我が身の今日あるに至るまでの父母の大恩を知らずに過して居る人が多い。が、恩の字が、因る心と書き、その因つて來たる所を思ふの義で、よく之れを思ひ之を知ることによつて、知恩感謝の誠も表はされるといふもので、古徳が『知恩者は報恩者』と言つて居るのも此の道理であります。

そこで、父母は我が身の根元であることを知るのが第一、次には父母の乳哺によつて饑寒なきを得たといふ撫育の恩、また幼稚にして父母の懷や膝に抱かれて居た頃より、今日現在の手足が伸びるまでには、その間『痧麻痘疹』熱病や痘疹や麻疹など(痧は癩の俗字)その他、風を引いたり種々の病氣にかゝつて命の危いこともあつたらうに、それらを醫し救つた父母の恩、また東西も辨へぬといふほど、物事を何も知らなかつた者が、南北長短、ものの善し惡し、いろ／＼と覺えたといふのも、みな父母から教へられた賜であるといふやうに、一々現在の身を父母に還元して本を考へ想ふならば、如何に父母の恩の廣大であるか知られる。實に父母の心血は一團となつて我が子の上に放ち置かれ、その全身心を子の爲めに犠牲にせられるもので、父母心血の結晶が即ち吾等が成長せる現在の身心であるといふことが出来るのである。よく父母の恩は山よりも高く海よりも深しなどと、廣大なる天地の姿になぞらへて言はれるのは、すべて眞實の事、決して虚言ではない。われ(石天基)は常に此の父母の大恩を想ふの歌を口ずさむことであるが、その歌は、

我れ能く青絲の髮を數へ盡すとも

父母心血の  
結晶



只だ親恩のみ有つて數へ來らず

髪の毛を數へるといふのは出來ないことであるが、それが假りに出來るとしても、父母の慈恩の數々は到底數へ盡せない。そんなにも多くの恩徳を受けて居るといふのです。和歌體にして見れば

みどりなす髪は千々とも數ふべし

親のめぐみは數も知られず

忠孝一本

拙譯ですが、こんな意味であります。なほ『忠臣は孝子の門に出づ』といふ語もあつて、父母に對する純眞なる至情は、そのまゝ、君に對しては忠となる。のみならず此の純情は即ち一の誠を出でないので、人生各方面に擴充されて凡ての道德を完うすることになる。即ち『孝は百行の本』と謂はれるわけであります。この意義は、萬邦無比なる我が大家族主義の日本國體に於て、特に然りである所以を深く思はねばなりません。

ちゝ母はわが家の神わが神と

心つくしていつけ人の子(本居宣長)

#### 四、尊 長

尊敬長上。不是甚麼難事。只要備記着兩件。外面要備禮貌謙下。内裏要備

心地和平。

長上を尊敬することは、是れ甚麼の難事にあらず。只だ備兩件を記着せむこと要するのみ。外面は備禮貌謙下ならむことを要し、内裏は備が心地和平ならむことを要す。

長上とは、一般にいふ目上の人であります。これには、家庭上、社會上、年齢から見、位地身分から見、或は精神的に、或は物質的に、知識、名譽、權勢、財産等々いろいろの條件からいはれることであります。いづれにしても、目下の者が目上の人に對して尊敬し、長上よりは下位を慈しみ導くといふことによつて、人生は美しく、即かに、安寧秩序も保たれ、幸福増進の一步々々を上つてゆかれるので、最も大切な道德であります。

今これが實踐の肝要を教へて居るのですが、『甚麼の難事にあらず』甚麼は何といふ俗語、何のむつかしいこともないといふのです。それは只だ二つの事を心に銘記して忘れないことで、一は外面的、身にあらず方面、他の一は内面的、心を修め調へることであるとし、外面的には禮儀を正しくし謙遜の態度で、長上にへり下り仰ぎ見るやうにすること。内面的には心を溫和平安に保つこと、心、平和安定を得なければ、外貌態度も素直にゆかず、無禮になるのは必然であります。只だ此の二つだけでよいといふのですが、此の二つの事が容易でないので、石天基も此の章中、別の一節に於て、

如今風俗澆漓(浮薄の意)人情奸險にして、這の尊長の二字を把つて、全く心裡に放在せず、其の病根は只だ名分を把つて見て軽んずるが爲めなり。或は聰明を恃み、或は意氣を恃み、或は富んで財有るに倚り、或は實にして勢有るに倚る。一味傲慢無禮、恣睢(怒ること)何の所としてか至らざらむ。上を犯すことより始まり、違悖することに終る。所以に天下第一種の凶人は、多く目中名分有ることを知らざるより、漸を積んで成すなり。

と慨嘆して居ります。名分を明かにしなければ義理は立ちません。翻つて首めに掲げた『天地君親師』の五

内外二面の肝要

名分を知らざるの過



件を根本に、ついでに弟妹の兄姉に對する、後進の先覺に對する、若輩の父老に對する、卑賤の富貴に對する、等々あらゆる方面に、名分義理を正し、禮讓を紊らず、以て處世圓滿を期すべきであります。

あみの糸の一の筋目のたがふゆる

みだれにけりな人の世の中(逸名)

### 五、和 妻

夫妻和好。自然淑氣滿門。家道也漸興旺。每日也甚快樂。其取和好之法。須要彼此親愛。恭敬如賓。貧富也要相安。貴賤也要相守。也不可倚着家資厚積而驕傲。也不可靠着身勢貴顯而欺凌。就是夫妻中有不是的事。也要彼此包容忍耐。委曲勸諭。令其聽從改正。不可就生嗔忿。

夫妻和好なれば、自然に淑氣門に滿ち、家道も也た漸く興旺にして、毎日也た甚だ快樂なり。其の和好を取るの法は、須く彼此親愛し、恭敬なること賓の如くなるを要す。貧富也た相安んずることを要し、貴賤也た相守ることを要す。也た家資厚積せるに倚着して驕傲なる可らず。也た身勢貴顯なるに靠着して欺凌す可らず。就ひ是れ夫妻の中に不是的事有りとも、也た彼此包容忍耐し、委曲に勸諭して、其れをして聽從改正せしめ、就ち嗔忿を生ず可らざることを要す。

夫婦の道は相和するに在り、眞に和合してシツクリと適好なるを得ば、期せずしておのづから、慶幸の氣

### 和好の法は 愛と敬

分が家門に滿ち漲り、家業も幸運の一途を辿つて興隆旺盛になり、毎日年中甚だ愉快安樂の生活を爲すことが出来る。其の和好の方法如何といふに、お互ひに親愛すると同時に、親しい仲にも禮儀ありの慎しみを忘れず、恭敬なること賓客に接するが如くせよといふ。これが頗るむづかしいところで、親愛は兎角馴れやすく、恭敬といふつゝ、まじさを没却して、無遠慮、無作法に流れがち、ソコからつひ和合の破綻を來たすのであります。人倫道德いづれの方面にも大事なものは此の愛と敬との一如圓融なるに在りと申すべきであります。特に夫婦道に於いて、これが必要は最も切實なることを注意しなければなりません。

此の親愛と恭敬とを中核として結合する以上、貧富貴賤などの條件は問題ではない筈です。しかし、凡夫常人は得てこれらに支配せられることを免れないものですから、これにも注意して、如何なる境遇身分に、或は上り或は下らうとも、夫婦は一身同體二世も三世も變らじと、終始一貫、外的事情に心を動搖異變せしめず、苦樂禍福すべて、身も心も一つにして安んずべきには俱に安んじ、守るべきには一しよに守り、財産や權勢に倚りかゝつて、驕つたり、欺いたり、辱しめたりするやうな態度があつてはならぬといふのであります。

### 終始一貫

若し夫妻の間に、就ひ(こゝでは縦と同義)過ち間違ひの言行があらうとも、そのときは互ひに寛大な心に相手を包容し、我が心をじつと抑へこらへて、『委曲』事細かに勸告説諭し、その正しからざることを反省自覺せしめ、過ち改めるやうにすべきで、就ち(これは直ちの意)イキナリ怒つて頭からドヤシつけるやうなことはするなといふ。これは多くの場合、妻よりも夫の方の心得とすべきものであります。何と申しても『夫唱婦隨』で、夫を主とし妻が之れに隨うてゆくのでなくては、家庭圓滿はむづかしい。







を成すことを得む。

教へざるの罪

家庭から、立派な子孫が出るのも、不肖不良の者が出るのも、それは只だ父兄が善く教育したか、せぬかといふことが起因根源を爲して居る。『他』カレ子孫に、早くより節儉質樸といふことを教へなかつた結果は、長じて必ず奢侈華美を好む人間となる。教ふるに辛苦勤勉を以てしなかつた結果は游治郎、なまけ者になり、忍耐の徳を教へて置かなかつた結果は、怒りつぼく争論を事とする我がまゝ者となり、謙遜恭敬の美徳を教へなかつた結果は、『倨傲』と、自ら尊大ぶつて、人に高ぶるといふ、自慢高慢馬鹿の者を造り上げる、といふ如く、『此に出で、彼に入る』即ち教へないといふ此の事に發して、以上種々の不良不良なる彼の如き結果に了る。これは當然の理合であつて、もとより怪むに足りない。

世間の人は、但だその因つて來たる所を考へずに、出世とか、墮落とかの形のみを見て、『那の一個生下來』那はアノ、アレといふ意味の用字です。アノ人は生れつき賢人だなどといふが、よく考へて見れば、それはやはり善く教訓を受けたといふ素因が必ずあるものだ。同様に亦た、アレは生來の惡人だなどいふのも、本は教育修養といふものがないからである。譬へて見れば、如何に立派な素質の璞でも、初めから琢いて細工を施さないとしたら、それは石コロ同然の廢物である。何として世に珍重せられるやうな名器と成らう。また如何に成分に富んだ田地であつても、耕し鋤いて害草を去り土壤を整へないならば、單なる荒地に過ぎず、どうして豊かな米の稔りなど望まれよう。人の性情に於ける教育修養は正に之れと同じ様子であるといふので、平凡な説のやうであります。實際に、各家庭の父兄たる者は深く留意し、大に努めねばならぬ大

廢玉荒田

切なことであります。國家の總力といふ上に最も重要なものは、實に國民の教育、精神の向上、思想の洗練にあるは、申すまでもない所であります。

なほ原文中には種々精細なる教子の法が示されてありますが、子の教育は最も早く胎教より始むべきことを注意して、

教へば早くより始めよ

試みに古の婦人を看よ。一たび懷孕有れば、就ち目に邪色を視ず、耳に淫聲を聽かず、這れ叫んで胎教と做す。生子形容端正にして、聰明人に過ぐる所以なり。

と言つて居り、生れた子は、その白紙状態の最も染まり易い嬰孩の時より教ふべしと爲して、

子を教ふるの法は、全く幼少の時候に在り、古人説ふ、婦を教ふるは初めて來るときにせよ。子を教ふるは嬰孩のときにせよと。

と云ひ、また教育の根本は、五倫の人の道を教へるより始むるに在りとして、恰も教育勅語の御示しの如き義理合を強調して居る等、その精到の用意は敬服に値するもの多々であります。今は割愛せざるを得ません。

まめやかにおふし立てなば宿毎に

花も咲くべし實もむすぶべし(鳥丸光廣)

## 七、治 家

人家勤儉二字。乃是根本。勤則無廢弛之事。儉則無空乏之虞。人所不能做的



事。我能做得勤也。人所易盡的物。我猶存得儉也。婚喪諸事。各要相稱。寧

可朴實。莫學奢華。不然用多進少。未免貧苦求人

人家勤儉の二字、乃ち是れ根本なり。勤なれば則ち廢弛之事無く、儉なれば則ち空乏之虞無し。人の做す能はざる所的事、我れ能く做し得るは勤なり。人の盡し易き所的事、我れ能く存し得るは儉なり。婚喪の諸事は、各相稱ふことを要す。寧ろ朴實なる可く、奢華を學ぶこと莫れ。然らずんば用ふることも多くして進すこと少く、未だ貧苦して人に求むることを免れず。

勤儉の二字  
是れ根本

人が一家を立て、善くこれを齊へ治めてゆく上に、根本肝要なものは、勤儉の二字に在るは明白で、何人も異存なきところ、勤勉なれば、生業に廢れ弛みといふものがなく、儉約なれば、生活物資が缺乏して困るといふ虞れがないからであります。さてその勤儉とは何ぞやといふに定義づけて「人の做す能はざる所的事我れ能く做し得るのが勤」の義であるといふ。(做の字は作の俗字)

人が能くせざる事を能く爲すのが勤であるといふのですが、突つ込んで見ると、能はざるにあらず爲さざるなりで、成せば成る事も、成さぬが爲めに成らぬといふのが、世人の大部分が云ふ所の能はざる事で、眞劍になつてやれば出来ない事ではない、此の眞劍味のあるのが勤で、これの無いのが怠といふことになるわけであります。

二商人の山  
越

近江商人といへば、勤勉を以て一種特異の存在の如く稱せられるが、昔、一人の近江商人と、他國の行商人とが道伴れになつて、名にし負ふ碓氷峠にさしかゝつた。折柄夏の炎天で、重い荷を負うての山越えは實

に苦しかつた。他國の商人がいふには、

『此の峠が、もう少し低いとよいがなア、わしは此の高い坂を越すたびに、こんな苦しみをする位なら、いつそ商賣を止してしまはふかと、いつもよく思ひますよ』

と、近江商人は笑つて、

『私は反對に、此の山がもつと、此の十倍も高ければよいがなアと思ひますよ。さうすると大ていの商人はこゝを越せず、みな後へ引返すから、自分ひとり向ふへ越して大儲けが出来るのにと、此の山の低いのが残念ですわい』

と言つた。人一倍の成功を望まば、人一倍の勤勞努力を要する。勤と怠、成と敗は、實に此の志氣動向如何が分岐點であります。

次に儉の意義は、人が易々と用ひ盡す物を、能く保存し得るに在りといふ。これも要領を得た言ひ表はして、多くの人は、物有れば有るにまかせ、氣を大きくして使ひ捨てる、それが贅澤といふもので、絶對必要に迫らなければ、一紙半錢も無駄にせず、大切に扱つて仕末する、而も只だ惜むのではない、必用に應じて大に用ひんが爲めの用意とするといふのが儉の義であります。勤といひ儉といひ、いづれも一點の利己主義を挾むことが禁物で、人一倍働くのも、一紙半錢を大事にするのも、すべて大乘的に、天地の恩徳に如同して、これを人生に活かし用ふるといふを以て精神要諦とするところに、深く貴き意義が存するのであります。

それから婚禮葬式は、人倫の大儀として重んじ慎まねばならぬが、世俗多くは虚禮虚儀に流れるのは慨かましい。『諸事各相稱ふことを要』とすべきで、即ち分相應にすればよい。寧ろそれは質朴にして篤實なる

虚禮虚儀



べく、徒らに形式的な奢侈華美を尙ふ輕薄を學んではならぬ。さらでなく虚榮に走るならば、無駄の費用の爲めに、その後家財を増すことが出来なくなり、果ては貧苦を人に訴へて救ひを求めねばならぬやうな惨めさに陥ると、細かい注意を與へて居るのであります。

なほ勤勉と懈怠とについて、家道興隆の道は早寢早起に在り、夜ふかし朝寢は家運消散の兆であるとの意で、次の如く警めた一節があります。

早起早睡を勤む

人家須らく早起早睡ならむことを要す。則ち事懈悞無くして家道興隆せむ。我れ毎に有る等の人家を見るに、晚間事無しと雖も、或は是れ閒談。或は是れ飲酒。亦た必ず更深くして纔かに睡り、乃ち日高きこと幾丈、人來つて門を敲けども尙ほ睡夢に在り。日を以て夜と作し、夜を以て日と作す。陰陽の顛倒消敗の兆なり。

『心學教訓圖繪』に『家内繁昌の妙藥法』といふのが見えて居ます、並せて参考に、

家内繁昌の妙藥法

一、正直篤實を合せて百匁。一、忠孝、身を粉にして百匁。一、儉約質素にして一斤。一、五常仁義禮智信と、よくよく選り別けて五兩。一、勘忍五兩。

以上の藥、調合に念入れ、毎日朝起きして慈悲の袋に入れ、あしき友を除き、水一生を入れ案じ用ふべし。驕奢りたるをよくよくすまし、費へを省き用ふべし。禁物は色と酒と慾、その外差合せなし。是れ延壽長久の良藥なり。用ひて其の効能を知るべし。

### 八、待人

縱有以非禮加爾的。爾只管平心和氣。以禮相待。自始至終。只是忍讓。就是極不好的人。久久自然感動了他。這就是待人的法則。須要切切記着。若親友和睦。鄉族無嫌。一人相爭。幾人來勸。一家有事。幾家來解。替爾商量調處。定然息鬧解紛。

縱ひ非禮を以て爾に加ふる有りとも、爾只管に平心和氣、禮を以て相待ち、始より終に至るまで、只だ是れ忍讓せば、就ひ是れ極めて不好の人なりとも、久久にして自然に他を感動せしめむ。これ就ち是れ待人的法則なり。須く切切に記着することを要すべし。若し親友和睦し、郷族嫌ふこと無ければ、一人相爭はんに、幾人來りて勸め、一家事有らんに、幾家來りて解き、爾に替りて商量調處し、定然として鬧を息め紛を解かむ。

待人の三病

これは、親族、朋友、隣人その他の社交上、人と接し應待する上の修養を説いたものであります。原文には此の前の節に於て、凡そ待人に三病ありとし、一には人を損し己れを利すること、二には強を争ひ勝を好むこと。三には自ら妄りに尊大なることを擧げて居る。今この裏を言つて居るので、縱ひ他人が非禮を加へて來ようとも、専ら『平心和氣』怒らずニコ／＼して、こちらは反對に禮を施し、終始只だ忍耐と謙遜で受けながして居れば、相手がよしんば極惡といふほどの人物であつても、長い時間、變らず辛抱強く對して居るうちには、つひにコチラが平正親和を以てする偽りなき心に感動するやうになる。是れが即ち人に接するの法則である。切實にこれを心に記憶して忘れぬがよいといふのであります。西有穆山禪師が或る老婆に授

穆山禪師の禪機妙用



けた眞言陀羅尼といふのに、

オン、ニコニコ、ハラタツマイゾヤ、ソワカ。

これを絶えず口に唱へて、身口意の三業一致に至れば、たしかに平心和氣、以て暴漢をも感動せしむる功德利益がありませう。また同禪師が、或る人の需めに應じて書かれた竹の圖の賛に、

我有大力量 風來則能伏

といふのがあつた。是れは謂はゆる終始忍讓で、佛の遺訓に『忍を行ずる者は有力の大人と爲す』とある意に通じ、以て如何なる相手をも心服せしむることが出来ませう。

『若し親友和睦、郷族嫌ふこと無ければ』といふ以下、これは今日の隣組の教條としても、最も適當です。彼此相互、和氣平心、勘忍謙讓で、親友和睦し、郷黨、親族みな忌み嫌ふこともないといふ間柄であるならば、時に或は一人が争ひを起して、自分に迷惑を及ぼして來たといふ如き場合ありとするも、それを聞き知つた幾たりもの人々が驅けつけて、かの一人をなだめ、和解して圓く納めて呉れる。また一家に、婚禮、葬儀、出征など、吉凶何事か有るといふ時には、幾軒もの人々が寄て來て事を解決し、當事者本人に替つて、萬事を商議し、うまく調へ處置して、すべてキチンと騒ぎもゴタ／＼も治めて呉れる。これはみな終始變らぬ平和忍讓を以て人を待つからであると、肝要は平和禮讓に存するのであります。

### 九、安分

世人各有本分。雖大小不同。若肯安分。到底都有受用。如何呼做本分。凡

爲士的。只去讀書。爲農的。只去耕田。爲工的。習學技藝。爲商賈的。買賣

經營。這就是本分了。如何呼做安分。凡爲士農工商的。各務了本等的事業。

也不去游惰放蕩。也不去作歹爲非。一心只在本業上做工夫。這就是安分了。

世上不安分的。有兩個病根。其一病在懶。其一病在貪。

世人各本分有り。大小同じからずと雖も、若し肯て分に安んずれば、到底都て受用有り。如何なるか呼んで本分と做す。凡そ士爲る的是、只だ去つて讀書し、農爲る的是、只だ去つて田を耕し、工爲る的是、技藝を習學し、商賈爲る的是、買賣經營す。這れ就ち是れ本分なり了。如何なるか呼んで分に安んずると做す。凡そ士農工商爲る的、各本等的事業を務めよ。也た去つて游惰放蕩せされ。也た去つて歹を作し非を爲さざれ。一心只だ本業上になつて工夫を做すこと、這れ就ち是れ分に安んずるなり了。世上の分に安んぜざる的、兩個の病根有り。其の一病は懶に在り、其の一病は貪に在り。

人の世に在るや、その境遇地位等により、大小區々の相違はあるが、人々にその本分といふものがあり、各自がその本分に安んじ已れを守り完うすれば、みなそれ相等の働きを爲すものである——到底は、終ひに、結局、といふやうな意——では一體本分とは何かといふに、具體的に云つて見れば、士、今日では文武の官吏、學者等に成るには、讀書即ち學問知識の方面に頭を使ひ、農家は耕作の事に、工匠は技術習練に、商人は賣買營業の事にといふ様に、それ／＼必須の能力修得に専念する、それが謂はゆる本分であると申すのです。

本分とは何



然らば其の本分に安んずるとは、どういふ意味かといふと、『本等の事業』即ち各々が志向し擔當する職務家業に、専念邁進することで『去つて游惰放蕩せざれ』去つては、到る、赴くの意で、自己本務の埒外に氣を移すことをいふ。歹は好の反對で不良の事。つまり本職本業に當つては一心専念、精魂を打ち込んで、遊び氣分、なまけ心、不良の考へなどは嚴封せよ、それが分に安んずるの義であるといふのであります。

二個の病根

世の人、この本分に安んずることをせずして、游惰不良へ脱線するのは、二つの心の病に根ざるので、その一は懶、なまけ心で仕事に身が入らぬもの、もう一つは貪、私心私慾を貪り追求するものは是れである。故に先づ邪なる欲望を咬るやうな條件に近づかぬやう、そして心の駒に鞭つて、自肅緊張、職域奉公に精進すべしといふのであります。この自己中心の我欲を一切捨て、目標を公明に高く建つところに、分に安んじ、本分使命を完了する貴き意義が存するのであります。

すべての信實なる職業の前提條件は、仕事に對する愛ではなくて、人類に對する愛でなくてはならぬ。その仕事人類を良くするとの信念の下に、その仕事を愛するといふのでなくてはならぬ。かゝる愛に充たされたるものだけが、價値ある仕事をなし得るのである。(トルストイ)

一〇、善 惡

善惡兩個字。若提起善來。人人喜歡。若提起惡來。個個惡嫌。這就是良心天理。不會昏昧的眞面目了。大都人心善惡。無他他說。凡舉念可以告人。就可以

告鬼神。這就是善心。不可以告人。就不可以告鬼神。這就是惡心。

善惡兩個の字、若し善を提起し來らば、人人喜歡せむ。若し惡を提起し來らば、個個惡嫌せむ。これは是れ良心天理、曾て昏昧せざる眞面目なり了。大都人心の善惡、他説無し。凡そ舉念以て人に告ぐ可く、就ち以て鬼神にも告ぐ可くんば、這れ就ち是れ善心なり。以て人に告ぐ可らず、就ち以て鬼神にも告ぐ可らざるは、這れ就ち是れ惡心なり。

天理良心の眞面目

善と惡、この二個の字を別つ標準を、手近に見ようとならば、何でも一つ善い事を實地にソツクリと示せば、人々誰れでも喜歡ぶであらう。また反對に一つの悪い事を丸出しにして見せれば、誰れも皆な惡み嫌ふであらう。これは各人の内面殿堂には、良心なるものがある。良心は天地自然の純なる眞理を宿して居るので、明鏡に美醜を映照する如く、善惡を有りのまゝに鑑別して誤まらないのである。即ち常には人欲の妄心で覆はれて居ても、奥底に天理のまゝなる良心の本面目は、曾て昏昧まされることがない。故に此の良心の命令に従つて行動すれば間違ひないわけでありませう。

『大都人心の善惡他説無し』今いふ良心天理の鏡にかけて照らし出せば問題はないので、『舉念』わが心念全體をアカラサマに、人の前に打ち明けられるといふのは、露ほども良心に恥づるところがないので、同時に天理に戻る所なく、目に見えぬ鬼神に對しても、毫も畏るゝことなく、思ふ通り告白出来るわけである。これが即ち善であると、けだし善の至りであります。

惡心は正に此の裏ですから、味ますことの出来ない良心天理を如何ともし難く、人に對しても、神明に對